

熊谷市史調査報告書 第一集

胄山根岸家資料報告(1)

— 考古資料・古瓦 —

二〇一五

熊谷市教育委員会

熊谷市史調査報告書 第一集

胃山根岸家資料報告（1）

― 考古資料・古瓦 ―

発刊に当たって

熊谷市教育委員会教育長 野原 晃

熊谷市史編さん事業の開始後、多くの市民の方々から永らく保存されてきた様々な資料の提供を得ています。その種類と量は古文書や写真、民具などの資料まで膨大なものとなっています。まさに熊谷の歴史と文化の幅の広さと厚みを感じさせてくれます。編さん事業を進めるなかでは、これら資料の調査研究と保存を図るため、本編の刊行と共に民俗報告書や史料集を刊行してきました。引き続き本年度は「青山根岸家資料報告（1）」を作成しました。

青山根岸家は、幕末から明治期の熊谷にとって政治と文化面に多大な貢献を遺した友山・武香父子を輩出しています。特に文化面では日本考古学史に銘記される黒岩・吉見横穴の発掘を行い、国指定重要文化財「中条出土武人埴輪」の保存にも尽力しています。また、あまり知られていないようですが「菟古舎」という現在の博物館に相当する施設を埼玉県で最初に設立しており、先駆的な試みとして評価されています。

本書報告の資料はその文化面での活動を証左するもので、現在でも考古学及び古代史研究上貴重な資料となるものです。当時の研究水準を顧みても、約一三〇年を経て現れた資料の価値は、この資料が正しく保存されてきたことから、いささかも損なわれていません。ここに根岸家の地域貢献と文化活動の一端を紹介し、本書が学術資料としても広く活用されることを願います。

最後に、根岸家をはじめ、資料調査及び報告書作成まで、御理解と御協力をいただいた関係者の方々に深く感謝申し上げます。

発刊によせて

この度「熊谷市史編さん事業」が進められている中で史料集の刊行の一つとして『青山根岸家資料報告（1）』が発刊されることになりました。

このことは根岸家にとっても、地元住民にとっても大変喜ばしいことと深く感謝申し上げる次第です。

根岸家は北武蔵の青山（現熊谷市）の地に移住以来、約四〇〇年の歴史を築いてまいりました。この間、地域住民との共存をめざし、地域の人々の温かいご支援とご協力により現在に至っております。

根岸家資料は当報告書で述べられているとおり、莫大なものがあります。この中で明治期の当主で古物蒐集家としての顔を持つ根岸武香の功績を、新しい視点から発表された事は、これからの熊谷の地域研究のお役に立つものと期待してやみません。

最後にこの資料を作成していただきました熊谷市史編さん事業のスタッフと関係者の皆様に改めて深く感謝申し上げます。

第十七代当主 根岸友憲

熊谷市史調査報告書 第一集

— 青山根岸家資料報告(1) 考古資料・古瓦 —

発刊に当たって

発刊によせて

目次

例言・凡例

第I章 根岸家資料について

第一節 根岸家と資料の概要……………1

第二節 「好古家」根岸友山と武香……………2

第三節 根岸家資料中の「古瓦」……………5

第四節 小 結……………12

第II章 「古瓦」資料の報告

第一節 軒丸瓦……………25

第二節 軒平瓦……………27

一 重弧文 二 均正唐草文 三 偏行唐草文
四 中世・その他

第三節 文字瓦……………32

一 郡名・郷名 二 人名・符合 三 その他

第四節 丸瓦・平瓦・堤瓦・中世瓦……………41

第五節 朱書き注記の瓦……………41

第六節 遺物観察表の表記方法……………48

第III章 結 語

資料の評価と意義……………57

補 註……………58

遺物図版

遺物観察表

写真図版

挿図・表

第I章

- 図1 根岸友山肖像写真
- 図2 根岸武香肖像写真
- 図3 『吉見村誌』付図
- 図4 青山周辺出土品図1
『集古』会誌挿図
- 第6号
- 図5 根岸武香「弔辞」
東京人類学会
- 図6 亀井村瓦陶窯趾分布図
『埼玉縣史』第2巻

第II章

- 図A 軒丸瓦各部位名称
- 図B 下総国分寺跡出土軒丸瓦
- 図C 山城清水寺出土(採集)軒丸瓦
- 図D 軒平瓦各部位名称
- 図E 軒平瓦285・286型式
- 図F 軒平瓦287型式
- 図G 瓦当部製作技法分類模式図
- 図H 顎形態分類模式図

第1	図	軒丸瓦(1)	1
第2	図	軒平瓦(1)	11
第3	図	軒平瓦(18)	11
第4	図	軒平瓦(25)	18
第5	図	軒平瓦(31)	25
第6	図	文字瓦(37)	31
第7	図	文字瓦(47)	37
第8	図	文字瓦(55)	47
第9	図	文字瓦(64)	55
第10	図	文字瓦(74)	64
第11	図	文字瓦(84)	74
第12	図	丸瓦(93)	84
第13	図	平瓦(98)	93
第14	図	平瓦(107)	98
第15	図	平瓦(116)	107
第16	図	文字瓦集成(1)	116
第17	図	文字瓦集成(2)	120

堤瓦(113) ~ (115)

表

表1 ~ 5 遺物観察表

写真図版

扉 旧「菟古舎」
図版1 軒丸瓦(1) ~ (10)
図版2 軒平瓦(11) ~ (17)

図版3	軒平瓦(18)	18
図版4	軒平瓦(25)	18
図版5	軒平瓦(31)	25
図版6	文字瓦(37)	31
図版7	文字瓦(47)	37
図版8	文字瓦(55)	47
図版9	文字瓦(64)	55
図版10	文字瓦(74)	64
図版11	文字瓦(84)	74
図版12	丸瓦(93)	84
図版13	平瓦(98)	93
図版14	平瓦(107)	98
図版15	平瓦(116)	107
図版16	文字瓦集成(1)	116
図版17	文字瓦集成(2)	120

堤瓦(113) ~ (115)

※

I章の図1・2・4・5、図版扉写真は根岸友憲氏は根岸友憲氏同図3は埼玉県立浦和図書館より提供いただいた。同図6は同書より転載した。

例言

- 一 本書は平成二十六年刊行の「熊谷市史調査報告書 第一集 ―青山根岸家資料報告(Ⅰ) 考古資料・古瓦―」である。
 - 二 取り扱った資料は、熊谷市史編さん事業に伴い、平成十九年度から青山根岸家より貸し出しを受けた根岸家資料の一部で、古文書を除く考古資料を中心とした資料群である。その中でまとまりを持つ古代瓦類を対象として報告するものである。
 - 三 資料整理の方法、経過は次のとおりである。

なお、古文書を主とする資料群は順次資料整理し目録化を進めている。

熊谷市教育委員会社会教育課市史編さん室で、平成二十四年度着手より二十六年まで行ったものである。

資料整理・報告書作成作業は、編さん室長の新井 端と協力員の蔵持美弥子で行った。本文の編集と執筆については、第Ⅰ章とⅢ章を新井が、第Ⅱ章を蔵持が執筆した。
 - 四 挿図写真は新井が撮影した。朱墨写真の撮影及び加工は蔵持俊輔が行った。本書の刊行に際し、次の関係者、研究者、諸機関から御教示・御協力を得た。列記して感謝の意を表します。(順不同・敬称略)
- 根岸友憲 出縄康行 有吉重蔵 上敷領 久 金井塚厚志 手島芙実子
新井浩文 芳賀明子 弓 明義 野口達郎 栗原健一 水品洋介 蔵持俊輔
- 国分寺市教育委員会ふるさと文化課 鳩山町教育委員会 埼玉県立文書館 吉見町教育委員会
- 五 本報告に関する遺物実測図、拓本・写真類などの記録は熊谷市教育委員会で保管している。
 - 六 本書中の挿図類や写真等を、個人等の研究目的に適用範囲内とする利用は、本書であるとの出典を明記することで、所蔵者の承諾を得たものと見なすこととしている。実物資料の利用はこの限りではない。

凡例

- 本書における挿図等の指示は次のとおりである。
- 一 本文は、文献資料を多く使用することから縦書としている。
 - 二 本文では瓦の種別を「軒丸瓦」「軒平瓦」として表示している。

挿図縮尺については、遺物を1/6としている。

拓影図と断面図を組み合わせ、銘文部は別途一括して表示した。
 - 三 遺物番号は、註記番号と異にし、新たに附している。

遺物観察に当たっては、次の図書を参考とした。

 - ・日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会編 一九八四「武蔵国寺跡遺物整理報告書―昭和三十一年・三十三年度―」 国分寺市教育委員会 一九八七
 - ・「武蔵国分寺跡調査報告 ―昭和三十一年・三十九・四十四年度―」
 - ・島根県教育庁文化財課古代文化センター編 二〇〇八「平塚運一古代瓦コレクション」資料集(Ⅰ) 武蔵国分寺関連資料・鏡瓦編」 島根県古代文化センター調査研究報告書三九
 - 四 挿図掲載の遺物は、すべて観察表にその内容を記してある。計測数値中、()の付される場合は推定値を表す。
 - 五 瓦の色調は、『新版 標準土色帖 第14版』日本色研事業株式会社発行を参考とした。
 - 六 本文第Ⅰ章・第Ⅲ章中に引用した初出の文献資料の筆耕に関しては、原資料を写真したうえで、新井が行った。未読や、誤読箇所については新井の責にある。
 - 七 写真図版の縮尺はすべて任意である。

第1章 根岸家資料について

第一節 根岸家と資料の概要

根岸家の成り立ち 根岸家は同家に伝わる「家譜」や「系図」によれば、源平合戦において平敦盛を討ち、後に出家して法然に弟子入りしたことで知られる熊谷次郎直実の末裔といわれている。豊臣秀吉の小田原北条攻めに際し松山城に籠った上田氏の臣として仕え、近世以後嫡流は菅谷に土着し、後に青山の地に移ったとされる。

享保元年(一七一六)に青山村の名主に就任して以来、忍藩領であった青山村の公事に勤めながら、宝暦四年(一七五四)以降は隣り合う箕輪村の名主も兼帯して豪農としての地位を確立したとされる。代々「伴七」を名乗り家政の農業のほかには酒造業や、玉作河岸の権利を得て荒川通舟業も積極的におこない確固たる家産を築いていた。

幕末から明治期に友山とその子武香が現れ、地域史や文化史に残る多彩な活動をしたことが良く知られている。また、二人の残した膨大な資料は地域の歴史・文化史にとっても貴重な資料となっている。



図 1.

根岸友山【文化六年(一八〇九)～明治三年(一八九〇)】
 名主としての友山の活動は天保一〇年(一八三九)荒川治水事業に腐心したことで、度々決壊した大囲堤修復工事を実現させている。しかし、農民の一部が川越藩に強訴する「蓑負騒動」が起きてしまったため、責任の一端を問われ江戸十里四方追放

の処罰を受けることとなり、安政六年(一八五九)に解放されるまで二〇年余り遍歴の日々を過ごした。この間、友山は長州藩との人脈や討幕への考えも醸成していったとされる。幕末期には、家塾の「三余堂」、剣術道場の「振武所」を屋敷内に構え、文武の方途を近郷の子弟に教えていた。自身も千葉周作の門に学び尊王攘夷派の志士らとも交流を持っていたことから、清川八郎の求めに応じ、浪士組に参加して上洛したこともあった。帰郷後は漢詩の創作をはじめ文芸活動や古物の収集など趣味的な世界に隠棲した。没後に維新の功勞者として勲位を贈られている。

根岸武香【天保一〇年(一八三九)～明治三五年(一九〇二)】



図 2.

武香は実父友山の追放後名主役を引き継ぎ、明治維新後は大惣代名主役となつて新政府の地方官として地方自治に尽力する。

一二年に埼玉県議会が開かれると議員として選出され初代副議長、第二代議長となり、県政の中心となつて活躍する。二七年には貴族院議員に選出され大隈重信を中心とする改進黨に属して活動した。また考古学黎明期の一人で、隣村吉見村の「黒岩・吉見百穴古墳群」の発掘調査を行ったことで考古学史に残る功績を成したことで知られる。人類学・考古学に関心が深く、古器物を展覧鑑賞する集古会、人類学会、考古学会、歴史地理学会などの活動は亡くなるまで変わらなかつた。特筆される文化活動では、「新編武蔵風土記稿」の出版事業を実行したことで、その刊行は埼玉、東京、神奈川の地方史研究を飛躍的に発展させるきっかけ

となった。武香自身は美術品や古文書などの古器物への関心も深く、幅広くその蒐集もおこなっていた。特に古銭や古印に関心もち研究を進めていた。

友山・武香の遺産 武香の子息盾臣やその子憲助も県会議員などを歴任し地域の有力者として家産を守った。また、武香等の収集した考古資料や古文書資料を国・県へ寄贈・寄託するなど資料の散逸を防ぎその保護と活用にも努めた。この家伝の精神は以後の根岸家の人々にも受け継がれ現在に至るも変わらず、その恩恵を受けている研究者や市民は数知れない。平成七年には大里町歴史研究会が結成され、根岸家と大里の歴史研究が幅広く開拓された。平成一五年には「根岸友山・武香顕彰会」も組織され、より研究の裾野が広がった。二二年には熊谷市指定文化財となっている豪壮な「長屋門」が修理され、その一角が「友山・武香ミュージアム」としても活用されている(註1)。

根岸家の資料は、幕末から明治期の友山・武香に関わるものだけでも、民政、治水、政治、文化活動等に係る二万点以上の文書資料と出土品や工芸品などの歴史資料が残されている。この中で、特に貴重な古写経・古文書・地誌資料などの文献類約九五〇点は一括として国立国会図書館に寄贈され「青山文庫」にまとめられている(註2)。埼玉県立図書館に寄託されている文書資料約九千点が同館で分類整理されており閲覧ができる(註3)。考古資料では有名な熊谷市中条出土の短甲を装着した「武人埴輪」が東京国立博物館に寄贈されている。これら全資料群の全貌はまだ把握途上と云えようか。

熊谷市史の調査 本報告書では、市史編さん事業として「根岸家資

料群」の整理調査を行っていることから、新たに提供された文書群の整理と共に、文書群以外のモノ資料も含めて実施中である。先述のように膨大な文書群の陰になり、モノ資料の整理報告まで手が付けられていないのが実情であった。しかし、これらのモノ資料は文書群の裏付となる証拠ともなり、その実態を解明し評価することで根岸家資料全体の評価を補完して価値を高めると考えている。

今回、根岸家の御理解を得て、友山・武香の蒐集品の一部をなす考古資料を報告するが、その一部とはいえ「古代瓦資料」として貴重な資料群であるので、次節以降、根岸武香の収集方法や収集目的まで掘り下げて、対象となった古瓦の来歴や属性について歴史的・考古学的視点から分析を進め、その意義と歴史的価値を考察する。

なお、本文説明では根岸友山と根岸武香の二人の好古家に関わるが、武香の業績を主としているので、根岸とした部分は特に断らない限り根岸武香を指している。

第二節 「好古家」根岸友山と武香

好古への関心 幕末から明治時代は、維新を挟んで価値観に大きな変革を迫られたが、一般の古物や古跡への関心はまだ高かったといえるだろう。熊谷市域には多くの古墳や集落の遺跡があり、平安時代から戦国時代まで活躍した武士たちの伝承も豊富である(註4)。また、開墾などで出土した古物への関心も高く、寺社の宝物や御神体とされた考古資料も残されている(註5)。

市域の歴史を記録した最初の人物は、田原藩三宅氏の由緒調査のため、天保二年(一八三二)三ヶ尻周辺を来訪した渡邊華山であろう。華山は三ヶ尻古墳群の一古墳であった「雲派塚・氷雨塚」などを訪

れ、これらの記録や古墳石室の画を『訪舘録』に残している(註6)。

江戸時代後期には松平定信の編集した『集古十種』(註7)や木内石亭の『雲根志』(註8)などに刺激をうけて、古物と呼ぶ出土品の蒐集熱が広まり、後に考古学の黎明期を開拓した人達も輩出した。「好古家」と呼ばれた人々で、その代表ともいえる松浦武四郎(註9)との交流を示す根岸家の記録があり、松浦の主催した東京での古物会に友山も出席していたことが知られ、友山も好古家としての一面を持つていたことがわかる(註10)。

熊谷地域の経済的・政治的な有力者たちは、一面では書画、詩歌を嗜む文化人でもあり、古物や骨董も愛玩していた。彼らは「好古家」とも呼ばれ、陳列会などを主宰し、また東京府下での陳列会(尚古会や古物会)にも参加していた。陳列会では現物を見ながら批評を仕合い、博識・知見を広め、同好者との交流も生まれることから全国的な器物の収集・交換の機会も容易であった(註11)。彼らのネットワークは全国に及び、現在に至る古器物(出土品)の保存や研究への貢献も少なくない。次の時代にはこれら蒐集資料の多くは大学・公共の博物館へ寄贈・譲渡により収蔵され、現在でも展観することができるものが多い(註12)。

地誌刊行事業 根岸は剣術とともに国学や漢学も早くに学んでおり、忍藩校「進修館」の教授で儒学者の芳川波山や安藤野雁、妻沼に「兩宜塾」を開いた寺門静軒にも師事していた(註13)。歴史に興味を持ったのはいつの頃かわからないが、幕府の昌平坂学問所が行っていた武蔵国の地誌編纂事業は見知っていたと思われる。この地誌調査では幕吏が現地へ赴き、旧家・社寺に保存されてきた伝来の古文書や古器物を実見・模写・校訂するなど確認調査を踏えた上で「新編

武蔵風土記」が作成された。熊谷市域でも甲山古墳など古墳墓の記事や金石文などの挿図や記載がみえる(註14)。この地誌調査は地域への興味を大きく刺激し、郷土史・博物学及び歴史的文物への関心を高まらせたが、限られた閲覧しかできなかったため、好古家たちは独自に筆写本を作成するにとどまったが、広範な利用要望が潜在していた。この状況を背景に刊本「新編武蔵風土記稿」(註15)として発行・頒布事業をなしたのは根岸家であった。明治六年には、明治政府直轄の地誌編纂事業として「皇国地誌編纂事業」が指令されており、根岸の「新編武蔵風土記稿」刊行事業と重複してしまうが、旧幕府の成果を世に出そうとしたのは、その高い内容と貴重な歴史資料との価値を深く認識していたためと思われる。

一方、根岸は新政府への地誌調査報告では新たな資料を加え提出した。市域では村岡村の茶臼塚発掘と板碑発見の記事が見える(註16)。青山村は「武蔵国大里郡吉見村誌(註17)」に収められているが、本書には青山周辺の出土遺物の付図(図3)がある。これは根岸によって図化掲載されたもので六枚の図に彩色された土器や石器のスケッチが二〇点ほど描かれている(註18)。中でも「田村」の墨書須恵器



図 3



図4.

残されたメモや「青山文庫」中の挿図・記録類からもその姿勢が窺われる。考古資料に限れば根岸のほとんどの蒐集品は、居所の青山周辺の開墾や耕作に際して発見されたものが多い。特筆されることは、

坏は、その特徴から九世紀前半代に位置付けられ、墨書土器の報告例としても国内初見の例とされる(註19)考古学的にも実証的な調査姿勢が表れ注目される。ほぼ同時期の明治九年(一八七六)のことだが、市内上中条出土の「馬」埴輪、「武人」埴輪等の発見記録(註20)には、中村孫兵衛(註21)や根岸らの関与が知られている。根岸が広く地域史にも関心を高めていた時期と思われる。同じころ松浦やシーボルトらの著作や交流による影響も想定され、より考古学への理解が進化し発展していったのではないかと考えられる(註22)。

考古学への熱意 明治一〇年前後は根岸武香が青年期から壮年期にかかる頃で、日本考古学の歩みも草創期といえ、根岸の学究心の進展期とほぼ重なる。青山周辺から出土した人物埴輪や様々な出土遺物を実見する機会に恵まれ、松浦から友山への資料調達依頼(土偶人形人物埴輪)もあって、埴輪や古墳出土遺物により関心を深めたと思われる。この頃は、他所での発見情報も敏感に集めていたようで、

発見地・発見時期を明記した記録や図面等の資料を残していることである。「青山文庫」には明治一年の注記で青山の古墳から出土した鉄鏃のスケッチがある(補註2・図4)。一般に、明治以降も埋蔵物発見の機会は頻繁だが、その記録や図まで揃えることは稀で、ほとんどの場合この情報を失い、資料価値を損ねているが、情報を残すという根岸の実直な姿勢には驚かされる。古墳への関心は高く、青山周辺の大境古墳群(註23)・船木遺跡(註24)・東松山市三千塚古墳群(註25)などの近辺の遺跡や古墳から採集した副葬品などの遺物や縄文時代く古代の土器・石器・埴輪・瓦・鏡まで豊富な考古遺物が蒐集資料の根幹を成していたことが知られる(註26)。なお、この蒐集した考古資料は私設博物館に相当する「菟古舎(稽照館)」という展示室を自宅内に設置して陳列し、見学者にも公開していた(註27・図版扉参照)。根岸のそれは博物館的な施設としては埼玉県内で最初のものである。

明治一〇年(一八七七)は、E・S・モース(註28)が東京品川の大森貝塚を発掘した年で、その動向は広く世に伝えられた。翌一年にはこの発掘に刺激を受けた根岸も好古家の仲間と語り、以前より興味を抱いていた黒岩村の黒岩横穴の発掘を行った(註29)。直ちに、H・F・シーボルト(註30)やモースが黒岩横穴の見学に訪れる理由も、新聞記事での広報(註31)に加えて、政府博物館の柏木貨一郎や蜷川式胤と友山・武香らの好古家間の情報ネットワーク(註32)も関係したようだ。彼ら当代一流の研究者や鑑定家等との交流は以前からのもので根岸は大きな影響を受けているものと思われる。

なお、モースが熊谷で考古学や進化論の講演を行ったことも友山・武香ら熊谷の好古家仲間の連携によるものである(註33)。その後、モースは明治一五年に再び青山に根岸家を訪れており、その著

書『日本その日その日』に根岸家滞在の様子をスケッチや文章に記し、根岸家の厚情を懐かしく思い起こしている(註34)。

明治二〇年(一八八七)、根岸は日本考古学史に銘記される吉見百穴横穴古墳群の発掘調査(註35)を、東京帝国大学学生で後に同大教授となる坪井正五郎(註36)と共にに行った。発掘後は遺跡の保存と公開にも心を砕き、国・県へ保存の働きかけをもしている(註37)。当時、青山の根岸家は研究者の入口ともいべき場所になっており多くの歴史・考古学者が訪れていた(註38)。明治二八年四月には阿部正功(註39)・大野延太郎(註40)、鳥居龍蔵(註41)が秩父地方の調査帰途に、市域の三ヶ尻、三本一帯の古墳を巡り、根岸家に投宿し考古資料を見学するなどしている。根岸との考古学談議に花が咲いたことだろう。坪井正五郎や東京帝国大学との交流は坪井が同大教授となるやその子弟たちにも受け継がれ、前記したように根岸家を訪問する研究者は絶えなかった。根岸もそれら若人への援助を惜しまず、自身も東京人類学会や考古学会、歴史地理学会の会員として活動を続けており、その援助も行っている(註42)。

明治二七年(一八九四)に根岸武香は貴族院議員となり東京での滞在が多くなると、好古家間の付き合いや全国の名士らとの交流の場が増え、古物会の活動を主宰するまでになった。「集古会」は根岸を代

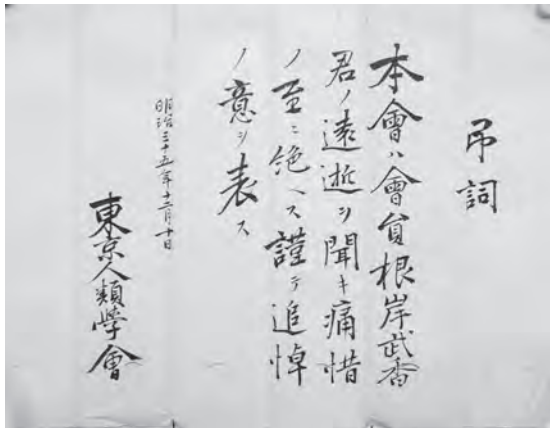


図 5.

表として定期的な活動をしており、各界の名士や研究者等も多数所属していた。会誌に記載された各種の出品物には、考古資料から美術工芸品・古文書まで多彩な物品が展覧されていたことが知られる。明治三五年一二月に亡くなるまで、「集古会」を通して広範な活動を続けていた。しかし、根岸の関心は明治三四年「考古界」誌に寄稿した「四方寺印の考」や「日本古印譜解題」の論考に見るごとく「考古図録」や「古印譜」の出版を意図していたようだ(註43)。残された資料には未定稿や模刻印、古印の関係資料が数多く含まれており、本報告で紹介する「古瓦」もその資料の一つであると考えられることができる。次節からは蒐集された「古瓦」に絞り込んで根岸の活動を辿ってみよう。

第三節 根岸家資料中の「古瓦」

確認状況・調査着手 平成一九年度当時、古瓦は古文書類と共に根岸家から大里町教育委員会へ預けられていた。新市合併後の熊谷市史編さん事業の開始と共に、市史編さん室で引き継ぐ形となり、古文書類は目録作成等の整理を続けているが、古瓦などの考古資料は天箱に詰められた状態であった。縄文時代や古墳時代の遺物も少量含むものの、資料のまとまりとしては古瓦一括と判断できるものであった。個々の遺物には「ネギシ〇〇」のように注記されていたが、本報告のため改めて番号を付して整理している。資料のデータ化には、実測図の作成・拓本採取・観察記録の作成を進めた。

なお、古瓦は古代「武蔵国分寺所用瓦」が主であることから、国分寺市教育委員会には、整理法や瓦の確認などについてご教示をいただいた(註44)。個々の瓦の詳細は第II章に述べている。

また、この根岸家資料「古瓦」の来歴を示す記録類が同家の文書や寄贈寄託資料中にも残されていることを想定して、埼玉県立文書館に寄託されている根岸家文書や国立国会図書館に寄贈された「甕山文庫」中の関係資料の所在確認を並行しながら整理を進めた。

古瓦の来歴に関して 一般的に古瓦をいうとき、近世以前に造られた飛鳥時代まで遡る瓦が対象になるが、多くは奈良・平安時代の瓦を指すことが多い。これは飛鳥寺の建立以来、平安時代までに国分寺をはじめとする寺院が全国に創建されたため、各地の廃寺跡や瓦生産地からの採取が比較的容易だったことがある。多彩な文様をとどめる軒瓦は特に珍重され、文人茶人などにも広く愛好されたこともあり、多くの好古家の収集対象となった。関東では、近世後期に出版された「武蔵野話」にも武蔵国分寺跡出土の文字瓦などが図入りで掲載されるなどしており、巷間には諸国古寺の古瓦が多量に流出していたようだ。なお、武蔵国分寺跡以外では、瓦を焼いた生産地の窯跡が東京都下の多摩地域や埼玉県下の入間地域、比企郡西部地域、大里郡西部地域に分布しており、比企郡地域ではときがわ町・鳩山町の窯跡から出土することも古くから知られ、記録にも残されていた。

好古家でもあった根岸父子については前節で概説したが、古瓦の鑑定や蒐集についても好古家間の情報提供や交換・斡旋などの連携がみられた。根岸家文書、小室家文書に収められている好古家たちの通信書簡(註45)から確認されることで、多彩なやり取りが記されていた。これらの記録から根岸武香の考えや、好古家たちの間で古瓦がどのように理解され扱われていたか。また、入手の経路など様々の点を推察することができた。

以降に、資料群としての古瓦の特徴・蒐集意図などに関し、その概要と根拠となる参考資料を提示し、さらに補註を加えて説明する。

資料の提示と内容の検討 資料の検討に際し、根岸家資料の「古瓦」全体を見渡し蒐集資料群としての古瓦の印象と、根岸の蒐集意図を想定して、アウウの留意点を示し、考証・解明の糸口とした。

ア、古瓦は完形のものはない。軒丸・軒平などの瓦当文を残す瓦はあるが欠損品である。文字瓦は刻印とヘラ書文字で小破片だが数量が多い。文字・刻印瓦の大半は武蔵国分寺所用瓦である。時代は古代が中心だが中世・近代期が少量混在する。他所の瓦は下総国分寺の軒丸瓦、多賀城系の軒平瓦、中・近世の京都東福寺瓦、中世の平瓦など単品で特に蒐集の特徴が見いだせない。この資料群としての最大の特徴は「刻印のある瓦」の存在であろう。

イ、根岸は古印譜の編纂を意図していたことが遺稿からも知られ、その資料として刻印の押された瓦も集中して蒐集したと考えられる。今回報告の資料は古印資料の一部として蒐集されたものとするのがもつとも妥当であると考えられる。

ウ、瓦の入手について、消費地の武蔵国分寺跡と生産地の窯跡が考えられる。武蔵国分寺瓦の出土地とみられていた亀井村・泉井村(現鳩山町)の近傍には知己の小室元長がおり蒐集や考証の面で協力を得ることができた。なお、刻印瓦の存在や蒐集について好古家の付き合いにより普段から情報や斡旋を得ていたと思われる。

アウウの点を踏まえ、友山・武香とも交流が深かった吉見の内山作信や比企郡都幾川の小室元長と畠山恕心齋らの好古家たちとの通信記録や武香自身の残した古瓦に関する記録や資料も搜索した。本報告書の古瓦の来歴を知る重要な証拠となった。次に小室家文書・

根岸家文書・甲山文庫、及び「集古」・「考古界」等の関係文献から、古瓦の表記部分を抽出して、資料①から資料⑮まで掲げる。

資料① (明治二年—一八七九) 一月五日

小室元長より根岸武香への書簡

「客冬中泉井村ナル小谷新沼(従前ヨリ瓦ノ出ル地)開鑿敷於ノ間(大口父播榛大ノ類)横見ノ二字捺候全瓦一枚掘出由有候(人伝)。(後略)」

【解説】林家文書(7356) — 「根岸武香書簡綴」

林家は赤尾村(現坂戸市)の名主 林織善(1948)坂戸町初代助役、県文化財専門調査員、埼玉郷土文化会幹事、埼玉史談執筆多数。また、林織善が根岸友山の事跡を編纂する目的で、日記や手稿・手紙などの資料を根岸家から借り出したとされ、林家文書目録中の「青山村資料」として収められている。本資料は新編武蔵風土記稿の校訂作業を伝えた文末に、直近の風聞として書き添えている。小室は泉井村での新沼開削工事で多数の「文字瓦」発見を伝えた。資料②〜⑥に関わる初見の報告である。

資料② (明治二年—一八七九) 六月二八日

畠山如心齋から小室元長への書簡

「泉井村碎瓦追々出候よし、御玩ノ如ク該所ハ国分古ノ瓦ヲ受取候場所ニても可有之歟、**豊**ノ字ハ豊郷郡、**男**(ハ男) 衾郡、**因**ハ入間郡ノ小印ト被存候、依テ案スルニ武蔵国分寺ナラハ武州全国ノ諸郡ニ而郡ノ大小ニ応シ、千枚ハ何郡、五百枚ハ某郡ノ持分ト其入費ヲ引受テセシ物坏ニ有之歟、例ノ憶説トモ浅見ニテ此事未所見無之候ニ付、胸ニ浮ヒ候マヽヲ証シ申笑ヲ才取申候、尚御良説ヲ待ノミ(方今大寺ノ瓦ヲ信仰者ニ多少寄附致サセルト同意

カ)

六月廿八日夜 小室老先生玉床下 畠山如心齋

資料③ 明治一三年一〇月二九日 「朝野新聞2137号 雑報」

「此頃 武蔵国比企郡泉井村なる山間の畑を耕せしに、畔より古瓦数片を出せり、其質ハ或ハ硬、或ハ軟にして、中に武蔵の郡名の一字を印するあり、皆な缺けて全きものなし、多摩郡国分寺旧址に出る所の古瓦と一様なり、比企郡番匠村の好古家小室元長氏ハ「**豊**」(豊島郡)・「**豊**」(全郡)・「**男**」(男衾郡)の文字を印する三片を得、余も亦「**因**」(大里郡)・「**播**」(播羅郡播今作藩)二片を得たり、抑も泉井村ハ慈光寺の東……(中略)……今瓦の出るハ如何なる故歟、江湖の諸君に質すと同国大里郡青山の根岸武香氏より申越さる」

資料④ (明治一四年—一八八二) 二月二六日

畠山如心齋から小室元長への書簡

「一 御隣村泉井村掘出古瓦ノ摺本数葉拜見被仰付奉謝候、(中略)・扱比留間氏御蔵(中略)横見在銘の全瓦ハ就中見事ニ而珍重ニ奉存候、但此銘ニ向テ右ノ方ノ端シニ何ヤラ文字跡カト……
一 野原氏御蔵大井大里等ハ、論ナシ……(中略)……比留間・野原両氏御蔵ナル竹瓦ノ小口ナルハ菊ニ可有之候、(中略)……竹瓦ノ小口十二九ハ古例ト相見え、中にハ【瓦の文様図あり】如此真ニ小点ヲ附タルモノ大内書中ノ古瓦ニ其他ニも往々アリ、今ノ目ニテハ蓮ノ方ニ近イ様なれ共、(後略)
一 平瓦ノ小口唐草模様ハ奈良ノ朝ノ古瓦ニも往々有之、(後略)……
二月廿六日午後 畠山如心齋」

資料⑤ (明治一四年) 五月二六日

畠山如心齋から小室元長への書簡

「・・・御地掘出国分寺古瓦面文の考□佐藤栄中へ・・・古瓦ヲ鑑定スルニハ第一土質 第二製作 第三面文也 土質国分寺ノ時代製作国分寺ノ物製作面文又次第二叶ッテ・・・(後略)」

資料⑥ 明治一四年「明治十四年親友帳」 古今正集記目録 —

比企郡泉井村 — 「古跡布目瓦新沼谷より出ル説」

【解説】小室家文書25・畠山手簡・親友帳 ②は小室と畠山の間に於いて国分寺瓦に関する初出の記事で、泉井村から武蔵国分寺所用瓦である「豊島郡・男衾郡・入間郡」刻印瓦が出土したことが知られる。④は小室が泉井出土瓦の拓本を取って畠山に鑑定や意見を求めた返答の一部。本文で畠山は十に八・九は古例(真品)としている。⑤は「国分寺瓦」とはじめて鑑定を示しており、友人の佐藤栄中の言を長文で説明している。また、瓦鑑定の3ポイントは、現在でも通じる観察観点である。なお、土質とは胎土焼成のことで今出来の物とは全然違ふと述べている。また製作技法についても、面文(瓦当文)との関係を示し、武蔵国分寺から採取できる瓦との比較で十の内八・九は判断できるとしている。⑥は現在の鳩山町泉井地区の新沼谷付近から布目瓦が出土することを記している。この場所は重田1903・稲村1922でも触れられている。また、平成二四年度までの鳩山町教育委員会の発掘調査で武蔵国分寺瓦を焼成した多数の窯跡が確認されている。なお、資料④、⑤は年紀がないが明治一四年と推定される。また、資料③については資料⑩との関係と合わせ次項で見えていくこととする。

資料⑦ 明治一四年(一八八一) 九月二四日

内山作信より小室元長あて書簡 — 内山と野原との面識 —

「・・・○去ル七月頃、・・・御隣村泉井村野原春之助氏通り懸り之旨ニ而来訪被致、・・・」

【解説】小室家文書140(16) 泉井村の素封家野原氏は、資料④に見える野原と同一人で、内山・小室・根岸をつなぐ人物である。野原は国分寺瓦を所有しており内山にも提供していたものと思われる。また、比留間氏や野原氏の瓦発見年次は①、③、⑩、⑥から明治一二年以前のことと思われる。また、この時野原は青山に根岸を訪れる途中でもあつたらうか。

資料⑧ 明治一六年(一八八三) 二月五日付

内山作信より小室元長あて書簡 — 国分寺瓦の無心 —

「・・・且又御持合有之候ハ、御近所より出る所之国分寺古瓦、三四片頂戴致し度、余り大なるは用候所に不適當故、一・二寸より三寸止り位之品、古ひ有之物頂度奉存候、御愛珍之品にてハ恐入候間、ケ成不用ニ属候位之所、御恵投ニ預り度奉存候、御持合無之候ハ、御聞捨可被下候 早々」

資料⑨ 明治一七年(一八八四) 四月二三日

内山作信より小室元長あて書簡 — 瓦受領の連絡

「・・・国分寺古瓦破片早速ノ御恵投、奉謝候、右入用は、先年東京市川団十郎を訪ひ候事有之、其小座敷鼠色の壁故、何土と申哉と問尋候所、此人好古家にて、京都大仏の古瓦を粉にして塗したるよし 自慢に被申候、右二倣ひ、老拙も防寒の一小室を作り、

普通の破瓦にて塗り、此瓦を粉にして塗したりと、人二向て誇らんと欲る為二・三ヶ所破片を塗込置度、相願候儀ニ御座候・・」

【解説】小室家文書 140(23・21) ⑧は内山が小室に、国分寺瓦を望み、⑨はその返札。文中の瓦の出土する「ご近所」とは鳩山・玉川の南比企窯跡群のことで、亀井村・泉井村近辺は当時からよく知られていたらしい。また、好古家でもあった小室なら入手場所や方法を知っており、所蔵品もあると思われるのである。

なお、好古家の間では国分寺使用瓦と認識されており、内山の希望は壁土に利用したいとの考えだが実際には普通の瓦を使い、古瓦は自慢用にしたいと説明している。

内山の依頼から四か月ほどの期間を要しているが、当時老齢の小室は療養中でもあったことから、直ぐに用意できず周囲の者に依頼して用意させたものと思われる。

なお、市川団十郎は好古家、収集家として知られた人物で古物会をよく主催していた。内山や根岸も度々出席していたらしく、畠山、蜷川、柏木、シーボルトらとの面識や交流網などが形成されたものと思われる。

資料⑩ 『甲山文庫』「骨董集」所載 根岸武香 手稿

「泉井村に古瓦を探るの記」

「武蔵国比企郡泉井村に古瓦の出る事ハ聞つれと ふるき文ニも見えすいかなる物なるや志らさりしに 比留間藤太郎(和泉村平民)といふ人 古その冬奈ん拾ひたる瓦なりとて方の中ニ大の字あるもの 又方の中に播(和名抄幡羅郡)の字のあるものと携来るを見るに 多麻郡の府中なる国分寺跡より出る郡名の古瓦と同じ珍らかなる物なれハ 探り見と藤太郎氏にも

約したれと いとまなきままうちすきぬ ことし四月廿三日 同し村なる野原春之助といふ人又古瓦の打形を携来り 示されルるに またまた好古の情を起し 御(五)つきの始より探りはやと思いしも何くれと雑の事いきてはてさるに 番匠村の小室元長老も久しく病褥に在りてつれつれなれハ 古き事と物語らんなど消息などありたれハ 思いたちて七月三日〇〇朝九時に古器古文書など若干もち馬車に乗りて立出ぬ にかひ吹く頃小室氏の家に到りぬ 老翁は可年て待ちまらたれハ 山々はなしありてよる古ひたり 元貞氏は都幾川の鰻などやきて昼けを出しぬ 西平村の峯岸氏も来りて古の事なと物語 持行し古器古文書など出し評しあひぬ 日暮ぬるまに峯岸氏と共ニやとりぬ 夕方より雨降出ルれるハ阿須なん泉井へ行馬車のいかゝやと心をいこめいぬ 翌四日朝晴るれと小夜の雨に道もあしかりなんと草鞋を穿ち峯岸氏ともニ出立に 玉川郷高山忠三を訪ふ氏も共ニ行可めと草鞋はきて出 細き道草分て泉井村に到りぬ 番匠村より凡壺里程ニして山の合の村なり まつ野原春之助からを訪に今日ハ越生の市ニ出て家ニおら須と妻ハ可ひ古のいとなどとりいたり 又比留間藤太郎の家を訪ふに家ニありて古き瓦の拾集たる文字のあるものを出し見せぬ いとめつらかなるものニてま古と国分寺の瓦ニ其俣なり 古とニ横見といふ文字のある瓦ハ全瓦にていと免つらしく 又古瓦のいるる所に行て見れハほり出せし瓦の片われ壘にとあり 古の地さまハ和泉井村の南にて熊井との間 この山の北にてと東西双方ニ小谷ある岡の東のなこりなる所なり 二年三とせ前ニ開墾せしとて旧ハ山なりしニ今ハ畑となりぬ 瓦やきし竈の形の能古りしもあ

りしといふ 片瓦の堆く積たる中より豊嶋入間などいふ文字のある瓦を出せり 藤太郎かりにてひるけのあるしせんとていふのままに藤太郎の家に行て志はし息ふうちに野原春の助此の市より帰りしとて来りルレハ 又野原の家に行て拾置たる古瓦など見ていとま古えにしつれハ ひや麦などあるしせんとこのこりしニ 四時過る頃にもなれハ 帰らん事とつけて立出ぬ また玉川の高山氏小家に立よりけるニ 此里ハ都幾川のほとりなれハ此川の為にひきの人たよりなしとて 去の年此川に板にて橋掛しとて橋の国など志めけと 行きて見しに誠二めてたき橋なり 此里人の有志の人々金千七百円の費せしとなんさもあるへし 夕方小室氏に帰り宿りて 廿五日ハ峯岸氏と共に熊井村の根岸儀平氏を訪ははやと約せしし此日朝より雨ふり出てこりしけハ や見て九時頃いとま乞して直に車に乗走らせて十二時家二帰りぬ」

【解説】(青山文庫 骨董集 本別9・13) 年欠であるが七月三日〜五日まで国分寺瓦の出土地を都幾川の小室家の案内で訪れたことが記される。きっかけは同年の四月二三日に泉井村(現嶋山町、根岸は和泉村と記しているが、隣村滑川町の和泉ではない)の野原春之助が国分寺瓦を携えて根岸家に来訪したことであり、国分寺瓦を見知っていた根岸は直ぐに現地を訪れたい希望があったがなかなかできずにいた。七月に入り既知の小室元長に連絡を取り案内を依頼し、古物談議のための文書や古器物を持参して出かけた。この訪問では、小室との古物談議もあったが、先の刻印瓦の出土地の確認やその瓦の入手を図っていたと想像される。資料③では、武香は「大」「播」の二点の瓦を得ているが、これはこの冬に比留間が持参した二種の瓦と同種であることからその際

に譲り受けたものであるう。

小室側では現地の有力者で好古家でもあった峯岸重行に連絡を取り同行させている。泉井、

熊井(現嶋山町)では採集者の野原と比留間の家を尋ね、掘り出した大量の瓦と窯跡を確認している。本文書でも瓦については文様より文字の有無と種類に関心が向けられており、方の中に大の文字あるは」とは「因」で大里郡、「幡」は幡羅郡の刻印瓦であり、横見・豊島・入り、横見文字瓦である。なお、窯を確認した場所は現在の嶋山町泉井の「新沼窯」あるいは、「金沢窯」などが該当すると想定される。この出土地について、資料①・⑥から小室は「新沼谷」と把握しており、文中の新沼谷の地形説明も合致するように思われる。後出の文献や近年の嶋山町教育委員会の発掘調査でも多数の窯と郡名瓦片などの出土が明らかであり、この新沼窯が根岸武香の訪れた場所の一つである可能性が高い(註46)。他に根岸が小室家や泉井村を瓦採集目的で訪問した記録は見つからないが、資料⑩の訪問は国分寺瓦の件を

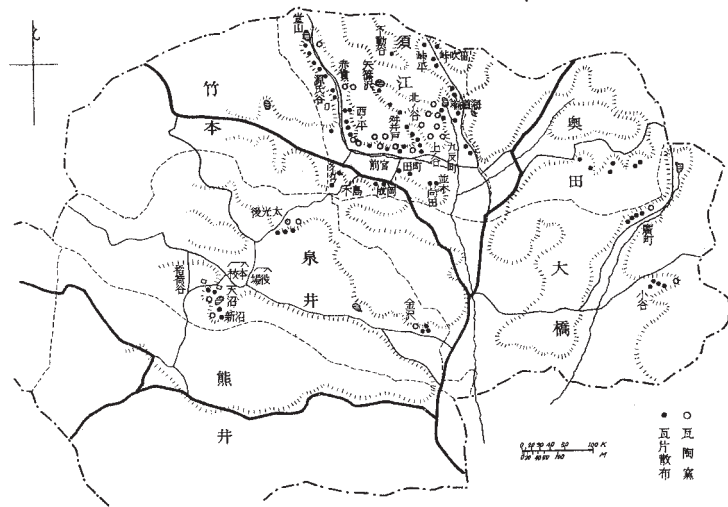


図6. 亀井村瓦陶窯址分布図

朝野新聞に記事提供した資料③より以前と想定されることから、泉井村の訪問は明治一三年七月であり、本文書は事後に手稿したと考えられる。なお、資料③の新聞記事では、瓦の供給先について武蔵国分寺以外に地元の寺などへの供給も想定していたようだ。ただ、資料②では刻印の性格と生産流通の一場面として集積場所との畠山の所見が述べられていたことから、小室も同様な疑問を持っていたようである。

資料⑦は泉井訪問後の野原から根岸への瓦斡旋も想像させる。

資料⑩ 明治三六年(一九〇三) 中澤澄男「国分寺瓦とモールス氏

―根岸氏の国分寺瓦―『東京人類学雑誌』第207号の記事

「根岸氏が考古学的採集に熱心であったことは、今更に言わずもがなであるが、去る頃在る人が武蔵の国分寺へ行って歸りての話に、根岸氏は国分寺跡の處々の畑に青々として居た麥を買取り、これを刈らせ、そこを多人数の人夫に掘らせて、古瓦を沢山得られたと、さればこそ去る集古会の席上で、人を驚かした逸品の夥しかったも宜なりかね(ん)。」

【解説】中澤は東京帝国大学で考古学を修める。明治三九年に八木柴三郎と共著で「日本考古学」を刊行した逸材。本書は根岸武香没後の追悼号のため、根岸の功績や回想を知己の人々が述べている。中澤は根岸がおこなった武蔵国分寺跡で瓦採取と、集古会への出品瓦と結び付けて回想している。際立った瓦採取の方法が記憶されていたようだが、時期、場所・地点、瓦の種類・分量などについては触れてない。後文では根岸はモースに所蔵遺物の埴輪を称賛されたことから考古学に熱心になったと紹介している。資料⑬からこの逸話は明治二〇年五月二日のことと考えられ、収穫前の青麦の時期と

一致する。ただ、採取から集古会での展示まで一四年以上も経ており、この時の国分寺跡での採取は集古会の出陳のためではなく、刻印等の文字瓦の入手が目的だったと思われる。

資料⑫ 明治三四年(一九〇一)「集古」第三一回 出品目録

三月九日開催 於 浜町日本橋俱樂部

―武蔵国分寺瓦 九十六枚 根岸武香―


「豊島郡四種〇荏原郡四種〇橘樹郡三種〇都筑郡一種〇入間郡三種〇高麗郡二種〇比企郡四種〇横見郡二種〇大里郡二種〇男衾郡四種〇榛沢郡五種〇幡羅郡三種〇児玉郡一種〇那賀郡三種〇秩父郡六種〇埼玉郡二種〇大井二種〇白方二種〇文字不明及び無印二十三種〇䟽瓦七種〇花瓦十三種」

【解説】「集古会」(補註4)の会誌である「集古」に掲載。目録の標示であるため瓦の種類と数量のみの記載である。ここに見える武蔵国分寺瓦の大部分が今回報告の資料である可能性が高い。今回報告資料との対比は次章に記すが、「䟽瓦」は「軒平瓦」、「花瓦」は「軒丸瓦」である。無印の二三種は、格子タタキ等の工具痕が残る瓦を含んでいるのだろう。この日の例会では、帝国大学や個人から数百点の瓦が出陳されているが、近畿地方の有名寺院や各地の国分寺瓦などが含まれる。

資料⑬ 「根岸所蔵古瓦朱書銘」本報告写真図版18・19

―瓦表面に朱書にて注記される文字―

(↓) 以下は当初を想定復元

a・(No.30・40)「寺古瓦 明治二十年五月二日 所得」
↓ 「国分寺古瓦 明治二十年五月二日 所得」

- b・(No. 52) 「国分」 明治二十年五月二日 得」
↓ 「国分寺古瓦 明治二十年五月二日 所得」
- c・(No. 58) 「寺古瓦」 明治二十年五月二日 所得」
↓ 「国分寺古瓦 明治二十年五月二日 所得」
- d・(No. 84) 「寺古瓦」 明治二十年五月二日 得」
↓ 「国分寺古瓦 明治二十年五月二日 所得」
- e・(No. 97) 「大」 「古」
↓ 「比企郡大谷村 古瓦」

【解説】今回報告する資料瓦群中に朱書の認められる瓦片五点があった。いずれも断片で完存のものはないが、朱書は瓦遺存面に収まるとみられることから、当初の朱書と思われる。内容と時期から資料⑩に中澤が紹介する逸話を証明する資料で、aとdは明治二〇年(二八八八)に武蔵国分寺で採取された瓦の一部と思われる。e瓦は東松山市大谷所在の国指定史跡「大谷瓦窯跡」の採集品と想定される。朱書は根岸の注記と思われ、資料整理の方法として当時から採取遺物に朱書をする例は多い。実例では南方熊楠が明治一八年五月二二日に東京府下品川の「大森貝塚」で採取した土器片にも同様な朱書がみられる(註47)。なお、「所得」とは『集古十種』以来、採取品や出土品に附す用語として通例である。

資料⑭ 稲村坦元 1922 『武蔵国分寺の調査』東京府史蹟勝地調査報

告書 第一冊 に本資料が掲載される

「篋書ノモノニ「國比企」ト讀マルベキモノアリ」(第三遺物―地名を記せる文字瓦(13) 比企―本文48頁 第53図版No.96)

【解説】この文字瓦は本報告書第6図41に掲載した瓦と同一。

稲村は、武蔵国分寺の報告であるため、同遺跡出土品として根岸家資料を実見していたと思われる。

(本報告書第17図参2)

資料⑮ 林家文書―雑・拓本・瓦 (昭和初年頃)

「ア―比企郡亀井村泉井窯趾出土品拓本 イ―亀井村泉井国分寺平瓦唐草瓦拓本 ウ―亀井村泉井窯趾出土国分寺郡名瓦拓本」林家文書(10201、10202、102009)

【解説】林の地元にも著名な古代寺院「勝呂廃寺跡」があり、古代瓦には関心があつたようである。泉井窯出土の瓦には素弁八葉軒丸瓦・偏行唐草文軒平瓦・郡郷名瓦が含まれていた。蒐集時期は昭和初期頃と想定される。なお、「播」「男」「高」は大正一三年(1924)の採拓の柴田常恵拓本資料(國學院大學收藏)では、同一品が比留間顕典氏蔵品として記載されている。

石村 1960では林所蔵となつており所有の移動が想定される。林氏の蒐集品から武蔵国分寺瓦の約三〇点が石村 1960に掲載されており、そのほとんどが文字瓦で泉井窯趾の出土である。

第四節 小 結

以上根岸武香と古瓦に関する資料を見てきたが、これら断片的な記述から根岸家資料―瓦についていくつか気づいた点を挙げておく。根岸の考古遺物への関心は先述のように古墳出土品に関する資料が大多数で、その収集資料の質も高い。実物資料のほかは複写資料も多く『骨董集』の中には多数の考古資料の図を残している(補註2)。考古遺物の蒐集後に資料自体に記録を書く注記作業は考古学的資料

操作の基本で、考古学を学ぶ根岸の基本的な姿勢を見せている。

古瓦への関心は資料⑩に見るように、根岸家にもたらされた古瓦を実見した時に初めて「好古の情を起し」たのかもしれない。青山の近辺では瓦の出土する遺跡が、熊谷市吉岡の目白坂遺跡や東松山市大谷の大谷瓦窯跡、滑川町羽尾の平谷窯跡などの生産遺跡や熊谷市柴の寺内廃寺、西別府廃寺、行田市の盛徳寺廃寺など(註48)があり、これらの遺跡から出土する瓦を見る機会は当時からあったと思われるが、これらの遺跡からもたらされた瓦は本資料中には一点のみであった。瓦97は大谷瓦窯跡の採取品と思われる変哲のない平瓦片であるが、よく見ると格子目のような櫛描線がみられる。この線文が残ることから蒐集されたのであるうか。大谷瓦窯跡では人目を引く素弁八葉の整美な軒丸瓦を出土するが、当時はまだ発見に至らなかったのか、根岸家資料中には見当たらない。根岸自身はあまり文様瓦には興味が向かなかったのかもしれない。おそらく好古の情を起したのは、実見した瓦に「刻印」があったためであろう。もともと、「青山文庫」には根岸蒐集の古瓦拓本集(頒布本であろう)があり、近畿地方の有名寺院の瓦当文様が集められている(『古瓦摺帳』本別9・14)ので多少の関心はあったことがわかる。しかし、明治二〇年以降も瓦の蒐集を続けた形跡は認められないようである。

次に、資料⑫・⑬について照合した。

(○は報告資料数、●は「集古」掲載数 数の異動はプラス、マイナスで補記)

- 豊島郡—四点、 ●四種
- 荏原郡—五点、 ●四種+1
- 橘樹郡—三点、 ●三種

- 都筑郡—一点、 ●一種
 - 入間郡—三点、 ●三種
 - 高麗郡—二点、 ●二種
 - 比企郡—五点、 ●四種+1
 - 横見郡—二点、 ●二種
 - 大里郡—一点、 ●二種—1
 - 男衾郡—三点、 ●四種—1
 - 榛沢郡—三点、 ●五種—1
 - 幡羅郡—五点、 ●三種—2
 - 児玉郡—一点、 ●一種—1
 - 那珂郡—二点、 ●三種—1
 - 秩父郡—六点、 ●六種
 - 埼玉郡—三点、 ●二種—1
 - 大井郷—二点、 ●二種
 - 白方郷—三点、 ●二種—1
 - 軒平瓦(䟽瓦)—二種二〇点、 ●七種
 - 軒丸瓦(花瓦)—八種一〇点、 ●十三種
 - 文字不明及び無印 ●二十三種
- 以下、集古に記載のないもの
- 賀美郡—一点 ○多摩郡—一点
 - その他(丸瓦・平瓦・堤瓦・中世瓦)二四点、
- ※一一九点現存、●九六点出陳

当然数は合わないが、ほぼ一致していると云えるだろう。集古会に出陳した文字瓦の数は五三点で、本資料中の大半が同一資料であると判断される。本資料群がほぼ同一資料であるという証明に次の

文献を見ながら、明治期の研究に触れていく。

この根岸家資料の国分寺瓦は当時から研究対象として注意されていたようで、沼田頼輔は「武蔵国分寺発見の文字瓦に就いて」の論文で、郡郷名文字瓦の記名表記法の分析を行なう中で、根岸家の瓦も使用して分析していた。同論文中の「根岸武香蔵」と参照した瓦のほとんどは本資料群と一致する。論文中には図示されていないが「荏原郡 極印せしもの 陽字のもの 小さき荏の字あるもの」は本報告書第16図7・51に、「比企郡 篋書きのもの『國比企』の三字あるもの」は第16図6・41に相当する。他の研究者では高橋健自、篠原市之輔、稲村坦元らも国分寺瓦の論考で根岸家資料に触れている(註48)。

⑫、⑬の資料では蒐集の規模が不明であること、比企地域での入手も可能である点が想定されるが、あえて推察すると明治二〇年に武蔵国分寺跡で採取された一括資料が主体で、採取場所の可能性としては、武蔵国分寺創建期使用瓦の瓦形式と文字瓦の特徴などが七重塔再建期以降まで含んでいることから、塔跡周辺の採取とも考えられる。

資料群の観察(観察表)では、1・16・20の軒丸・軒平瓦裏面には朱が認められた。この軒瓦は軒先の荘厳に伴う朱彩色が付着したものの考えられ、実際の建造物に使用されたことを示している。武蔵国分寺跡からの採取品である可能性が特定できる資料である。

しかし、疑問も残る。⑫での展覧は武蔵国分寺跡での採取から一四年以上も経てからである。さらに各郡名瓦を五三点も揃えたとするとその蒐集には数倍の瓦片の蒐集と選別が必要だろう。その努力と費用も多大であったことは疑いないところであり、大規模な採取作業は一度だけではないかもしれない。ただ、国分寺での瓦採取の

光景は周辺では話題となり広く流布され、噂が宣伝ともなり新たな瓦が根岸の元へ持ち込まれる機会も増えたと思われる。なお、集古会で展示された「花瓦」「疏瓦」とは軒丸・軒平瓦で二〇点を数えるが、現存品には見当たらず、残されている破片瓦がそれであるとも言いが、数の上からも一致しない(註49)。

軒平瓦の13・16は平城京系のC字状対葉花文中心飾均整唐草文軒瓦、3の軒丸瓦は平城京系素弁八葉軒丸瓦の形式とされ、南比企窯跡での瓦生産の変遷を追った渡辺氏(2007)によると、A・D期の各段階で示されたC期に当たる。C期は武蔵国分寺創建期瓦の生産を中心とした時期で八世紀中頃(天平一三年以降)から同後半とされ、さらにC1期とC2期に分かれる。先述の軒瓦はC2期後半で天沼窯での生産が確認されている。有吉氏の武蔵国分寺での編年では創建期の三期の中で、Ib期・Ic期が対応するようである。

また、1・2は単弁六葉の軒丸瓦で国分寺再建期の使用用瓦であり、D期に該当するが、同種瓦はときがわ町亀の原窯跡での生産が知られる。22・23の偏行向唐草文軒平瓦は泉井窯での生産とされる。生産跡では南比企窯跡群中の泉井窯と紹介されてきた窯跡で現在の新沼窯地点が有力である。

なお、軒平瓦25・26は武蔵国分寺跡でも同范例がみられない形式であり貴重な資料提供となった。25については埼玉県日高市に位置する若宮遺跡に類似例がみられた。

中世瓦では、29は上向剣頭文軒平瓦で比企地方に多く確認されるものである。これらの瓦を見ると27・28の京都府東山の「東福寺」瓦のように明らかに他所の瓦以外は比企地方でも入手が可能な資料であることがわかる。

明治以降も昭和に入ってなお、武蔵国分寺跡や泉井窯址などの生

産遺跡でも瓦の採集が盛んにおこなわれ大量の瓦が流出している。資料①・④・⑩に見える「横見銘の全完形瓦」は本報告資料中には無いので、蒐集したかどうかも含めて当初の根岸資料―瓦の全貌はまだ不明の部分がある。しかし、その文字瓦資料の大多数が約一三〇年後の現在まで保存されてきたことはやはり稀有なことであろう。

註(本文中の説明補足と、参考文献・資料等を註・補註とした。)

1 根岸友山・武香関係資料には次の資料集や展示図録などがあり、本報告でも参考とした。

- 【文】1903『東京人類学雑誌―根岸武香氏記念号』第207号／【文】1998「友山と武香―青山根岸家文書の世界―」平成一〇年度第一回収蔵文書展 埼玉県立文書館／【文】2002「特別展 根岸友山・武香の軌跡」大里村教育委員会／【文】2005「特別号郷土の偉人―根岸友山とその子武香」大里町歴史研究会 会発足十周年記念／【文】2006『根岸友山・武香の軌跡』根岸友山・武香顕彰会編 さきたま出版／【文】2012『根岸友山・武香顕彰会創立十周年記念誌』根岸友山・武香顕彰会編／【文】2012『熊谷市指定文化財 根岸家長屋門保存修理報告書』熊谷市教育委員会
- 2 【文】1935『帝国図書館所蔵青山文庫和漢図書目録』現在は国立国会図書館webの一部閲覧可能
- 3 【文】1977 埼玉県立図書館編『武蔵国大里郡青山村 根岸家文書目録』及び追加目録(館内配架)／【文】1986 埼玉県立図書館編『収蔵文書目録第22集 林家文書目録―根岸家文書(青山村)を含む』
- 4 中条、熊谷、長井、別府、成田氏らの居館跡・創建寺院などの由緒が知られる。南北朝期から鎌倉公方や管領上杉氏の抗争と関東

では戦乱が続いた。永享一二年(1440)に、村岡河原での合戦が起こった。松山城攻めでは甲山古墳に上杉軍の陣所が置かれた。

5 「新編武蔵風土記稿」では、神宝・神体として「石剣・石棒・石神」などがみえる。また、古墳出土品、板碑などを示す古碑、古瓦なども記される。

6 渡辺華山(1793～1841)は、天保二年(1831)十一月に、妹の嫁ぎ先桐生へ向かう途中で熊谷宿を通り、妻沼聖天山を詣で、桐生からの帰路に深谷宿から籠原を経て三ヶ尻に赴いた。旧領の三ヶ尻村で龍泉寺や大麻生村の旧家に宿泊し近隣の古墳や城跡なども巡り『訪貳録』を著している。挿図にある「黒沢屋敷」は、市教委で発掘調査を実施したところ館を囲む掘が確認されている。また、『客座録』には、各所で実見した須恵器や土器などの考古資料の図もあり、古器物にも関心を示していたことが知られる。

7 『集古十種』は松平定信が編纂した古今の宝物・古美術品の蒐集図録、寛政二年(1800)より刊行。谷文晁らが挿図を描いている。

8 『雲根志』は木内石亭(1773～1801)の編纂の鉱物・珍石の解説書「独鈷石・御物形石器・車輪石」などは現在の考古遺物名にも受け継がれている。

9 松浦武四郎(1818～1888) 探検家 北海道の命名者・明治以後は好古家、蒐集家として著名。東京で「尚古会」という古物会も主宰しており、根岸友山をはじめ主だった好古家や蒐集家が訪れていた(根岸友山日記―林家文書 7635)。松浦の所蔵品を紹介・出版した『撥雲餘興』一・二集を明治一〇年・一五年に刊行している。根岸から渡ったものと想定される「武州大谷村(東松山市大谷三千塚古墳群か)掘出埴輪」や「武州大里郡掘出土鈴(杏葉)」も同書に図入りで掲載されている。現物も保存されている。

〔文〕 静嘉堂 2013 『松浦武四郎コレクション』展図録

10 『撥雲餘興』に掲載される「武州大谷村掘出埴輪」の入手について、根岸家との書簡が残されている。根岸家文書 4643、4651、4652、4647 など。〔文〕重田正夫 2014 「明治初期における武蔵の「好古家」根岸友山と武香（上）」『熊谷市史研究』第六号

11 熊谷市域では明治初年に壮年期を迎えていた名主や商家主たちは年少期から国学や博物学を学んでおり、文芸や地誌・古物への知識も持ち合わせていた。また趣味嗜好を同じくする者らがサロンのに自己の知識や蒐集品について歓談・交換もしていた。根岸友山・武香らの輪には竹井澹如、中村孫兵衛のほかに、玉作の須藤開邦、吉見の内山作信・温載、都幾川の小屋元長 川越氷川神社の山田衛居らもおり、東京府下には蜷川式胤をはじめ神田孝平、東京浅草の骨董商であった畠山如心斎（1830～1883）、柏木貨一郎、山中恭古（1850～1928）らの収集家や貴族院議員等の愛好者の人脈があった。特に根岸は集古会の中心メンバーとしても活動し後に会長も務めた。集古会には他に、熊谷の周囲では飯塚吉五郎、須長宜冬・長谷川敬介・長島甚助らの名もみえる。

□竹井澹如(1839～1912) 熊谷宿本陣名主 政治家好古家 集古会会員 慈光寺小水磨経などを所有していた。

□蜷川式胤(1835～1882)明治政府の博物館・文化財行政を司っていた。また、モースの日本陶磁器の収集を援けている。蜷川は〔文〕『観古図説』（明治九年（1876）刊行）を出版している。

□柏木貨一郎(1841～1898)「探古」と号す。幕府の大工棟梁 明治期の文部省博物館に勤務 古美術鑑定家、古銭収集家・研究家としても著名。根岸氏と交流が深い。

□沼田頼輔(1867～1934) 考古学者、紋章学者としても著名〔文〕

「埼玉県下所在鰐口年表」考古界 第三編第三号に根岸武香と連名で、妻沼聖天堂などの鰐口を紹介している。〔文〕内川隆・宇野淳子 2013 「明治前期における好古家の実相―松浦武四郎と柏木貨一郎の土偶人の斡旋をめぐって」国学院大学研究 開発推進機構紀要 第5号／〔文〕中井淳史 2005 「集古の伝統、尚古の系譜―日本歴史考古学の近代」大阪大学 日本語・日本文化 第三五号

12 ①◎小屋元長の蒐集資料は埼玉県立文書館に寄託收藏されている。文献資料・拓本類なども多含まれている。〔文〕埼玉県立文書館編 1997 『収蔵文書目録第二六集 小室家文書目録』

◎阿部正功の蒐集資料「京都大学総合資料館」に收藏。

◎二条基弘の蒐集資料「東京国立博物館」に收藏。

◎神田孝平の蒐集資料「関西大学博物館」に收藏。中条出土埴輪を含む。

◎松浦武四郎の蒐集資料、『撥雲餘興』の掲載資料は「公益財団法人 静嘉堂」に收藏。大里出土杏葉を含む

13 ①□芳川波山(1794～1846) 忍藩の儒学者国学者 藩校の修学館の教師

□寺門静軒(1796～1868)妻沼に両宜塾を開いた、後に根岸家の三余堂にも招かれ、没後は根岸家に葬られている。

□安藤野雁(1815～1867) 福島県桑折の出身 幕末の国学者。歌人 万葉集の研究をおこなう。各地を遊歴の後、根岸家に身を寄せた。墓所は熊谷寺に所在した。歌碑が熊谷堤に建つ。

14 ①昌平坂学問所で調査・編纂した官撰の地誌。幕吏が村々を訪れ聴取・寺社古跡の現地調査や古文書調査まで行っていた。根岸家は大里郡青山村の項に「舊家」として記載される。

甲山古墳―埼玉県指定史跡 比企丘陵東端部に築造された古墳時代後期の円墳、周溝は明確ではないが、墳丘直径九〇m、高さ一二mを測る大円墳である。当初は三段築成であったと考えている。背後の丘陵に広がる三千塚古墳群を背に、荒川を挟んでさきたま古墳群を望む。さきたまの国造家と繋がる有力豪族の墳墓であろうか。風土記には石室があり副葬遺物があったとされるが、埋め戻したとされ、現在では石室の入り口は不明である。武香は武蔵国造の墳墓と考えていたようで、墳頂にある青山神社の報告を記している(林家文書 7548・青山文庫)。

15 「新編武蔵風土記」は幕府提出の正本と昌平坂学問所の副本が作成されたが幕府の管理であり、一般には閲覧が難しかったため、その出版を望む声が高まっていた。明治時代に入り本書は政府管理の浅草文庫に収蔵された。根岸は普及版の刊行事業を思い立ち、原本の筆写をおこない活字版を起し直し、挿画は新たに描き直して活版印刷とした。多大の労力と時間を要して和装本全八〇冊が明治一七年(1884)に刊行でき、頒布を始めた。なお、内山や小室らは別に風土記の筆写を進めていたが、根岸の事業にも考証・校訂などの面で助力をしている。なお、昭和三二年には「新編武蔵風土記稿刊行会 代表根岸喜夫」から昭和改訂版が明治の校訂として新たに刊行された。

- 小室元長(1822～1885) 比企郡都幾川村番匠の医師 好古家 地誌、古記録の蒐集家・研究者
- 内山作信(1816～1888) 横見郡久米田村の名主・戸長 好古家 黒岩横穴の発掘などに協力する。久米田古墳群の報告として「古墳都々伊考」をまとめる。
- 内山温載(1840～1895) 内山作信の息子 好古家 県会議員

吉見百穴の保護に努力する。

□ 畠山如心齋(1830～1883) 国学者 明治初期の考古家・鑑定家 浅草で骨董商を営む。畠山重忠の子孫といい、都幾川慈光寺の重忠板碑の考証や顕彰に小室等と共に係わる。☒ 芳賀明子 2012 「好古家」の書簡集『内山手簡』―内山作信と小室元長との交流」埼玉県立文書館紀要 第25号

16 皇国地誌編纂事業は未完で中断されたが、埼玉県分の一部は1953年『武蔵国郡村誌』として刊行された。1988年には東京大学史料編纂所の保存分により『大日本國史』として刊行された。本書には「村岡茶臼塚古墳」「万吉古墳」の記載が見える。

☒ 塩野 博 2006 『埼玉の古墳―大里』さきたま出版会
 ☒ 新井 端 2011 「万吉観音院の「金吾小野」銘板碑について」『熊谷市史研究』第4号

17 『武蔵国大里郡吉見村誌』(埼玉県立浦和図書館所蔵)は、その記載内容から、皇国地誌編纂事業により製作された資料書で、本来吉見村が根岸家等の関係者に保存されていた副本と思われる。地誌全般と拓本類などの参考資料も付されている。武香の日記「千秋日記」明治九年一月～四月の記事に皇国地誌編纂の調査の記述がみえる。先述した「田村」墨書土器や鏡類の考古資料はこの時期までの出土品と思われる。

18 約二〇点の遺物は縄文時代土器・石器、弥生土器、土師器、須恵器、銅鏡等で、船木、東山、賢木岡の場所記載がある。図の署名には根岸武香の名がある。彩色の様子から当時蜷川が刊行した考古図譜も参照したことが考えられる。第3図参照

19 「田村」墨書土器については、明治二八年(1895)四月十九日に大野雲外・鳥居龍蔵が根岸家を訪れた際に実見したことを述べて

いる。〔文〕大野雲外「根岸家の古物に就いて」『東京人類学雑誌』No.267／〔文〕1931『土の中の日本』中央史壇 再所収／〔文〕宮瀧交二 2008「田村墨書土器について」『埼玉の考古学』II 埼玉考古学会編

20 現在重要文化財となっている上中条出土の埴輪には「馬形埴輪」と「武人埴輪」が知られる。明治天皇は北陸東海行幸(明治一三年・1880-9月)に際して中仙道熊谷宿の竹井邸に宿泊した。その際に中条出土の「馬埴輪」を中村が天覧に供した。短甲の「武人埴輪」は根岸家で保存してきたもので、同家を訪れた多くの者が実見している。考古学関係図書や写真集にも多用され、切手にも採用されるなど広く知られた熊谷の埴輪である。発見当時の事情を知る資料は、〔文〕重田正夫 2014に詳しい。また、現在関西大学博物館に収蔵される中条出土の人物埴輪頭部二点(男巫 冑を被る武人)は、元毎日新聞社社長であった本山彦一の寄贈品で、元は神田孝平の蒐集品で、神田へは根岸から渡ったとされる。他に根岸家にも、中条出土とされる埴輪がある。三体とも青山文庫資料中に作図が残されている。

□神田孝平(1830～1898)元老院議員 貴族院議員 初代人類学会長 蒐集家でもあり、〔文〕1884『日本太古石器考』を刊行している。明治二六年一月一五日に根岸は神田宅を訪問し、越後高田狐塚出土品の環頭大刀などの図を見ている。

21 中村孫兵衛(1854～1933) 埼玉郡上中条村出身 政治家 大里郡長 中村の知らせにより、根岸は埴輪を実見に中条まで出向いている。当初、発見埴輪の多くは毀されたとされるが、根岸はほとんどの埴輪を引き取ったと思われる(註20参照)

22 根岸の地域史へのまなざしを窺う資料には青山文庫に残された自

身の論考や、好古仲間の論説・郷土資料等がある。これらの分野の資料を多数収蔵していたが、中には多くの書き込みや添削がなされたものも見受けられるなど、武香自身が研究し考察していたと理解している。目に着いたものを次に掲げる。

- ・「伊波比神社考」(青山文庫 国会9-13)横見郡式内社の小考察
 - ・「野本村出土物を観る記」(林家文書756) 明治三四年三月 東松山市野本將軍塚古墳墳頂経塚発掘遺物の報告書で、武香の自筆。見取り図遺物実測図、拓本を揃える。この報告については帝国大学人類学教室で、人類学会の例会として明治三四年四月七日に発表している。発見間もない最新の情報を、若い会員等に報告する武香は、この時六四歳である。
 - ・「埼玉津賤之芋手尽」(早稲田大学図書館 ル4-1440)柏木貨一郎の埼玉津に係る論考で本文中に「友人根岸武香」より情報を得たとの記述があり、柏木との研鑽が窺われる。
 - ・「骨董集」(青山文庫 国会9-13)・「温古録」(青山文庫 会841-5)
 - ・「土器諸図」(青山文庫 国会す58)・「鏃の図」などは、出土遺物の実測図や拓本を交えて武香が編纂した資料集である。明治八年ころから亡くなるまでの製作と思われる。
 - ・「古見舊事考」(青山文庫 国会 893-74) 元治元年八月 信香(武香)が筆写校合している。他に、地方史資料としても多くの資料を筆写・所蔵していた。新編武蔵風土記稿刊行の際の裏付け資料としたものであろうが、小室元長等の校訂が加筆されているものも次に見られる。
 - ・「成田分限帳」「北條家分限帳」「武蔵古文書」「都支山日記」「武蔵七党系図」「武蔵志料」「武蔵野話」ほか 数十冊に及ぶ。
- なお、これらの文書の一部は「国立国会図書館デジタルアー

23 カイブ」で閲覧できるものもある。補註2 実測図の作者を参照
大境古墳群などの青山周辺の古墳の多くは、遺物の回収目的や
開墾などで削平されており、出土品の多くが、根岸のもとへ集ま
った。根岸家文書には、武香が作成したと思われる遺物実測図な
どの記録資料が青山文庫「骨董集」などに残されている。

24 船木遺跡 青山の東端台地に広がっていた弥生〜中世の集落跡。
区画整理で発掘され消滅した。吉見村誌によると明治十一年五月
二五日に「重圏文鏡」が出土しており、拓影が「武蔵国大里郡吉
見村誌」に載せられている。「重圏文鏡」は古墳時代前期後半（四
世紀前半）に良くみられる遺物であり、注記にある「青山字雷船
木山下」は船木遺跡に該当すると思われる、同地点から発掘された
方形周溝墓に本来伴っていたとしても違和感はない。

25 塩野博 2002 「埼玉県出土の銅鏡―古墳時代を中心として―」
埼玉県立博物館紀要 第27号
三千塚古墳群 現在の東松山市北部の雷電山丘陵一帯に広く分
布する古墳群で、古墳時代中期から後期までの間に、前方後円
墳の雷電山や秋葉塚古墳と共に多数の円墳群が築かれている。多
くの埴輪を伴う古墳群であつたらしく、根岸家へ集った埴輪(土偶
人)・副葬品の多くは本古墳群からもたらされている。現在古墳群
のほとんどは、ゴルフ場敷地となつて壊滅しているが、最高度地
点に位置する「雷電山古墳」(帆立貝式前方後円墳)―五世紀初頭
―が良く保存されている。古墳上の雷電社の扁額は根岸友山の墨
筆である。文金井塚良一編 2012 「三千塚古墳群」東松山市埋
藏文化財調査報告書 第29集
26 大境古墳群からの出土品は他に五鈴付杏葉、鉄鏃などが出土とさ
れる。しかし、松浦武四郎の著作『撥雲餘興』には柏木の作図に

より大里郡出土の三鈴杏葉が載せられているが、内川 2013 によ
ると、内区が偏円と三角部に区分され中心珠点を持ち群馬県上芝
出土の同形品に類似することから六世前半以降としている。
この三鈴杏葉は東山古墳出土品と思われる根岸家から提供してい
ると推定される。

27 菟古舎・稽照館 根岸家長屋門に接して造られていた根岸氏蒐集
品の展示施設。当時の東京帝国大学資料室にも劣らないといわれ
た。文宮瀧交二 2004 「大里町青山・根岸家の「菟古舎」につい
て」埼玉県立博物館紀要 第29号/小杉温邨 1901 「千とせのあ
き」(補註3参照)

28 小杉温邨 (1834〜1910) 阿波蜂須賀家の陪臣 国学者古文書・
古記録の調査・収集家
E・S・モース (1838〜1925) アメリカ出身 招聘外国人教師 東
京帝国大学教授 明治一〇年 (1877) 府下品川区の「大森貝塚」
を発掘する。日本考古学や日本人類学、大学教育の基礎造りに貢
献し、帰国後は日本文化の普及にも尽くした。一二年 (1879) 八
月十一日と同一五年 (1882) 十月七日の二回、青山の根岸家を訪
れている。一五年の訪問ではビッグロー (1850〜1926) を伴い、古美
術品などを蒐集している、根岸家にはこの時の寄贈品に対して感
謝状が贈られている。

なお、日本の暮らしに関わるモースの蒐集品約一万五千点は、
アメリカ マサチューセッツ州セイラム市「ピーポデイ・エセッ
クス博物館」に収められている。また、陶磁器類約五千点はボス
トン美術館に収蔵されている。考古、陶磁器、風俗資料、民具、
動植物標本、写真と多種多様な資料があり、日本文化研究とその
理解のために大きく貢献している。日本での帰国展も度々開かれ、

根岸やモースの意思が生きていることを感じられる。

㊦2007 品川区立品川歴史博物館編『日本考古学は品川から始まった』展図録／㊦1990 国立歴史民俗博物館編『モースコレクション』展図録／㊦1990 大田区立郷土博物館編『私たちのモース - 日本を愛した大森貝塚の父』展図録

㊦29 黒岩の発掘には、根岸のほか須藤開邦・内山温載・秋葉太玄らの関与が知られる。吉見百穴では、地元地主の大澤藤助がいる。後、県議会議員となった内山温載は吉見百穴の保存にも努力し、大正一二年(1920)に国指定史跡に指定されている。この時の調査は柴田常恵が報告している。現在は特別史跡となっている。

㊦柴田常恵1925「吉見百穴」『埼玉茨城群馬三県に於ける指定史蹟』内務省

□柴田常恵(1877～1954) 考古学者 埼玉縣史監修者 國學院大學教授 坪井の影響から考古学に興味を持つ。

一五歳の時に、根岸の追悼文を書いている。㊦1903「根岸武香君小傳」『東京人類学雑誌』18-207

㊦30 H・V・シーボルト(1852～1908) 明治初期のオーストラリア外交官 実父は江戸時代に来日した医師シーボルト。明治一二年『考古説略』・『日本考古学覚書』を刊行し、日本における考古学の名称を定着させた。自宅での古物会などを開催し、根岸らの多くの好古家たちと繋がりを持っていた。根岸家には明治一一年四月に画家五姓田義松を伴って黒岩横穴の視察に来訪した。その見聞を盛り込んだ『考古略説』を、友山と武香にそれぞれに贈っていることが友山の送った札状からわかる。

㊦関口忠志1993「関口家ハイブリッド資料の研究(3)―研究と交流の紹介」『シーボルト記念館紀要 鳴滝』第3号

㊦31 黒岩横穴の記事は次のものが知られる。

①『東京日日新聞』 明治一一年四月一五日、同一六日付 柏木 貨一郎の報告

②『民間雑誌』第175号 明治一一年五月二日発行 黒岩横穴の記事に内山温載の論説を紹介している。

③ 佐藤弘毅の名で1982『好古雑誌』第7号に「武蔵国黒岩村古器物発見記」には発掘成果と所見を述べている。

また、内山書簡(小室家文書140)には、シーボルトらの見学の様子が聞き書かれている。

㊦32 蜷川やシーボルト等が東京府下で度々の陳列会を開催しているが、東京に居所を構えていた根岸らも良く出席していた。大森貝塚発掘の情報は、当時の新聞だけでなく、好古家等の情報網からも入ったと思われる。

㊦33 モースの石上寺での講演は明治一二年(1879)八月一三日のこと、前日に熊谷の竹中周則家に宿泊している。ダーウィンの進化論を語ったことは、熊谷の聴衆にも刺激的であったようだ(林幽章『幽嶂閑話』による)。モースのコレクションには竹中家の品もあり、根岸家からは土器以外にも生活用具などの提供があったと思われる。なお、武香とモース間の手紙はモースを案内した宮岡常次郎・竹中成憲兄弟らが翻訳している。

□林 有章(1859～1945) 熊谷出身の政治家・郷土史家 熊谷の近古の風聞を集め『幽嶂閑話』を著わしている。

㊦『朝日之舎日記―川越水川神社祠官 山田衛居日記集』1997 川越市

㊦34 ㊦E・S・モース著 石川均訳1971『日本その日 その日』 東洋文庫 179 平凡社 (青山訪問は、第二十四章 甲山の洞窟

135頁に掲載) 後年の執筆のためか、日時や同行者にやや混同がみられる。この時の訪問で根岸家の土器などを描いたモースの絵が同家に保存されている。また、同書には、蜷川式胤、柏木貨一郎・松浦武四郎らとの面談も記している。とくに柏木へは陶器蒐集の件もあつてたびたび訪問している。

35 吉見百穴の学術的評価は、[文](#)金井塚良一 1978 「吉見百穴横穴墓群の研究」校倉書房 にまとめられており、同書が同古墳群の基本文献といえる。

36 □坪井正五郎(1863～1913) 東京出身 人類学者 考古学者 日本人の起源に関心があり、吉見百穴を土蜘蛛(コロボツクル)の住居と考えていた。なお、坪井は根岸武香と生涯にわたる親交があり、大学・学会など様々の場面で根岸を恩人として、また学究の徒として紹介している。また、根岸も坪井らの活動の援助を行っていた。1896年に人類学会会長となる。

[文](#)1887 「埼玉県横見郡黒岩村及び北吉見村横穴探究記」東京人類学雑誌 2-19 / [文](#)1900 「吉見の百穴」歴史地理 2-1
・明治三十四年一月二十九日熊谷中学校の校友会にて「人類学要領」を講演する。同年三月十日第二回探古遠足会が吉見百穴から根岸家までの順路で開催、坪井は家族ともども参加する。[文](#)1903 「根岸武香氏記念号の巻首に」東京人類学雑誌 207号

37 吉見百穴の発掘後は、視察・見学などで混乱したため、国・県への保存を働きかけていた。小室や内山等は「新編武蔵風土記稿」の刊行事業の他に百穴保護活動にも協力している。彼らは地元に関する資料・出土品など地域を知る資料に目を向けており、その流出を防ぎ、考証や検証をおこなうことに主たる関心が向けられたようだ。

38 考古学・歴史学関係者では前出に加えて、次の人々がいる。
□高橋健自(1871～1929) 帝室博物館 考古・古美術を専門とした。考古学会の事務局。根岸に関する次の文献がある。

[文](#)1911 「吉見の百穴と故根岸武香氏の蒐集品」考古学雑誌 2-4
[文](#)1911 「吉見百穴と根岸翁の遺蹟」神社協会雑誌 118
□神保小虎(1867～1924) 東京人類学会事務局 帝国大学理学部奉職 [文](#)1888 東京人類学雑誌 3-28 に「埼玉県吉見百穴保存のための寄付金をつゝる広告」を掲載

□八木契三郎(1866～1942) 東大人類学教室 千葉県下の貝塚調査 東亞(朝鮮・中国等)の考古遺跡の調査を主とした。□若林勝邦(1862～1904) 帝国大学人類学教室助手 □三宅米吉(1860～1929) □白井光太郎(1863～1932) □大場盤雄(1899～1975) 國學院大学教授 □稲村坦元(1893～1988) 考古学者 埼玉縣史編纂者

39 □阿部正功(1860～1925) 最後の磐城棚倉藩主 華族子爵 考古学者 大野・鳥居らと秩父方面調査、市内三ヶ尻古墳群や二本の塚群を踏査した。この報告は、同年五月五日に帝国大学人類学教室にて「武蔵国秩父地方人類学的探検の大略」で発表されている。また、阿部は各地で遺跡調査をしており、明治三十五年(1892)には吉見百穴の追加発掘調査を実施している。集古会での活動も多く、麻布の阿部邸には蒐集品を収蔵した「土俗陳列館」を建てていた。後に、考古資料を中心とするその所蔵品の多くは京都帝国大学に寄贈され、現在の京都大学総合博物館に収蔵されている。
40 □大野延太郎(1863～1938) 雲外 坪井のもとで、東京帝国大学人類学教室画工になる。考古的調査・報告も行う。[文](#)『日本考古図譜』『土の中の日本』など刊行する。根岸家には何度も来訪して

いると思われる。著書『日本考古図譜』には中条出土の短甲武人埴輪などが掲載されている。[文]1903「根岸家の古物に就て」東京人類学雑誌 18-207号

41 □鳥居龍藏(1870～1953) 人類学者・考古学者・民族学者 アジア的視点から日本民族を研究 坪井の後継者 東京帝国大学人類学教室主任 上智大学教授 後國學院大学教授

42 明治三〇年(1897)に刊行された[文]『日本石器時代人民遺物発見地名表』東京帝国大学理学部人類学研究室編 には、武蔵国(東京、埼玉、神奈川の一部)の遺物発見地として、二二八か所が挙げられているが内訳の一七五か所の報告者は根岸武香である。同大の坪井正五郎に協力する形で報告したものであるが郡別では比企・児玉・大里・秩父の大半の報告者を根岸が占めており、根岸の行動力や学術的興味からすると大方は自身で現地踏査していると思われる。

なお、本書は根岸の没年(明治三五年一二月)までの改訂で、三一年三一八か所、三四年六八三か所と増加しているが、昭和五年改訂増補では一二三三カ所となった。先の四郡内では六七か所の増補となっているが、児玉郡三〇カ所の増補を除いて目立った発見はなく、明治三四年までの根岸の報告が基礎であり、かなり綿密であったことを裏付けている。

調査量をみると、比企郡域の九割は根岸で他は若林勝邦と人類学教室、吉川斧石、関保之助、大徳子龍、蒔田鍵次郎、林若吉である。大里郡では八割が根岸で他は若林、阿部正功、石野瑛、柴田常恵、堀田璋左右、大木臺三郎、人類学教室である。連名で表記されている場合もあり、若い研究者と同行したものであるろう。「日本歴史地理研究会」では賛成員として名を連ねている。明治

三四年三月一〇日 同会の一行が遠足会として、吉見百穴―松山城跡―青山根岸家を巡り、同家では蒐集資料の見学をしている。[文]1902「百穴と松山城と」『歴史地理』第三巻第四号 日本歴史地理研究会

東京人類学会の例会にもたびたび出席し、東松山市の野本経塚の報告もしている。5頁[図]5は根岸武香の逝去に際し、東京人類学会名で贈られた「弔辞」である。当時の会長は坪井正五郎であったが、坪井も別途弔辞を送っている。

43 根岸武香は集古会を通じてさまざまな古物に触れていたが、「印譜・古銭」に強い関心があり、大部の古銭蒐集品があったようだ。青山文庫には次の未定稿や関係資料などが残されている。『榎園

泉貨譜稿本』青山文庫(842)、『榎園泉貨史稿本』青山文庫(843) また、祭事案内・各種切符・弁当の包み紙まで生活・風俗を示す各種のものを貼り込んだ「張交帖」も残されており、根岸の関心はモースの如く生活全般の資料を残そうとしたかのようなのである。

[文]2012「ある考古家のコレクション」根岸武香と青山文庫」国立国会 図書館月報 No.620/[文]1900「集古会の事業」『考古』第1編第7号

44 [文]日本考古学協会 1985「武蔵国分寺跡遺物整理報告書―昭和三十一年・三十三年度」/[文]国分寺市教育委員会 1980「武蔵国分寺跡遺物整理報告書―昭和四三・四五年年度」/[文]島根県教育庁古代文化センター・同教育庁埋蔵文化財センター 2008・2011「平塚運一古代瓦コレクション資料集(1)(2)」

45 [文]2007 埼玉県立文書館編「収蔵文書目録第三六集 小室家文書目録」特に島山如心斎の手簡

46 明治期は泉井村、後に亀井村、現在は鳩山町に属している。

☑重田定一 1905 『武蔵国分僧寺の廢址』『古蹟』第二卷第二号 重田は東京帝室博物館所蔵瓦について「比企郡亀井村泉井字新沼」出土と報告し、次のように説明を記している。

「新沼の地は、東西八十間、南北五十間、南に水田あり、西に新沼と清泉ありて、北に山林あり、慶応年中、この山林を開拓して竈の舊址を発見したといふ。従来 発見したる古瓦は、豊島・大里・横見・幡羅・秩父・榛沢・男衾・埼玉・高麗・入間・加美・荏原・足立・児玉・比企等の一字あるものまたは二字あるもの、大井・白方・湯島等の文字あるもの唐草瓦、花頭瓦、等にして、字金澤にても多く発掘せられたり。亀井の地は、古老の口碑にも、瓦の名産地にて、国分寺御建立の時諸郡より寄進すべき瓦の注文を得て焼き山車またその註文を請けて、久しききたるよし・・・(後略)」

☑住田正一 1916 『武蔵国分寺文字瓦に就いて』考古学雑誌第七卷七号 / ☑稲村坦元 1922 『武蔵国分寺の調査』東京府史蹟勝地調査報告書 第一冊 / ☑田沢金吾 1933 『古瓦(奈良時代)』日本考古図録大成 第十六号 日東書院 には場所の特定は無いが泉井瓦窯からの出土瓦が載せられており、多数の瓦が出土していると報告されている。 / ☑石村喜英 1960 『武蔵国分寺の研究史考』『武蔵国分寺の研究』明善堂書店

石村は、武蔵国分寺供給瓦窯跡として「泉井瓦窯址」を挙げ、「天沼・新沼・太光後・金沢」の四地点を示している。また同書には泉井窯出土の瓦が多数掲載されており、所蔵者として林織善と比留間顕典が群を抜いて多数を所蔵していることがわかる。比留間家は地元泉井で、明治期に根岸が訪れた同一家であろう。

☑鳩山町教育委員会 2000 『天沼遺跡』鳩山町埋蔵文化財調査報告書第20集、鳩山町教育委員会 2013 『町内遺跡群12』鳩山町埋蔵文化財調査報告書第20集では、範囲確認調査により、須恵器生産窯をベースとした瓦陶兼業窯が二四基確認され大量の瓦片が出土している。武蔵国各郡の刻印やヘラ書の郡名瓦があり、国分寺創建段階からの主要生産窯であったことが確認されている。

☑1931 『埼玉縣史』第二卷 奈良平安時代 掲載の挿図版―第三十六図「泉井村瓦陶窯址分布図」 本文10頁図6参照

47 朱墨注記 近代期までの蒐集遺物には墨書や朱書での注記を遺す資料がよくみられる。平塚運一蒐集瓦などにもみられるが、採集の場所や日時等の情報が簡潔に記されたものが多い。

☑南方熊楠(1867-1941)大英博物館の研究員 生物・民俗学者 民俗学歴史学にも造詣が深く著作も多い。東京帝国大学の学生であった頃大森貝塚で表採した資料が残されている。資料のほとんどは南方の記念館に収められている。☑品川歴史館 2007 『日本考古学は品川から始まった』展図録には南方の採取資料が掲載されている。

48 林家文書-10209 「幡羅郡名瓦」拓本は『埼玉縣史』(同書第十図)に掲載される拓本と同一であり、これらの資料は昭和六年(1931)までに蒐集されていることがわかる。林蒐集瓦の全体は不明だが、柴田・稲村・石村の間接資料からかなりの質と量があったと思われる。☑1931 『埼玉縣史』第二卷 奈良平安時代 柴田常恵・稲村坦元の執筆。稲村蒐集資料中には多数の古代瓦の拓本が収められており、泉井窯や勝呂廃寺出土瓦の一部は林から提供されたものを多分に含んでいると思われる。なお、これら稲村の拓本資料は現在「埼玉県立史跡と民俗の博物館」に収蔵されている。

また、柴田常恵の資料は國学院大學に「柴田常恵拓本資料」と

して「亀井村泉井窯跡」出土の瓦拓本が所蔵されている。拓本の年紀によると大正一三年(一九二二)当時、亀井村泉井の比留間顕典氏の所蔵品から採拓していることが知られる。この拓本中のいくつかは埼玉縣史第二巻の挿図版にも使用されており、埼玉縣史調査の過程で採取したものであると思われる。ただ、同一品が石村報告では 林織善所蔵となっていることから、後に資料の移動があったものと思われる(柴田常恵資料「播羅郡」箱 6-9-9「高麗郡」箱 6-9-9※林資料と同一)。／**文**石村の『武蔵国分寺の研究』の第四章「古代瓦の研究」では、泉井窯址出土の郡名瓦一三種・人名瓦一五種が拓本と共に紹介されている。同書の図録第 96 図 183 の「高」麗郡瓦、図録第 105 図 262 「男」衾郡瓦、図録第 108 図 288 「播」羅郡瓦は林家 10209 掲載の拓本と同一である(前掲、柴田常恵資料と同一)。／**文**1980 埼玉県立博物館・収蔵資料目録 II 「稲村坦元コレクション」

49 高橋健自は、考古学会の研究旅行で、吉見百穴と根岸家の訪問記を記している。その文中で国分寺瓦に触れている。

「〜根岸氏の蒐集品中に特筆すべきは武蔵国分寺の古瓦である。氏はこれが蒐集にもすこぶる努力されたと見えて少なからず見るべきものがある。ことに郡名をはじめ地名を銘したものが随分多い。……巴瓦や唐草瓦にも参考にすべきものが少なくない。」

とあり、軒丸・軒平瓦の種類や内容も豊富であったことを窺わせている。また、文字瓦に関しては、沼田頼輔が根岸家資料を使用して文字瓦の分析をし、その内容は、『考古界』に示されている。

文高橋健二 1911 「吉見の百穴と故根岸武香氏の蒐集品」考古学雑誌第二巻四号 / **文**篠原市之助 1911 「武蔵国分寺の古瓦に就

きて」考古学雑誌第二巻七号 / **文**沼田頼輔 1903 「武蔵国分寺発見に係る文字瓦に就きて」考古界 第1編 42 / **文**野中完一 1902 「武蔵国分寺廃跡の文字瓦」考古界 第1編 8

50 **文**有吉重蔵 1995 「武蔵国分寺の創建期瓦窯」『王朝の考古学』雄山閣

51 **文**渡邊 一 2006 「第四章地方窯と瓦生産・土師器生産」『東国古代窯業生産の研究』青木書店

52 埼玉県日高市『日高市史 原始・古代資料編』(本文・註 新井 端)

第Ⅱ章 「古瓦」資料の報告

本章では、根岸家が所蔵する根岸武香が収集した古瓦のうち、軒丸瓦一〇点、軒平瓦二〇点、平瓦六九点、丸瓦一六点、堤瓦四点の合計一九九点について紹介する。本資料は採集地点を示す記録が残されていない。しかし、瓦の文様や文字のありかた、形態等から東京都国分寺市に位置する、武蔵国分寺跡と係わりのあるものが多いことがわかる。

江戸時代末期頃から、江戸近郊の名所・旧跡を探訪することが流行し、とくに武蔵国分寺跡は、江戸から程近くに大規模な遺跡があることが知られ、知識人達の注目を集めていた。武蔵国分寺跡から検出される瓦は、文様形式の豊富な軒丸瓦、軒平瓦や、郡名、郷名、人名等が銘記された文字瓦等を中心として、貴重な考古学的資料になっている。武香が収集した古瓦も学術的価値のある資料が多く含まれている。

資料の整理にあたっては、国分寺市教育委員会の有吉重蔵氏の「ご教示を受けるとともに、『武蔵国分寺跡調査報告―昭和三十九〜四十四年度―』と同じく『武蔵国分寺跡発掘調査概報』等の報告書を参考にさせていただいた。

また、版画家の故平塚運一氏が収集された国内外の膨大な数の古瓦の中から、武蔵国分寺関連のものを整理・報告した『平塚運一古代瓦コレクション資料集』(1) (註1)、『平塚運一古代瓦コレクション資料集』(2) (註2) 等についても参考にさせていただいた。

資料の計測・分類・観察表の記載方法は、『平塚運一古代瓦コレクション資料集』(1)、(2) では、国分寺市教育委員会のマニュアル

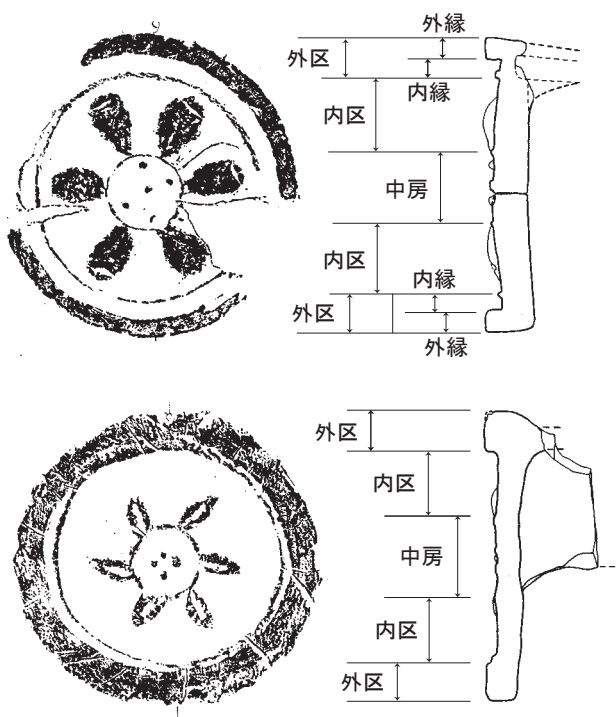
や『武蔵国分寺跡発掘調査概報』等報告書の分類基準に基本的に依拠していることから、本稿においてもこれにならうこととする。以下、図版順に文様瓦から紹介する。

第一節 軒丸瓦 (第1図)

武蔵国分寺跡出土軒丸瓦については瓦当範の数がきわめて多いことが知られており、網羅的な形式設定が行われていないため、本稿では型式にかかわらず資料を紹介する。

根岸武香のコレクションには軒丸瓦が合計一〇点あり、そのうち一点は中世(7)、三点は近世(8〜10)である。各部位・名称については図Aを参考に述べる。

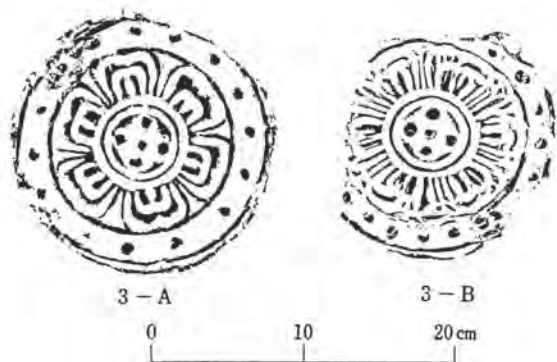
1、六葉の蓮華文をもつ。弁は素弁、涙滴状の形をしている。輪郭



図A 軒丸瓦各部位名称



第1図 軒丸瓦 (1 ~ 10)



図B 下総国分寺跡出土軒丸瓦

線はなく中房とつながる。中房は凸線で輪郭を表現し、円形の蓮子1+4が配される。内区外周に圏線がめぐり、外区の内・外縁を明瞭に分ける。外区は内・外縁とも素文である。

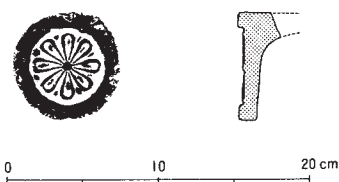
2、欠失が大きい。六葉の蓮華文をもつと思われる。弁は素弁、涙滴状の形で断面台形状に盛り上がる。輪郭線はなく中房とは接続しない。中房は凸線で輪郭をあらわし、円形の蓮子1+4を配する。内区外周に圏線がめぐり、外区は内・外縁とも素文である。

3、蓮華文は二葉を残すのみである。弁は素弁で輪郭線を持ち、火頭状の形をしている。内区外周に圏線がめぐり、外区は内・外縁とも素文である。

4、六葉の蓮華文を持ち、弁は素弁で輪郭線はない。中房からのびる蓮弁は細長い葉柳状で、中央部は縦に細長く窪んでいる。内区外周に圏線がなく、外区内・外縁の区別が明瞭でない。中房は凸線の輪郭線で表現し、円形の蓮子四つ配す。

5、七葉の蓮華文を持ち、弁は素弁で涙滴状の形をしている。弁には輪郭線がめぐり、一か所のみ二重になっている。弁間には三角形の凸部が表現されている。中房は凸線で輪郭をあらわし、円形の蓮子を配す。外区は存在せず蓮弁の先端で丸瓦部と接合する。

6、八葉の蓮華文をもつと思われる。弁は素弁で涙滴状の形で輪郭線をもつ。外区外縁は丸瓦部との接合の際、粘土を継ぎ足してユビ



図C 山城清水寺出土(採取)軒丸瓦

ナデで作りに出している。

7、六葉の複弁蓮華文の可能性はある。外区内縁に円形の朱文を配し、外区外縁は素文である。大半が欠失しているため詳細は不明だが、本資料と同文様の可能性のある資料として、下総国分寺跡出土の複弁六葉蓮華文軒丸瓦があげられる(図B)。『市川市史』(市川市史編纂委員会1974)によると、平安時代のものとされている(註3)。

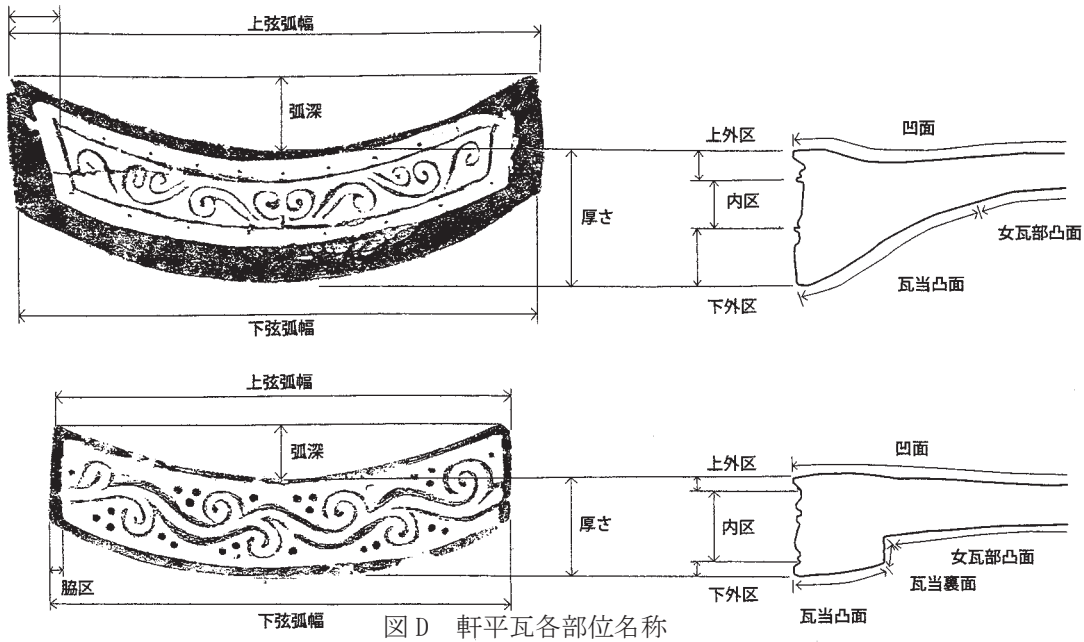
8、弁は素弁で、中央部が縦に細長く窪んでいる。形は涙滴状で輪郭線はない。外区は素文である。直径の推定が9.3cmと非常に小さい。これと文様・大きさが類似するものが、『宇野信四郎蒐集 古瓦集 成』(田熊信之・天野茂1983)に近世のものとして紹介され(図C)、出土地或いは採集地として山城国清水寺があげられている(註4)。

9、中房の中央に朱文を一つおき、その周囲を六単位の菊花文様がめぐり、さらに中房の周囲にも同様の菊花文様が六単位均等に配される。近世、根岸家の屋根瓦として実際に葺かれていた瓦である。

10、小片資料であるため詳細は不明。外区内縁と思われる個所に円形の朱文を配し、内区とは二重の圏線で区分される。内区にも朱文が一つみられる。近世のものと思われる。

第二節 軒平瓦 (第2・3・4図)

合計で二〇点あり、そのうち三点が中世(第4図27~29)、一点



図D 軒平瓦各部位名称

が瓦当面欠失のため時期不明である。范型式の観察については、国分寺市教育委員会の有吉重蔵氏のご教示や、平塚運一コレクションの整理報告書をもとに行なった。各部位・名称は図Dを参考に述べる。

一 重弧文（第2図11・12）

三重弧文が二点みとめられた。12

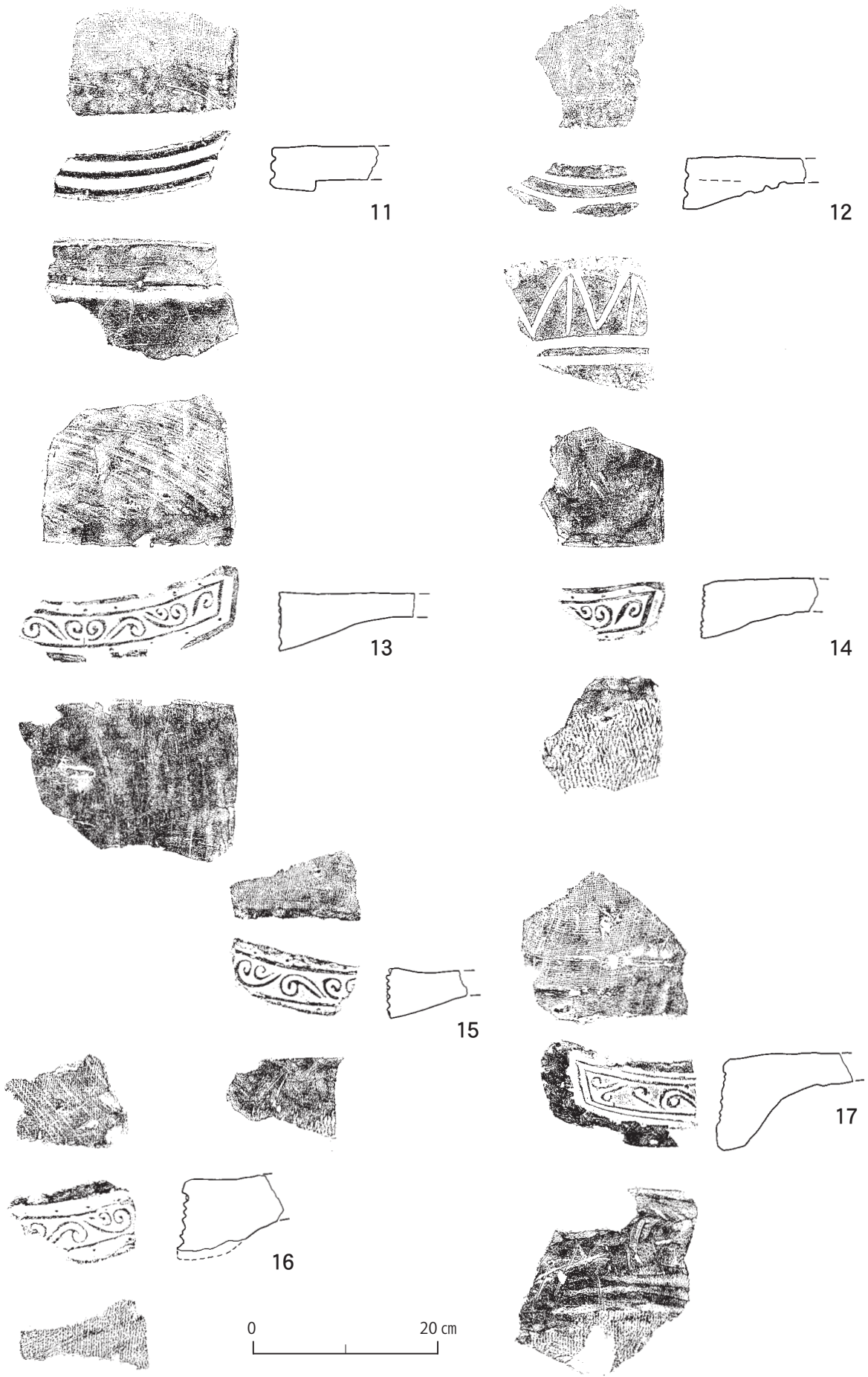
は多賀城様式の軒平瓦で、瓦当面及び顎部表面の特殊な施文が特徴である（註5）。顎の形態は11が段顎、12は曲線顎である。

二 均正唐草

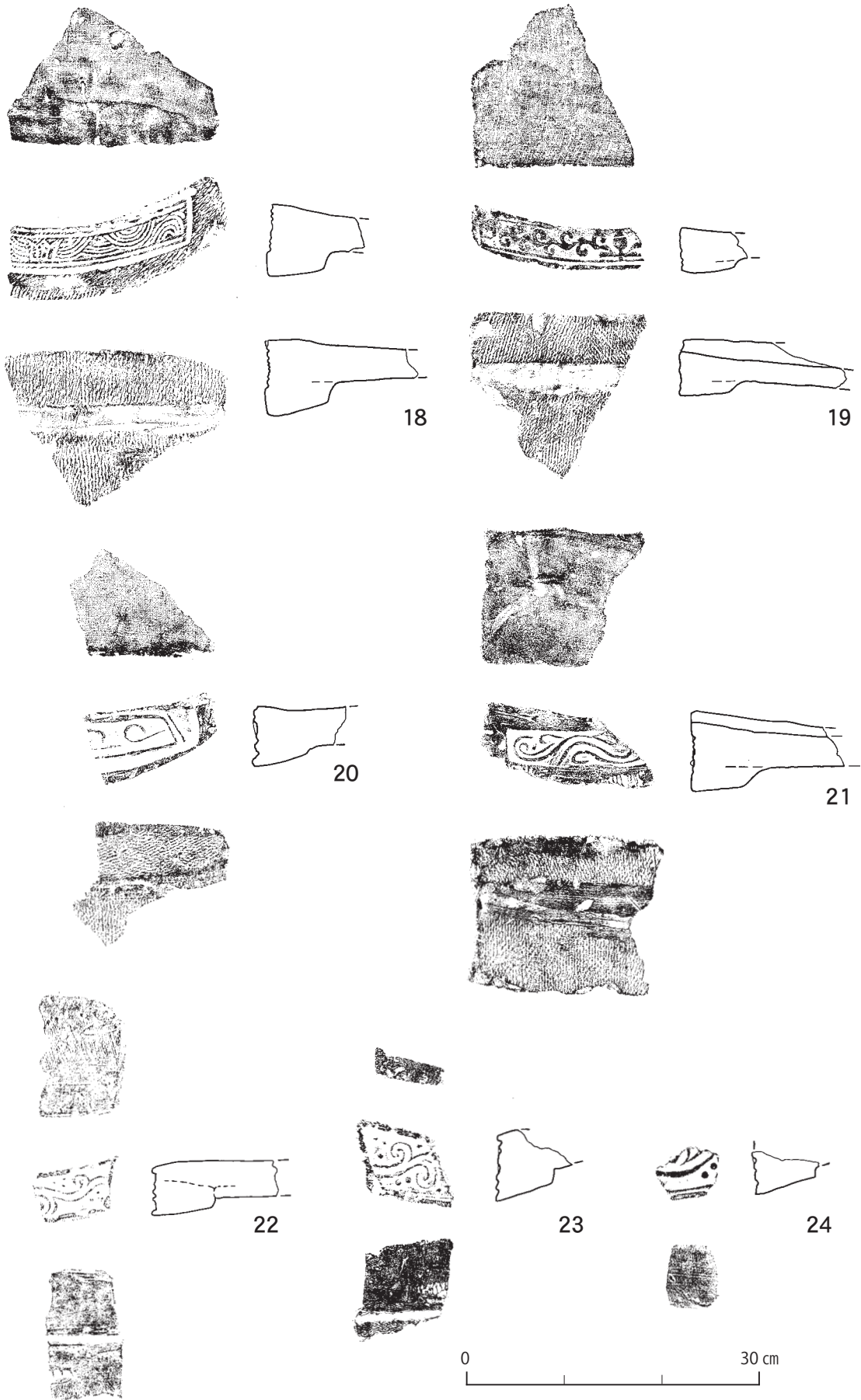
文（第2図13）
17・第3図18（21）
九点あり、232、D形式、239型式、

234-C形式、236型式、248型式、253型式の六型式がみとめられた。

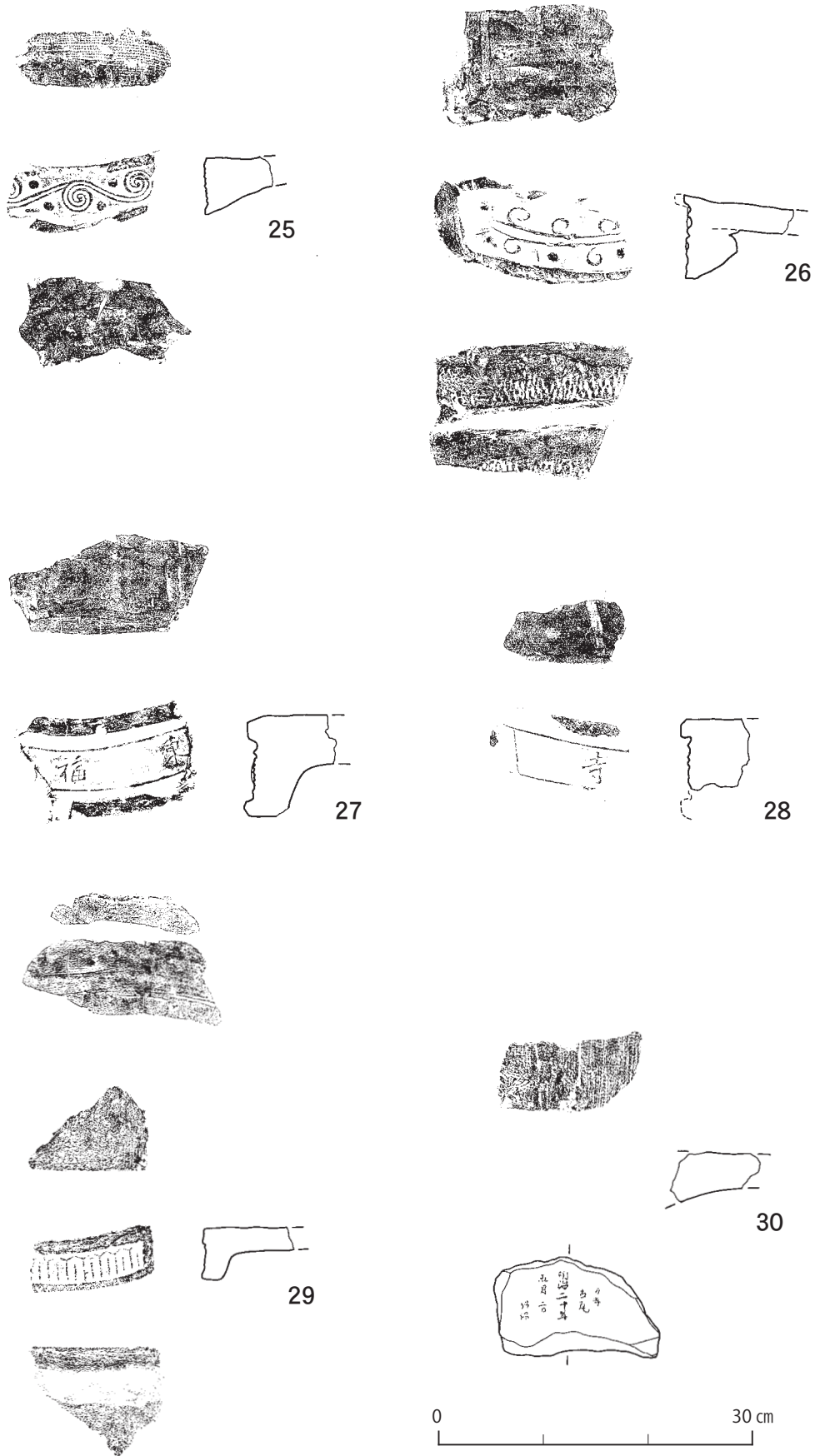
13～16は232-D形式である。中心飾りはC字状の対葉花文とその内側に単線状の花頭をもつ。中心飾りの左右に三単位ずつ唐草文が展開する。中心飾り隣の唐草文は主葉と子葉が先端でつながる。外区と脇区は界線で分けられ、外区に朱文を配す。16については、文様の退化がみられ、232-E形式の可能性を残す。顎の形態はいずれも曲線顎である。17は239型式である。外区と脇区は界線によって区切られ、界線の周囲を圏線がめぐる。本資料では中心飾りが欠損しているため不明だが、中心飾りの中央下部に単線の花芯状文様が入る。239-A形式と、入らない239-B形式がある。顎の形態は曲線顎である。18は234-C型式である。中心飾りは蓮華状で、左右に重弧状の唐草文が連続して広がる。外区と脇区は界線で内区と分けられている。上・下の外区に凸線があり、脇区で界線とつながる。脇区は素文である。瓦当面には縄目を残す。顎の形態は段顎である。19は236型式である。中心飾りは、中央部が蕾状に膨らみ下部で十字状に子葉を広げた形になっている。その左右の唐草文は上・下交互に枝分かれして展開している。外区と脇区は界線で画されている。外区は素文で、脇区と界線との間には横方向の凸線が二本ある。顎の形態は曲線顎である。20は248型式である。瓦当面の左側が欠失しているが、本来は中心飾りがなく蕨手状の文様が左右対称に展開する文様構成になっている。外区と脇区は界線によって区切られ、脇区には凸線が一本ある。顎の形態は曲線顎である。21は253型式である。外区と脇区の間に界線をもたない。脇区は素文である。下外区には縄目を残す。同文様の瓦が武蔵国分寺跡の伽藍地内より一点確認されているが、中央部分が欠失している。本資料でも中心飾りが失われているため、瓦当中央部の文様の様相は不明である。顎の



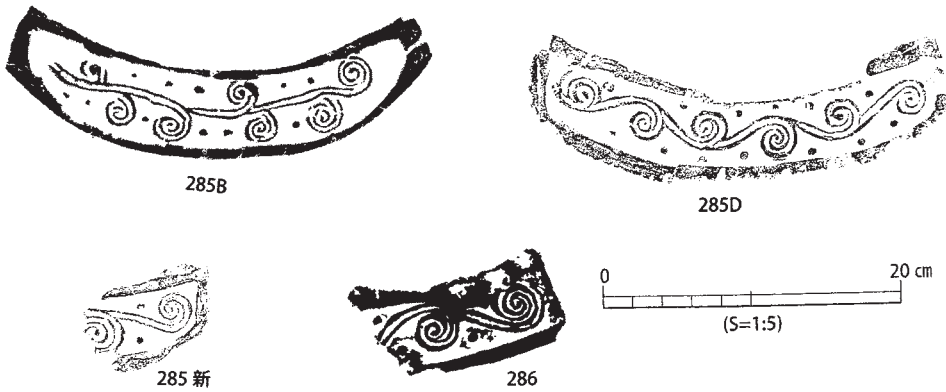
第2図 軒平瓦 (11 ~ 17)



第3図 軒平瓦 (18 ~ 24)



第4図 軒平瓦 (25 ~ 30)



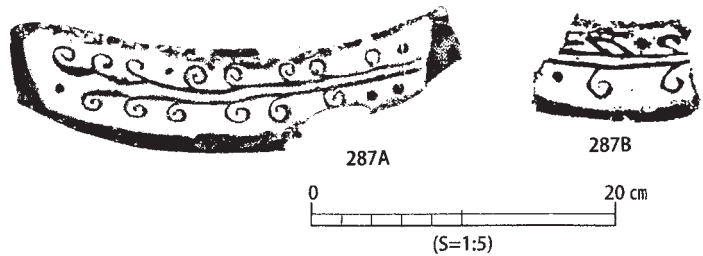
図E 285・286 型式

の形態は段顎である。
 23・24は282-E型式である。文様構成は282-B型式とほぼ同じだが、朱文の数・位置が異なる。24は小片資料で詳細は不明だが、唐草文の形と朱文の位置から、282-E型式の可能性が高い。顎の形態は段顎である。25は285、286型式(図E)に近い可能性がある。
 二本の唐草が渦巻き状につながっており、唐草文との間に朱文を配す。285型式と同系統の文様だが、本資料は唐草文の巻き方や、朱文の数、位置が異なる。武蔵国分寺跡での出土例はないが、類似例が埼玉県日高市の若宮遺跡でもみられる。顎の形態は曲線顎で

形態は曲線顎である。

三 偏行唐草文(第3図22・24、第4図25・26) 五点あり、282-B型式、282-E型式及び、285、286型式、287型式に近いと思われる四型式がみとめられた。

22は282-B型式である。上・下に並行した唐草文が先端部を巻き込みながら展開し、その間に朱文が置かれている。脇区は素文。顎



図F 287 型式

ある。26は287型式(図F)に近いと思われる。上・下に並行した唐草文が巻き込みながら展開している。唐草文の間に朱文を配す。外区・脇区とも素文である。顎の形態は段顎である。287-A・B型式と同系統の文様だが、唐草文の形や朱文の数、位置が異なる。武蔵国分寺跡での出土例はない。

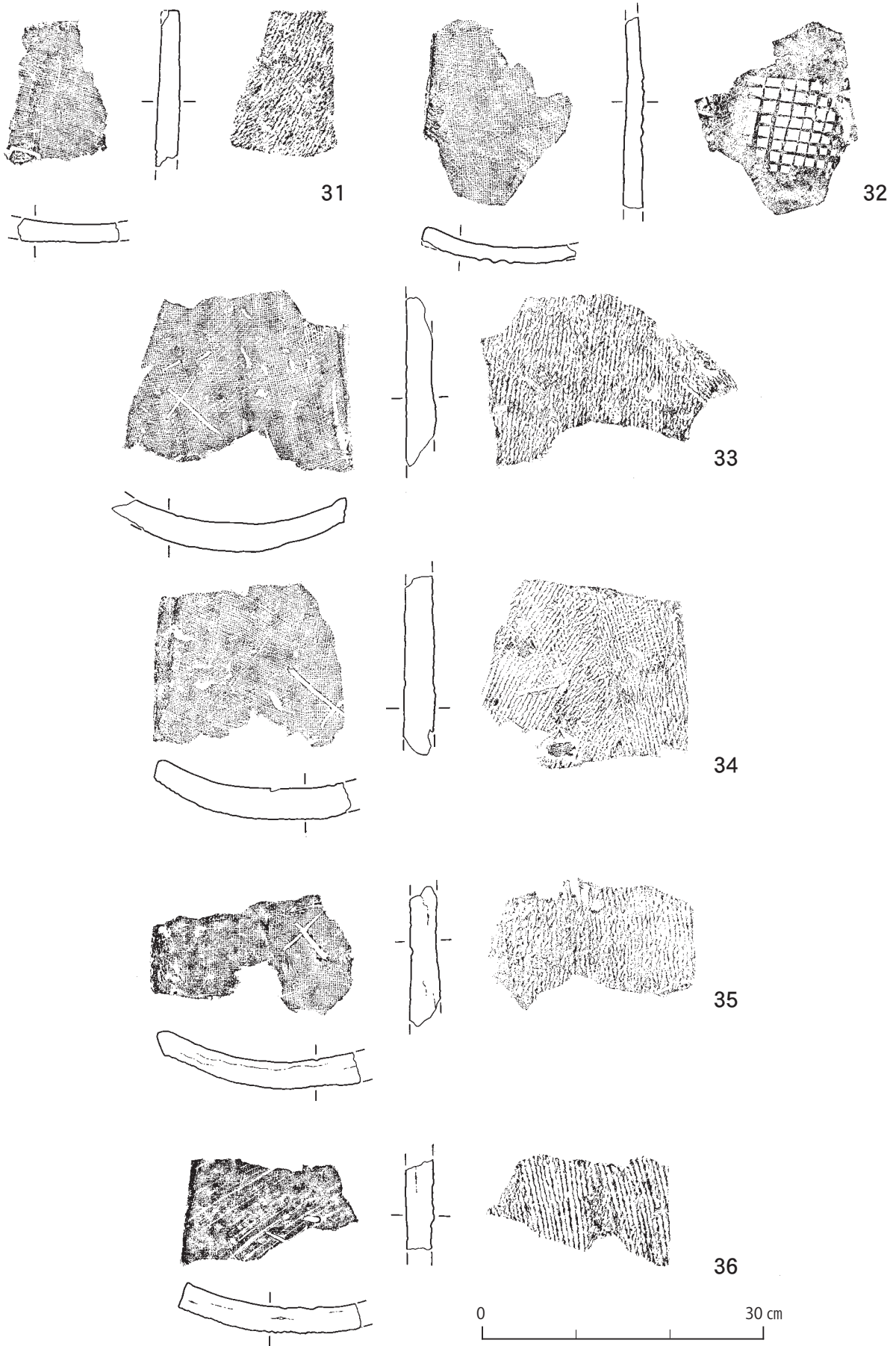
四 中世・その他(第4図27・30)

27・28は瓦当面に寺名がみとめられた。瓦当凸面・裏面に丁寧な調整が施されている。29は上向きに剣頭文を配す。胎土に砂粒が多く、成形も雑で小型である。30は瓦当面が欠失しているため文様は不明である。平瓦部凸面に、朱書きで日付が記載されていた。内容については「朱書き注記の瓦」の項で後述する。

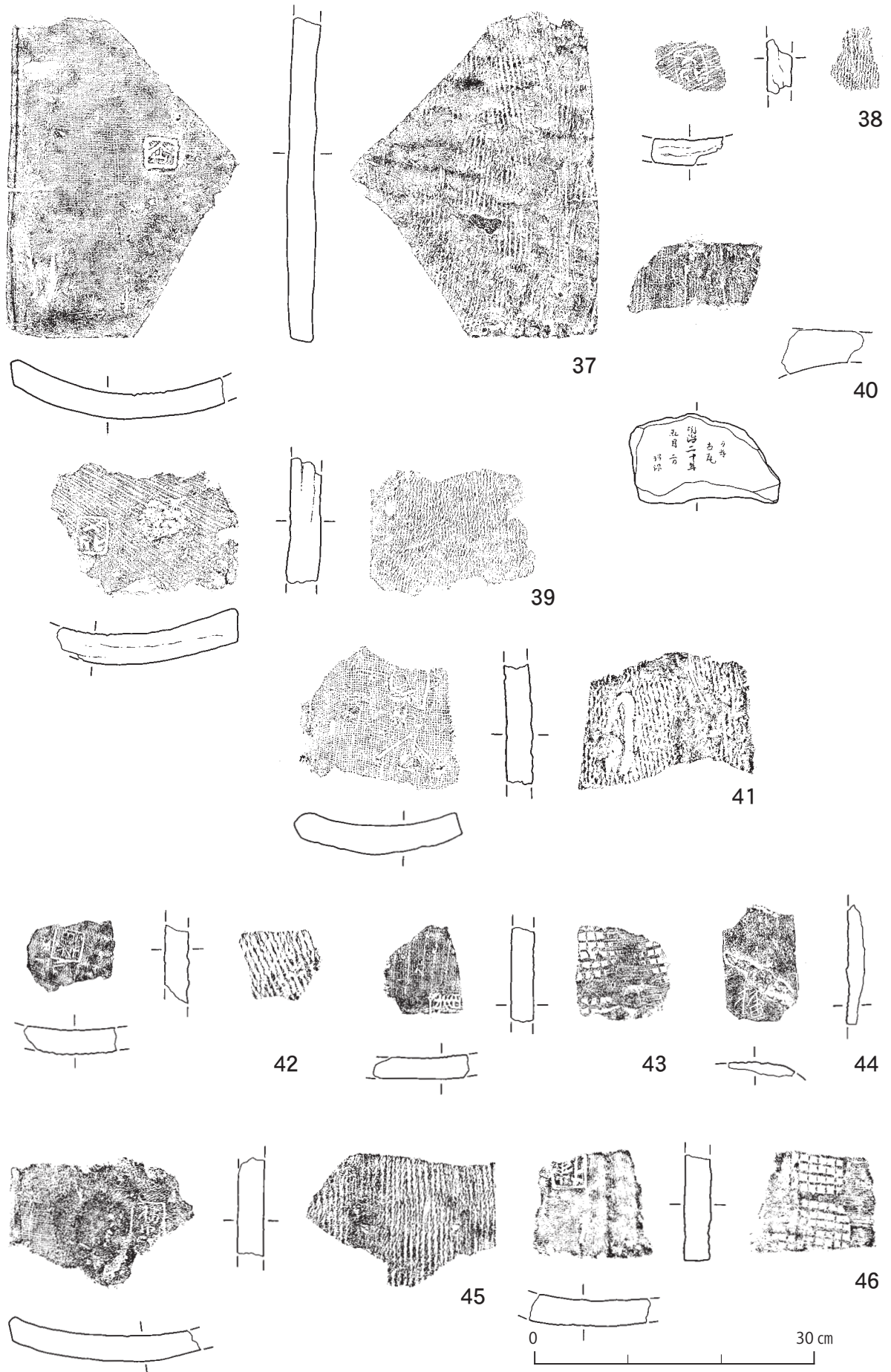
第三節 文字瓦 (第5・11・16・17図)

今回紹介する根岸武香のコレクション一一九点中六二点が文字瓦である。印章の研究に造詣の深い武香が、貴重な文字資料として積極的に収集したことがうかがえる。

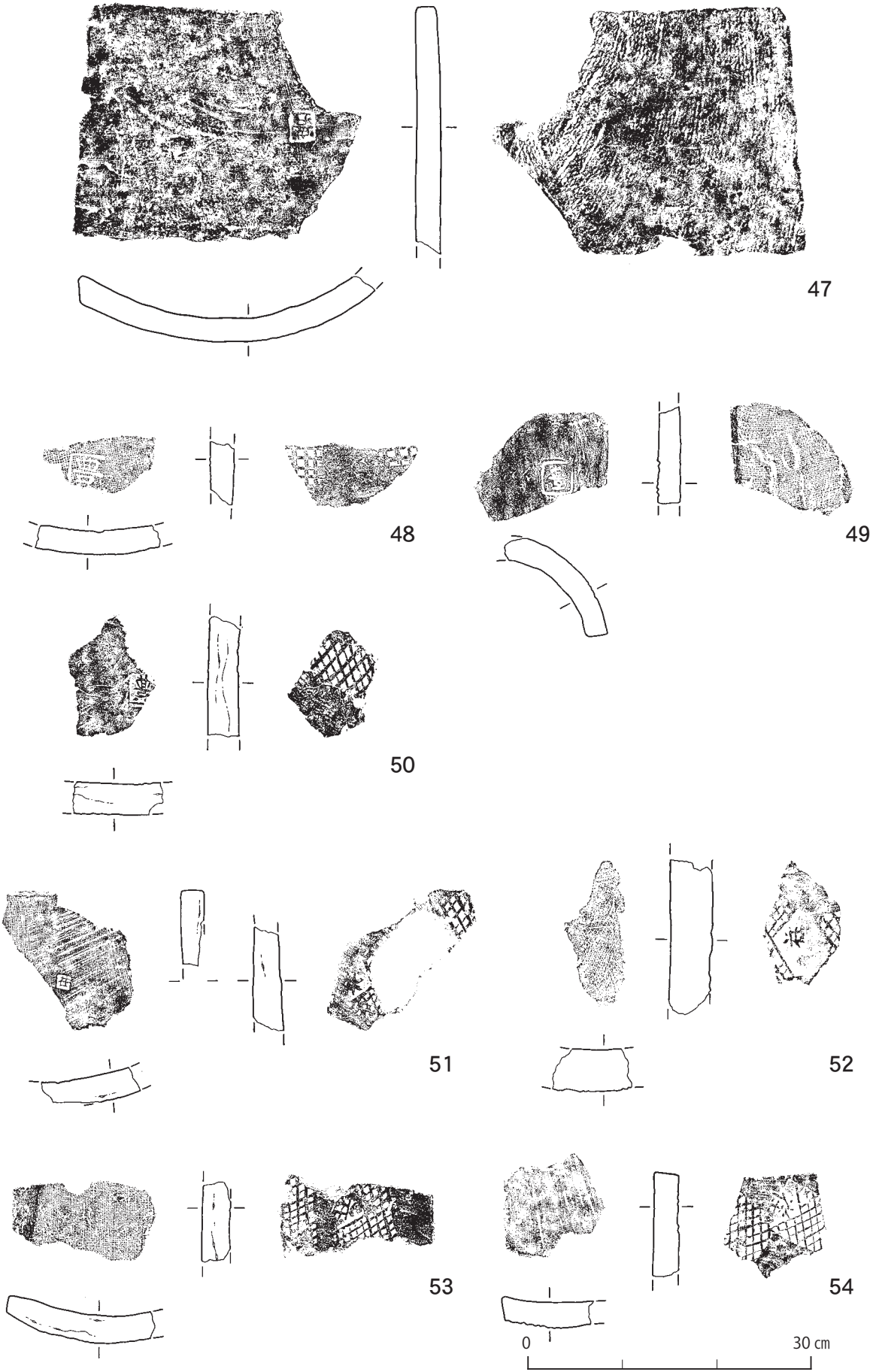
奈良時代の武蔵国管内における二一郡の名称を銘記するものが大半を占める。郡名を銘記する瓦が一八種、郷名二種、人名一種、符



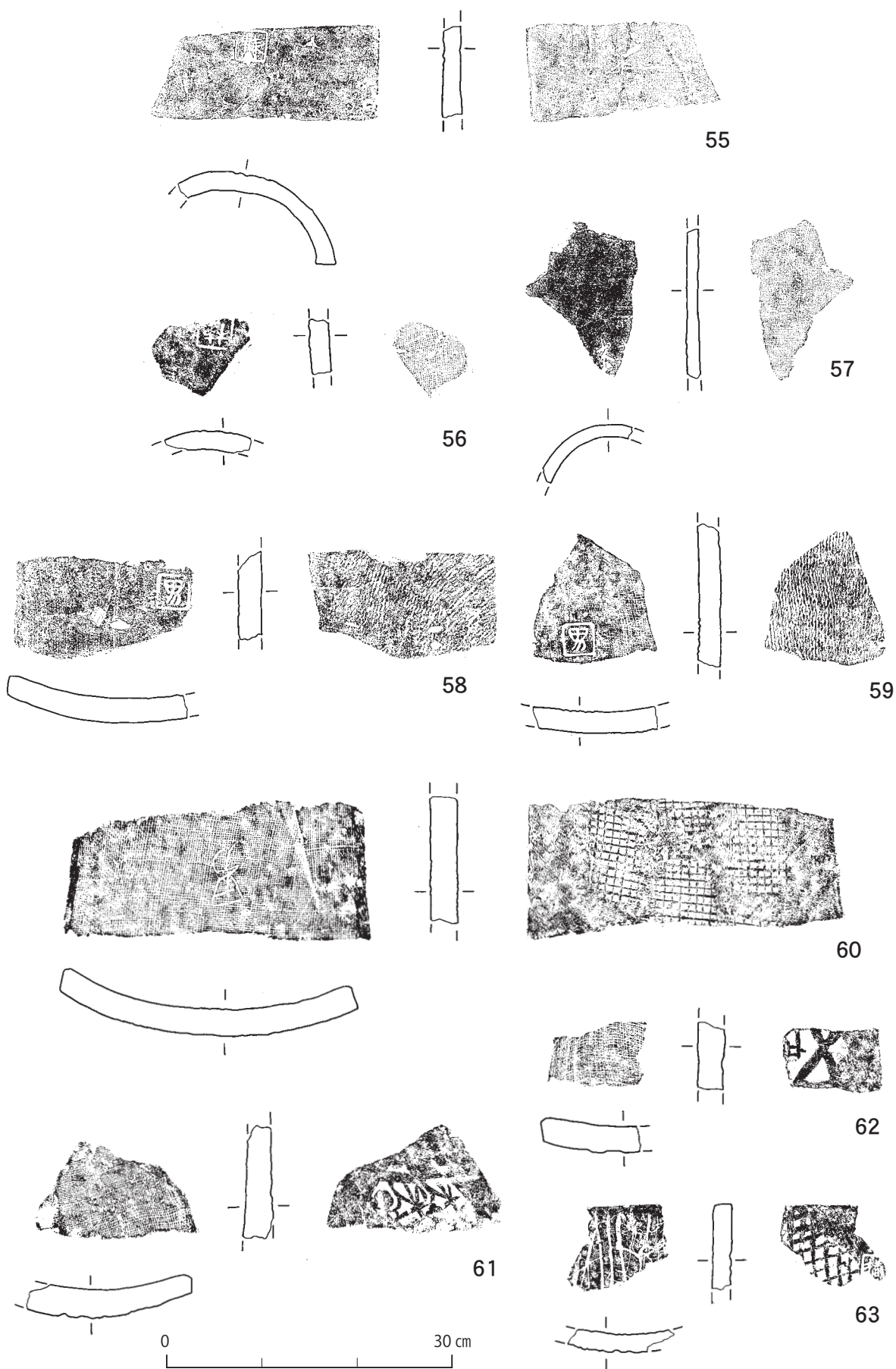
第 5 図 文字瓦 (平瓦) (31 ~ 36)



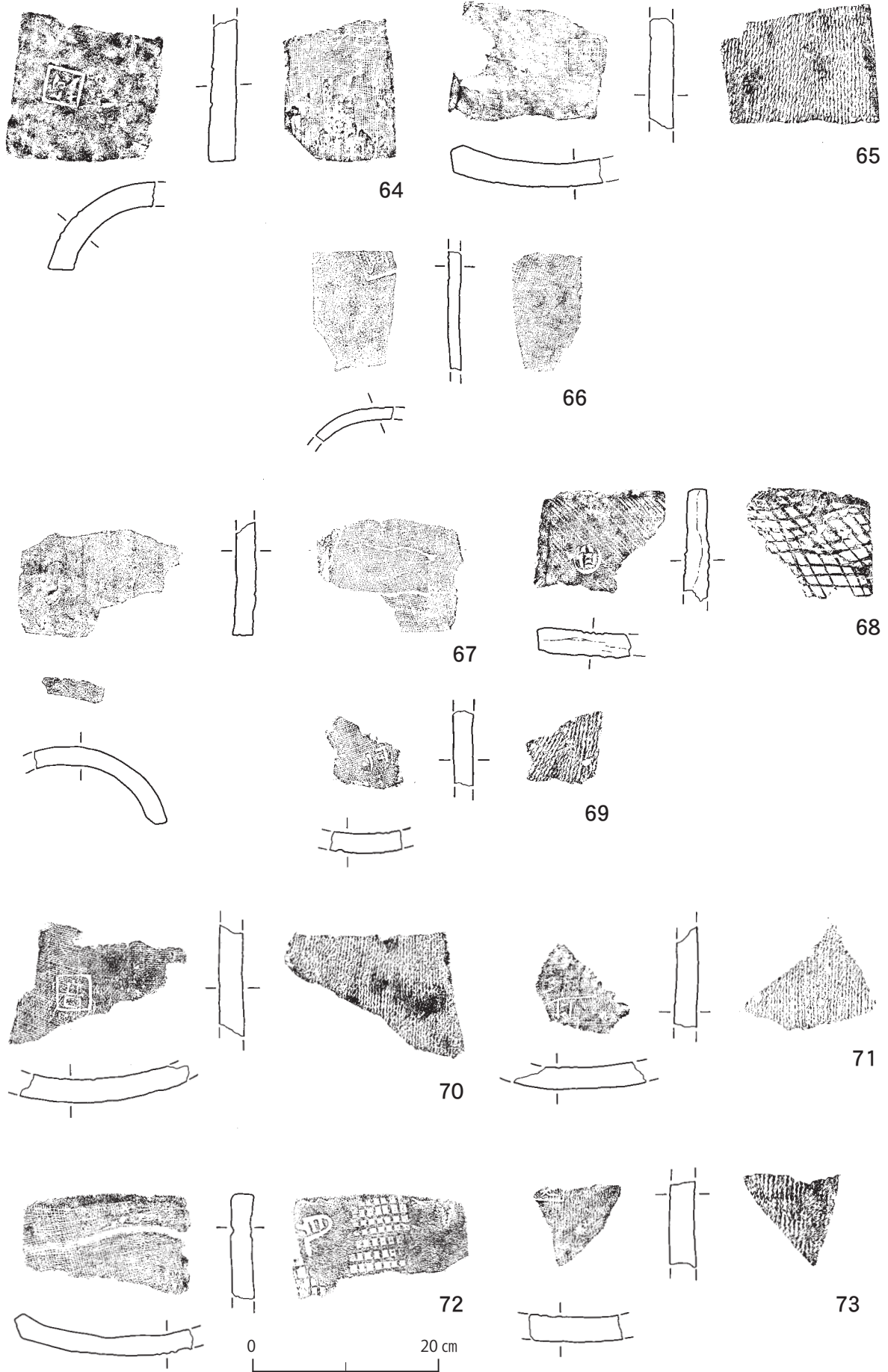
第6図 文字瓦（平瓦、丸瓦、軒平瓦、堤瓦）(37～46)



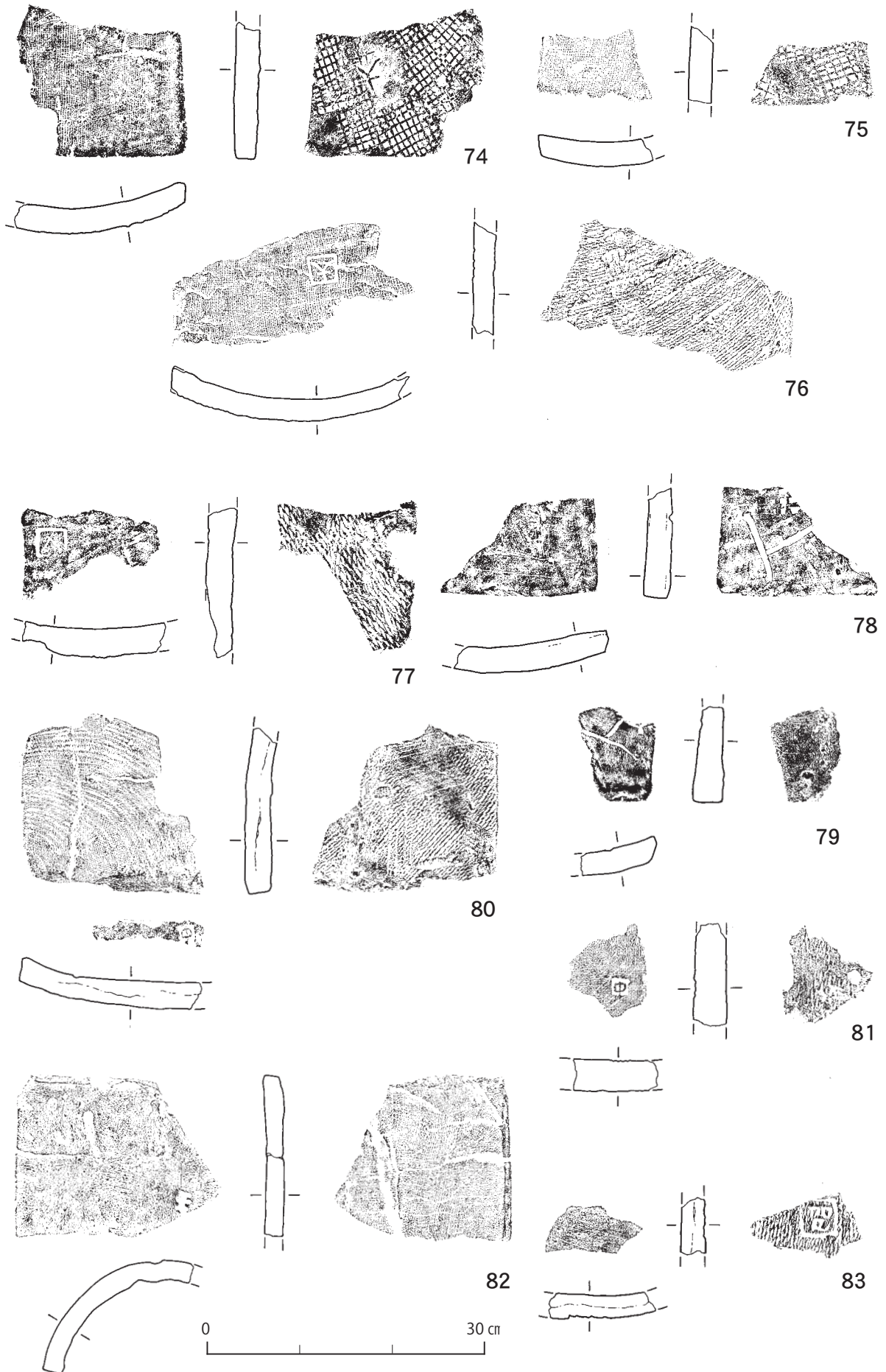
第7図 文字瓦（平瓦、丸瓦）(47～54)



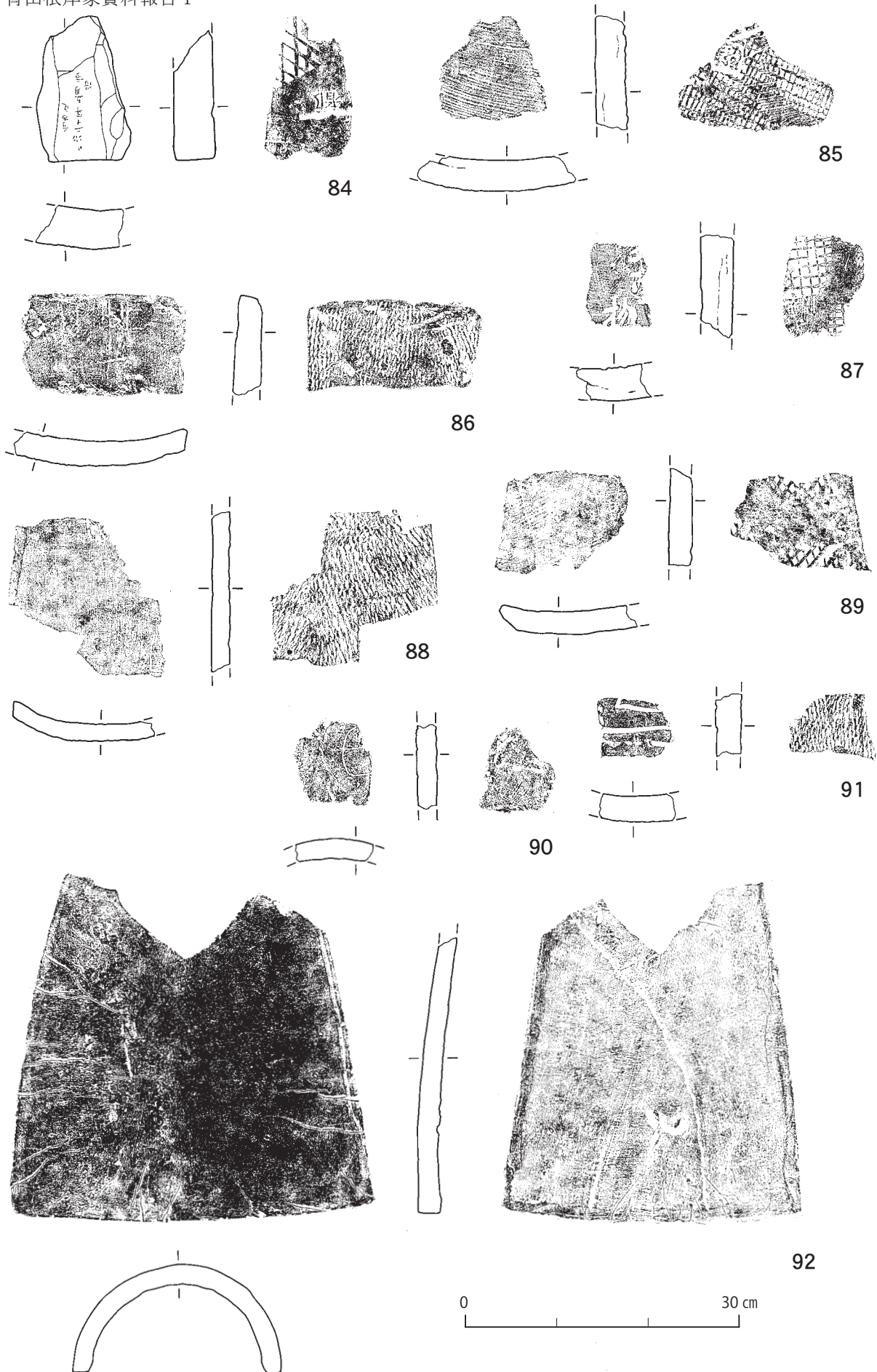
第8図 文字瓦（平瓦、丸瓦）(55～63)



第9図 文字瓦（平瓦、丸瓦）(64～73)



第10図 文字瓦（平瓦、丸瓦）(74～83)



第 11 図 文字瓦 (平瓦、丸瓦) (84 ~ 92)

号の可能性をもつものが一種、判読不明の瓦も数点ある。特に郡名瓦では、二一郡中、天平宝字二年(七二二)設置の新羅郡を除いた二〇郡のうち、久良郡、足立郡を残して、全ての郡名がみとめられた。以下、第5〜11図、および第16、17図を参照しつつ資料を紹介する。数の多いものから順に述べていくが、図版構成の都合上、順序が前後する場合がある。

一 郡名・郷名

秩父郡(第5図31〜36、第16図) 押印「父瓦」一点、「父」一点、ヘラガキ「父」四点、計六点ある。

比企郡(第6図37〜41、第16図) (第6図40は、第4図30にも掲載) 押印「企」一点、「比」二点、ヘラガキ「比企」二点、計五点ある。

幡(播) 羅郡(第6図42〜46、第16図) 押印「播」三点、「播中」一点、ヘラガキ「播」一点、計五点ある。

豊島郡(第7図47〜50、第16図) 押印「豊」が計四点ある。

荏原郡(第7図51〜54、第16図) 押印「荏」一点、押型「荏」四点ある。第7図51は凹面に押印「荏」、凸面に押型「荏」がみとめられる。計五点ある。

榛沢郡(第8図55〜57、第16図) 押印「榛」二点、ヘラガキ「榛」一点、計三点ある。

男衾郡(第8図58〜60、第16図) 押印「男」二点、ヘラガキ「男」一点、計三点ある。

橘樹郡(第8図61〜63、第16図) 押印「橘」一点、押型「橘」二点、計三点ある。

埼玉郡(第9図64〜66、第16図) 押印「埼」が計三点ある。

高麗郡(第9図70・71、第16図) 押印「高」一点、ヘラガキ「高」

一点、計二点ある。

横見郡(第9図72・73、第17図) 押印「見」一点、「横見」一点、計二点ある。

大里郡(第10図76、第17図) 押印「大」が計一点ある。

入間郡(第10図77〜79、第17図) 押印「入」一点、ヘラガキ「入」二点、計三点ある。

那珂郡(第10図80・81、第17図) 押印「中」が計二点ある。

多摩郡(第10図82、第17図) 押印「王」が計一点ある。

賀美郡(第10図83、第17図) 押印「加瓦」が計一点ある。

都筑郡(第11図84、第17図) 押型「都」が計一点ある。

児玉郡(第11図85、第17図) 押印逆字「児玉」が計一点ある。

白方郷(第9図67〜69、第17図) 豊島郡に所属する。押印「白」一点、ヘラガキ「白」一点、「白方」一点、計三点ある。

大井郷(第10図74・75、第17図) 久良郡に所属する。押型「大井」が計二点ある。

二 人名・符号

第11図89 ヘラガキで「戸主□」のみ判読できる(第17図)。

第11図92 押印、符号を示す「ㄣ」の可能性が有る(第17図)。

三 その他

第11図86 判読不明の押印がある(第17図)。大里郡を示す「大」、

木田郷を示す「木」の可能性が有る(第17図)。

第11図87 判読不明のヘラガキがある(第17図)。

第11図88 判読不明の押印がある。都筑郡を示す「都」の可能性が有る(第17図)。

第11図90・91 判読不明のヘラガキがある(第17図)。

第6図41 判読不明、ユビガキの可能性がある(第17図)。

第四節 丸瓦・平瓦・堤瓦・中世瓦

一 丸瓦 合計一六点あり、そのうち文字瓦が一点含まれる。文字・記号の銘記されていない丸瓦は第12図に示した。資料の多くが小片だが、観察できる限りでは有段式や、広端部の隅落しは確認できず、無段粘土紐桶巻き作りが多い。

二 平瓦 合計六四点あり、そのうち文字瓦が四九点、中世のものが五点含まれる。文字・記号の銘記されていない平瓦は第13～14図に示した。

製作技法としては、凸面型粘土板一枚作り、凸面型粘土横紐一枚作りが多い。また断面観察から、数枚の粘土板を成型台上に重ね合わせた痕跡が一四点確認できた(第5図35・36、第6図38・39、第7図50・51・53、第9図68、第10図78・80・83、第11図85・87、第13図99)。

三 堤瓦 合計四点あり、そのうち一点が文字瓦である(第6図41・第16図)。文字・記号の銘記されていない堤瓦は第14図(113～115)に示した。いずれも焼成前の平瓦を二分割して作られている。

四 中世瓦 合計五点ある(第15図)。116では凹・凸面の両方にハナレ砂と格子叩きの痕跡が残る。117では凹・凸面に糸切り痕がみられる。118～120は小片資料のため詳細は不明だが、凸面叩きの様子から、ここでは中世のものとした。

第五節 朱書き注記の瓦

第4図30(第6図と同じ)、第7図52、第8図58、第11図84、第12図97の五点の瓦には朱書きで注記されている(図G)。各瓦の平面部へ書きつけている。朱墨痕を拡大視するなどして、次のように判読した。□は判読不明字である。

第4図30(第6図40)

『□分寺 古瓦 明治二十年 五月二日 所得』

第7図52

『国分□ 明治二十年 五月二日得』

第8図58

『□□寺古瓦 明治二十年五月二日 所得』

第11図84

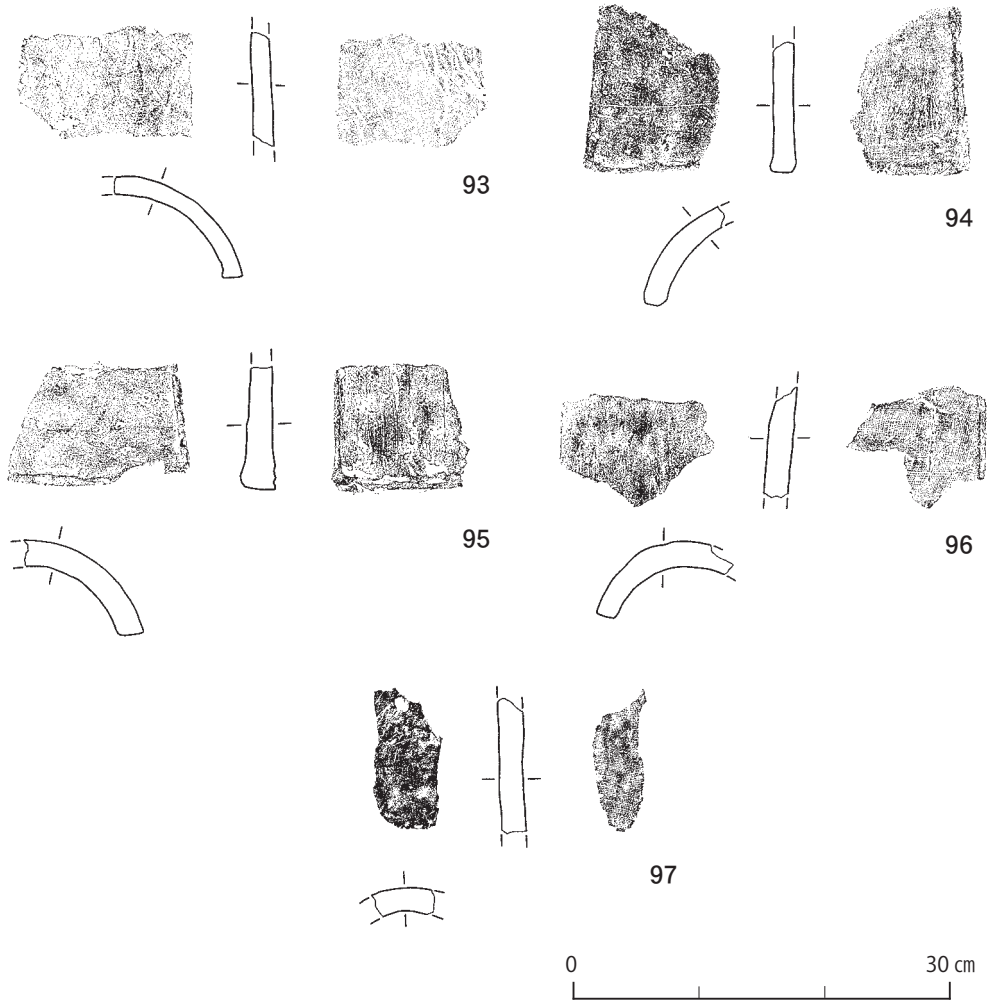
『□寺古瓦 明治二十年五月二日 得』

第12図97

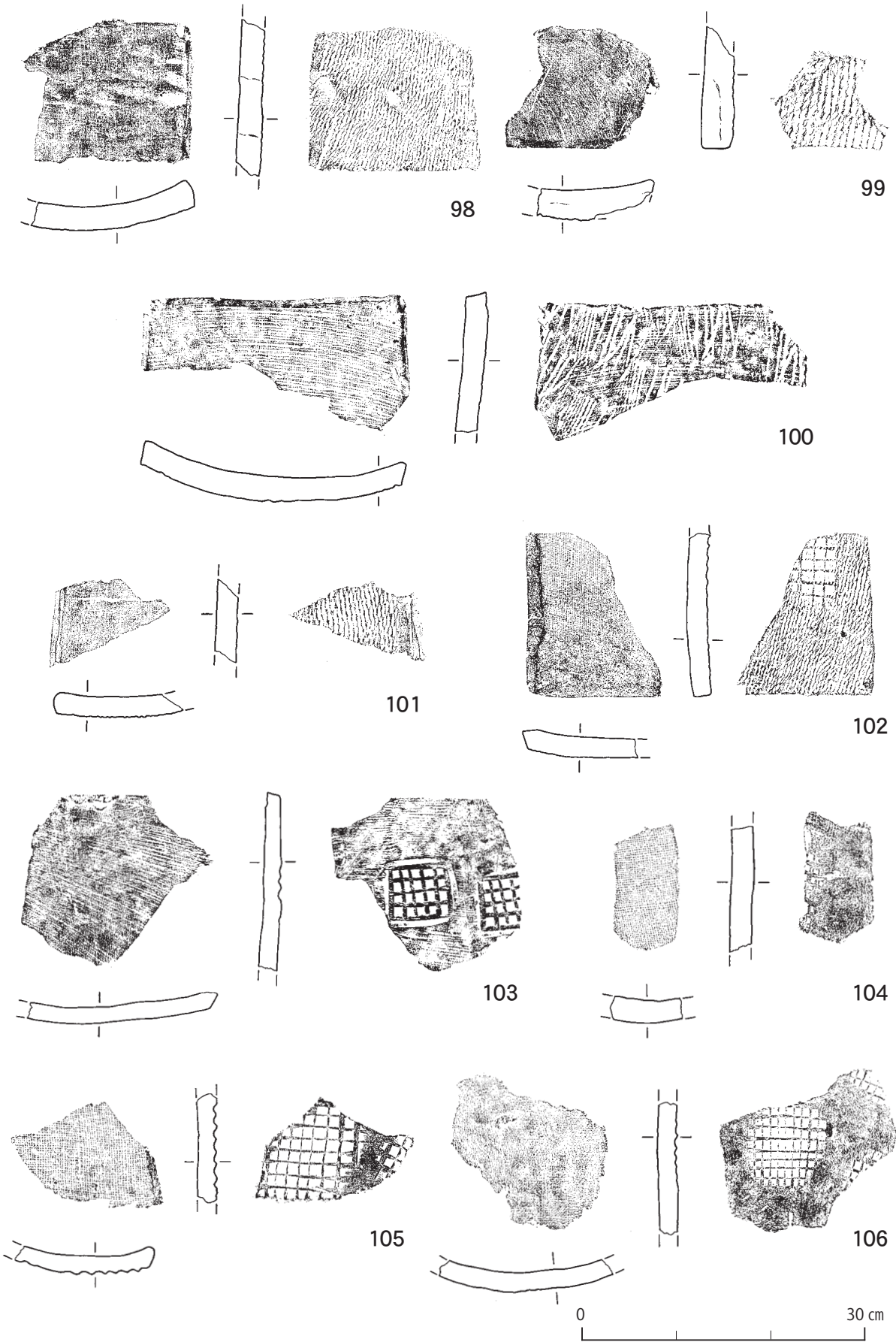
『□□ 大□□ 古□』

注記はいずれも不明瞭だが、明治二十年五月二日の記載は比較的明瞭である。根岸が本資料を収集した日付を示すと思われる貴重な資料である。

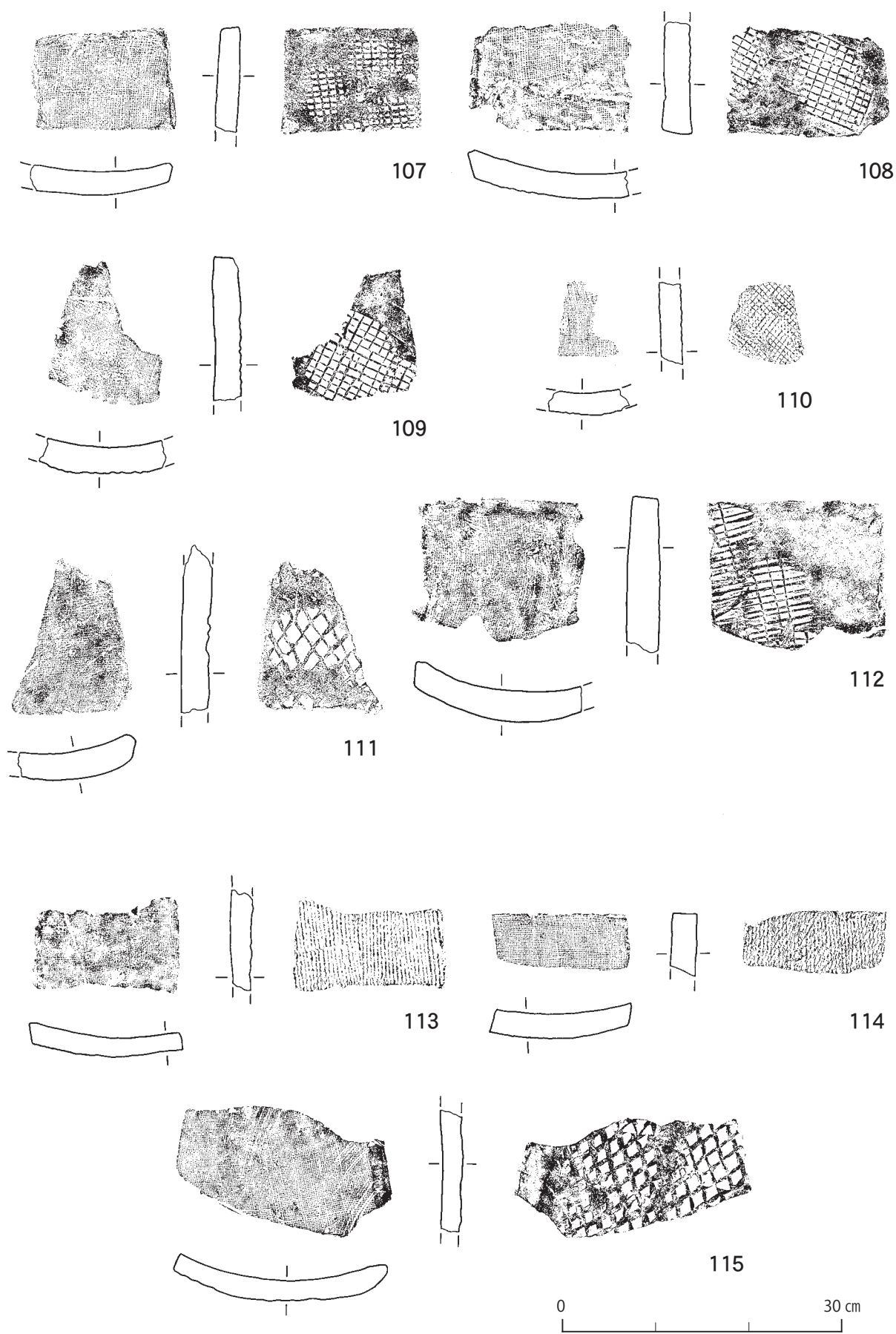
今回報告した古瓦は軒丸瓦、軒平瓦、文字瓦を中心に種類が豊富であり、特に文字瓦は一七もの郡名を確認することができた。また軒平瓦では、武蔵国分寺跡でも希少な瓦当文様に類する文様も確認できた。本資料は、文化遺産に深い知識を持ち、近代的学問の黎明期に活躍した根岸の業績の一部を語る資料といえよう。



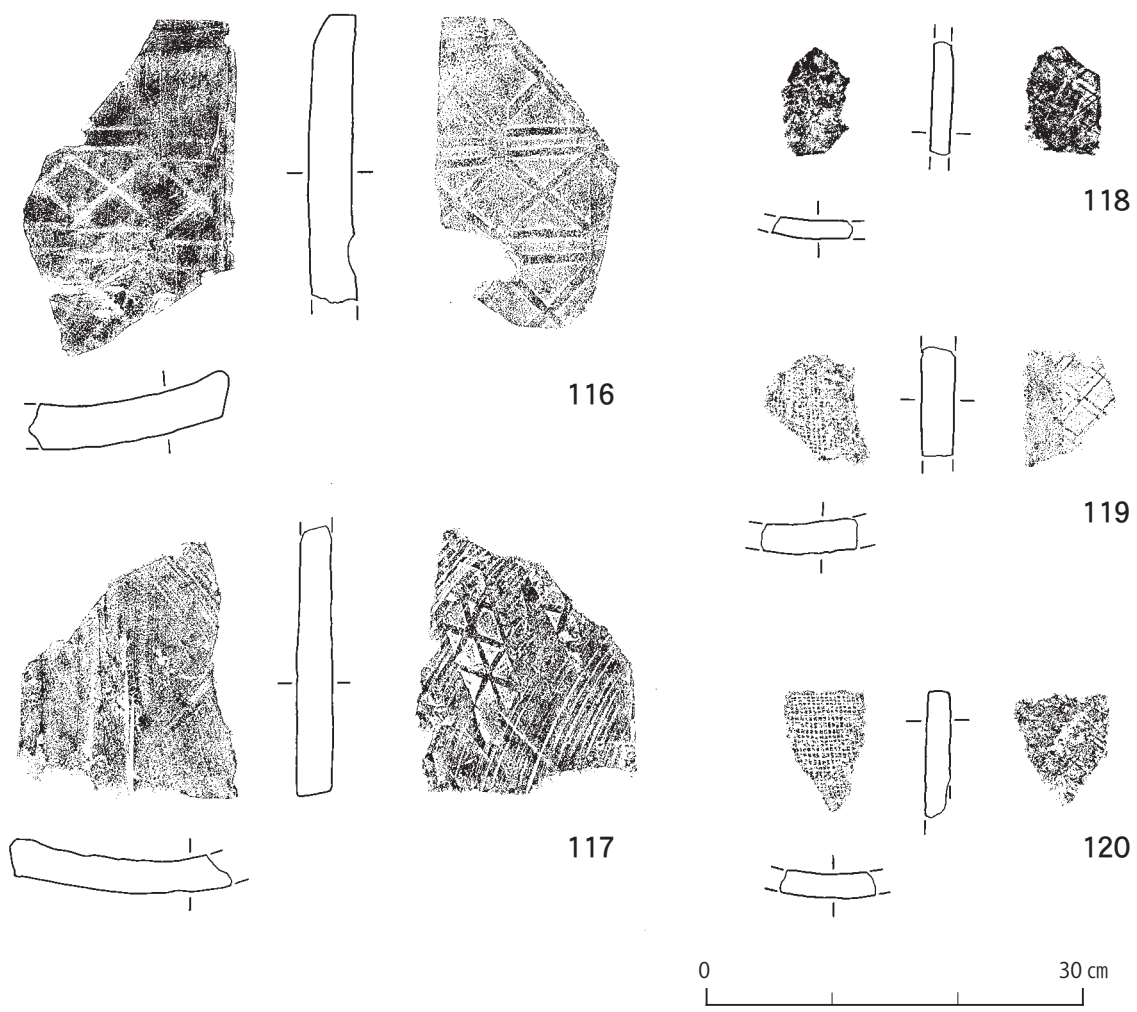
第12図 丸瓦 (93 ~ 97)



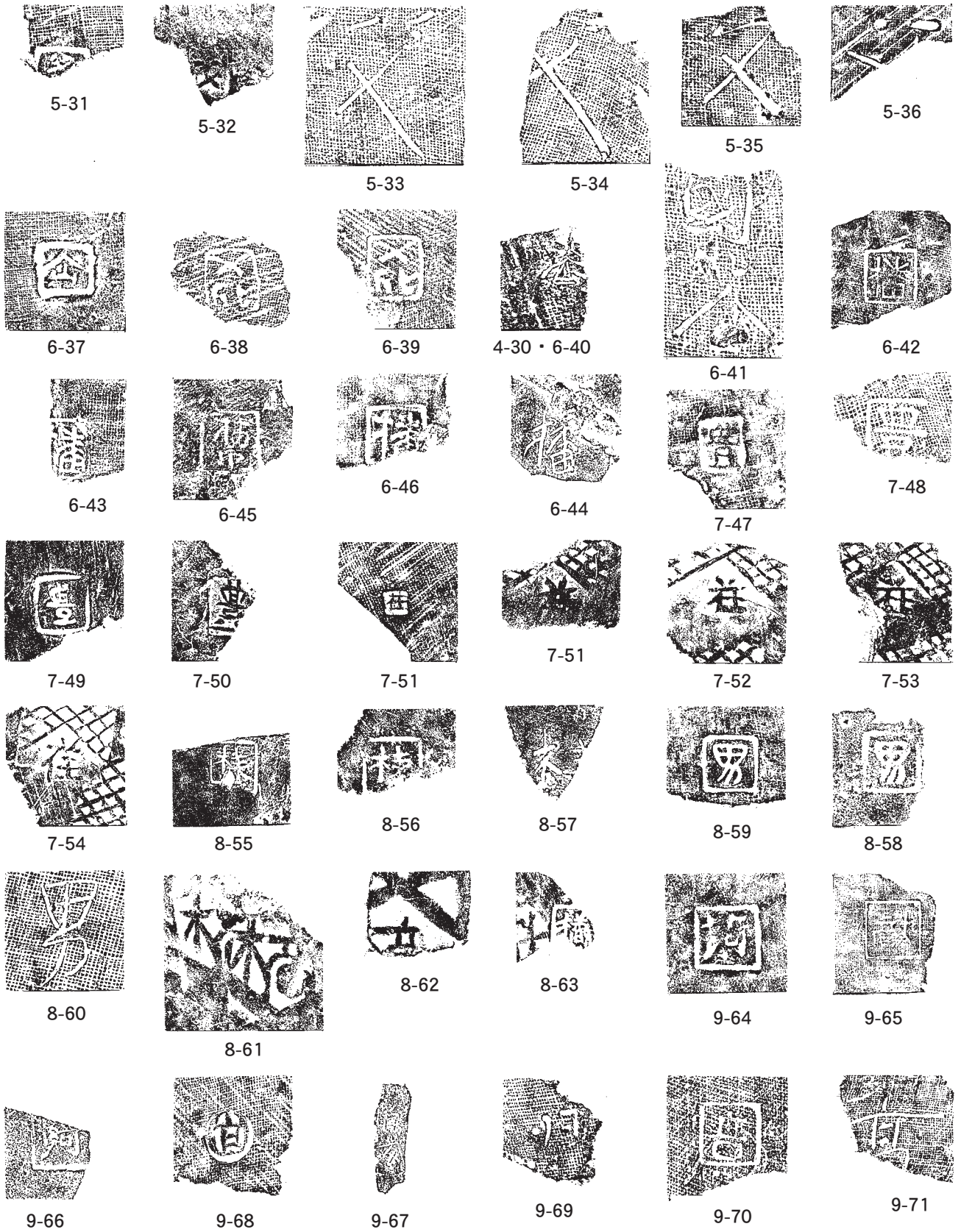
第 13 図 平瓦 (98 ~ 106)



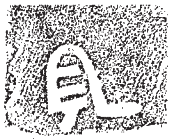
第14図 平瓦、埴瓦 (107 ~ 115)



第15図 平瓦（中世）(116～120)



第16図 文字瓦集成(1)



9-72



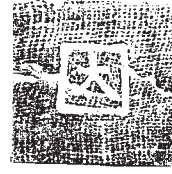
9-73



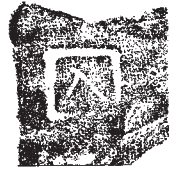
10-74



10-75



10-76



10-77



10-78



10-79



10-80



10-81



10-82



10-83



11-84



11-85



11-86



11-87



11-88



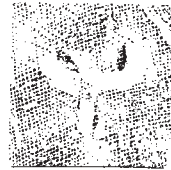
11-89



11-90



11-91



11-92



6-41



参考 1



参考 2

第 17 図 文字瓦集成 (2)

なお、中世瓦117にも朱墨痕跡がみとめられたが、ほとんど読み取れなかった。

第六節 遺物観察表の表記方法

国分寺市教育委員会のマニュアルや『武蔵国分寺跡発掘調査概報』等報告書、『平塚運一古代瓦コレクション資料集』(1)、(2)を参考に作成した。(遺物観察表1〜5・52〜56頁)

1 各遺物共通

数値 括弧なし||完数値、() ||復元数値、^ ||残存数値、
は計測不能をあらわす。

2 軒丸瓦

○中房の形状

A 中房が凸型のもの A1 断面方形のもの

B 中房の輪郭を凸線で表すもの B1 断面半球形のもの

C 中房の輪郭を凹線で表すもの C1 内部が平坦なもの

D 中房の輪郭を凸線で表すもの D1 内部が半球形に盛り上がるもの

E 素弁 A 弁の輪郭線(凸線)がなく、全体が盛り上がるもの

F 弁が輪郭線(凸線)のみで表されるもの

G 弁の輪郭線(凸線)があり、内部全体が盛り上がるもの

H 弁の輪郭線(凸線)があり、内部全体が盛り上がるもの

I 弁の輪郭線(凸線)があり、内部が盛り上がるもの

J 中房側が凹むもの

K 中房側が凹むもの

L 中房側が凹むもの

T 単弁 中房寄りに子葉状の小突起をとどめるもの
○外区文様

a ||素文、b ||朱文、c ||その他などがあり、内・外縁の区別がないものは外縁欄に記入

○製作技法

A 接着技法

B さしこみ技法 I 一般的なもの

C 一本作り技法 II 瓦当部が二段重ねで分厚く作られるもの

D はめこみ技法 I 瓦当裏面の布目にしぼりがあるもの

II 瓦当裏面の布目にしぼりが無いもの

I 半截後の丸瓦広端側にはめこむもの

II 半截前の円筒の広端側にはめこみ、不要部分を切り落とすもの

3 軒平瓦

○瓦当文様の分類

主文様(内区文様)は以下のように分類した(||主文様略号)

重弧文 || G、均正唐草文 || K K、偏行唐草文 || H K、特異文 || O、

へら描文 || H、竹管文 || T、格子目タタキ文 || K、縄目タタキ文 ||

J、無文 || M

○上・下外区、脇区文様は以下のように分類した(||略号)

素文 || a、朱文 || b、長円朱文 || c、圏線文 || d、鋸齒文 || e、凸

線文 || f、その他 || g

外区や脇区が界線によって内区と画されているものは、上の略号に

「」をつけた(註6)

○瓦当型式の分類

重弧文、均正唐草文、偏行唐草文、特異文のものは特定の瓦当范が

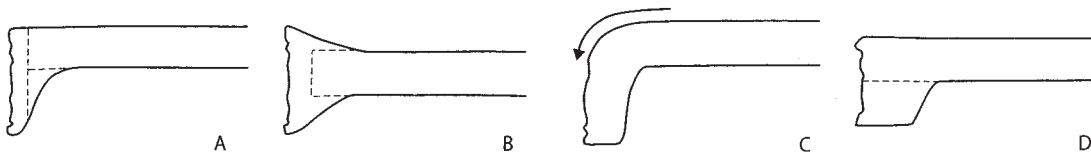


図 G 瓦当部製作技法分類模式図

- 瓦当部の制作技法
- A 接着技法 瓦当裏面に平瓦広端部をあて、接合用粘土を用いて接合する方法
 - B さしこみ技法 瓦当裏面に平瓦広端部を差し込んで接合する方法
 - C 折り曲げ技法 瓦当を特に作らず、平瓦の広端近くを凸面側に折り曲げて瓦当部を作るもの
 - D 貼り付け技法 平瓦凸面に粘土を貼り付けて瓦当部を作るもの
- 顎の形態
- A 直線顎
- a 瓦当凸面を調整するもの
 - b 瓦当部と平瓦部の境分のみ調整するもの
 - c 不調整のもの
- B 段顎
- B1 瓦当凸面と凹面が平行するもの
 - B2 瓦当凸面が凹面に対し斜行するもの
 - B3 瓦当凸面が円味を持つもの
- a 瓦当凸面及び瓦当裏面を調整するもの
 - b 瓦当凸面のみ調整するもの

存在する。これらのうち均正唐草文、偏行唐草文のものについては（特異文については本資料ではみられない）、国分寺市教育委員会の台帳に基づき范型式の分類を行った。重弧文の資料については范型式の特定が困難であったため、三重弧文Ⅱ3 G型式と分類した。

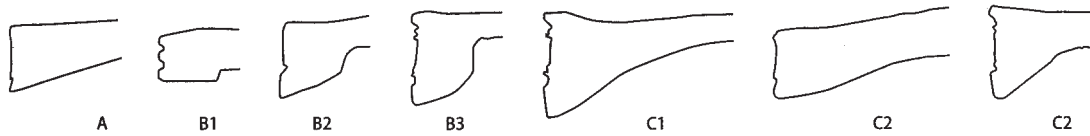


図 H 顎形態分類模式図

- C 曲線顎
- C1 顎の下面が外反するもの
 - C2 顎の下面が直線的、もしくははふくらむもの
- a 瓦当凸面を調整するもの
 - b 瓦当部と平瓦部の境を調整するもの
 - c 瓦当凸面及び平瓦部の境を調整するもの
 - d 不調整のもの
- 4 平瓦・丸瓦
- 丸瓦の製作技法
- I-A1技法 有段粘土紐桶巻き作り
 - I-2-A1技法 無段隅落し粘土紐桶巻き作り
 - I-3-A1技法 無段粘土紐桶巻き作り
 - I-3-B技法 無段粘土板桶巻き作り
- 平瓦の製作技法
- I-A1技法 粘土紐桶巻き作り
 - I-B技法 粘土板桶巻き作り
 - II-1-A1技法 凸面型粘土横紐一枚作り
 - II-1-A2技法 凸面型粘土縦紐一枚作り
 - II-1-B技法 凸面型粘土一枚作り
 - II-2-B技法 凹面型粘土一枚作り
- 5 布目 3cm四方内で側端縁に平行する糸数と狭・広端縁に平行する糸数を表す

6 縄目

縄目の本数 3 cm四方内での縄数を表す
縄の撚り

L 縄の圧痕が右上がり左下がりの傾斜をなすもの

R 縄の圧痕が左上がり右下がりの傾斜をなすもの

縄目の方向

縦 瓦当面对して直交方向

横 瓦当面对して平行方向

7 色調

小山正忠・竹原秀雄『新版 標準土色帖 第14版』（日本色研事業株式会社一九六二）に依拠した

引用註

(註1) 島根県教育庁文化財課古代文化センター二〇〇八『平塚運一

古代瓦コレクション資料集(1)―武蔵国分寺関連資料・鍔瓦編―』島根県古代文化センター調査研究報告書39

(註2) 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調

査センター二〇一一『平塚運一古代瓦コレクション資料集(2) 武蔵国分寺関連宇瓦・鍔瓦補遺 平塚運一コレクション資料目録』島根県古代文化センター調査研究報告書44

(註3) 滝口宏 一九七四『古代・中世編第3章 国分寺造立の発詔』

『市川市史』第二巻古代・中世・近世 編集市川市史編纂委員会

(註4) 田熊信之・天野茂一九九三『宇野信四郎蒐集 古瓦集成』東

京堂出版 60項 372、248頁

(註5) 須田勉二〇〇五『多賀城様式瓦の成立とその意義』『国士舘大

学人文学会紀要』37の中で、須田氏は施文の工具について、現代陶芸で用いられる「平線かきべら」状の工具で行われていたことを製作実験で実証し、多賀城様式の軒平瓦を従来呼称されてきた「手描き軒平瓦」を「かきべら挽き重弧文」と称された。

(註6) 国分寺市のマニュアルにはないが、(註2)の中で境界線の有無を区別するため、この方法を用いている。本稿でも、これまでの研究成果と対照しやすくするためこれにならう。

挿 図

図A 早稲田大学考古学会 国分寺市教育委員会一九八七『武蔵国

分寺跡調査報告』―昭和三十九〜四十四年度―より作図

- 図 B (註3) より掲載
- 図 C (註4) より掲載。
- 図 D (註2) 項2より掲載
- 図 E (註2) 項5より掲載。
- 図 F (註2) 項5より掲載
- 図 G・H筆者作図 Photoshop cs6 使用
- 図版 18・19 掲載の朱墨瓦の調整

- 第6図40・第8図60・第12図98 色調補正：コントラスト+100
色相・彩度：レッド系 色相+20 彩度+50 カラーバランス：階調註階調註階調シアーンレッド+40
- 第7図52 色調補正：明るさ+100 コントラスト+100 色相・彩度：レッド系 色相+20 彩度+50 カラーバランス：階調註階調シアーンレッド+40
- 第11図85 色調補正：明るさ+150 コントラスト+100 色相・彩度：レッド系 色相+20 彩度+50 カラーバランス：階調註階調シアーンレッド+40

参考文献

稲村担元 一九二二『武蔵国分寺の調査』東京府史跡勝地調査報告書

第一冊

- 大川 清 一九五八『武蔵国分寺古瓦磚文字考』小宮山書店
- 石村喜英 一九六〇『武蔵国分寺の研究』明善堂書店
- 有吉重蔵 一九八六「武蔵国分寺」『国分寺市史 上巻』国分寺市史編さん委員会

- 国分寺市教育委員会 一九八一『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報』V市立第四中学校建設に伴う第一次調査
- 武蔵国分寺跡調査会・国分寺市教育委員会 一九八二『武蔵国分寺遺跡調査年報』II 寺地・僧寺々々域確認調査
- 坂詰秀一 一九八六「武蔵国分寺の瓦窯跡」『国分寺市史 上巻』国分寺市史編さん委員会

- 国分寺市教育委員会 一九八七『武蔵国分寺跡調査報告』昭和三十九年～四十四年度―』
- 国分寺市教育委員会 一九八九「武蔵国分寺跡発掘調査概報」XIV―昭和五十二年～五十七年度尼寺々々域確認調査―
- 有吉重蔵 一九八九「武蔵国分寺」『聖武天皇と国分寺―在地から見た関東国分寺の造営―』関東古瓦研究会編 雄山閣
- 国分寺市教育委員会 一九九四『武蔵国分尼寺跡』I
- 大川 清 一九九六『古代の瓦』窯業史博物館
- 日高市史編集委員会 日高市教育委員会 一九九七『日高市史 原始・古代資料編』

- 山崎信二 二〇〇〇『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊 雄山閣
- 山崎信二 二〇〇八『近世瓦の研究』同成社
- 山崎信二 二〇一二『瓦が語る日本史 中世寺院から近世城郭まで』吉川弘文館
- 國學院大学デジタルミュージアム「柴田常恵瓦拓本資料」

(本文・註・図・表 藏持 美弥子)

遺物観察表 1

図版番号	種別	直径	中房				内区				外区					瓦当裏面調整	瓦瓦接統技法	色調			胎土	焼成	備考
			径	形態	蓮子数 蓮子形態	弁数 弁形態	弁幅	弁区径	内縁			外縁		表面	裏面			断面					
									全体幅	幅	文様	幅	文様						高さ				
第1図-1	軒丸	(18.4)	4.4	B1	1+4 円形	6 SA	2.9	13.9	2.3	1.3	a	1.0	a	0.7	ナデ のち ケズリ?	B1?	2.5Y6/3にぶい黄	7.5Y6/3にぶい黄	2.5Y6/3にぶい黄	小石 白色粒子	やや 軟	瓦当裏面：朱付着	
第1図-2	軒丸	(11.5)	5.7	B1	1+4 円形	(6) SA	3.1	(10.6)	1.6	0.7	a	0.9	a	0.8	ナデ	B1	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	細礫 小石 褐色粒子	硬	ほぼ全面被熱 の痕跡	
第1図-3	軒丸	(22.0)	-	-	-	(2) SA	3.9	(17.8)	2.1	0.9	a	1.2	a	1.0	ナデ	B1?	5Y6/2灰オリーブ	5Y6/2灰オリーブ	5Y6/2灰オリーブ	小石	硬		
第1図-4	軒丸	(18.8)	4.4	B1	4 円形	(6) SA	2.0	(14.6)	2.2	-	-	2.2	a	0.6	ナデ	B1	2.5YR4/1赤灰	2.5Y4/1黄灰	2.5YR4/2灰赤	小石 褐色粒子	硬		
第1図-5	軒丸	(8.6)	(7.8)	B1	4 円形	(7) SA	3.5	(8.0)	0.6	-	-	0.6	a	-	ナデ	-	7.5Y6/1灰	7.5Y6/1灰	7.5Y6/1灰	細礫 砂粒 白色粒子			
第1図-6	軒丸	(17.0)	-	-	-	(8) SC	4.6	(5.8)	0.9	-	-	0.9	a	0.7	ユビ ナデ	B1	2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/2灰黄	白色針状 物 細礫 小石	やや 軟		
第1図-7	軒丸	(17.0)	-	-	-	(2) 複弁	-	(1.0)	3.4	2.4	b	1.0	a	0.3	ユビ ナデ	B1	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	砂粒 褐色粒子 黒色粒子	軟	中世	
第1図-8	軒丸	(9.3)	-	-	-	SA (3)	1.2	(2.2)	1.0	-	-	1.0	a	0.6	ナデ	-	5Y6/2灰オリーブ	7.5Y5/1灰	5Y6/2灰オリーブ	砂粒	硬	近世 瓦当面：菊花文	
第1図-9	軒丸	8.2	3.5	-	-	(6)	4.3	-	-	-	-	-	-	-	ナデ	-	N3/暗灰	N3/暗灰	N6/灰	砂粒	硬	近世 瓦当面：菊花文	
第1図-10	軒丸?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ナデ	-	2.5Y5/2暗灰黄	N5/灰	N5/灰	細礫 小石	硬	近世 小片のため 詳細不明	

図版番号	種別	上弦弧幅		全長	内区		外区				胎区		瓦当	平瓦 制作 技法	平瓦部調整		色調			胎土	焼成	備考
		下弦弧幅	厚さ		厚さ (幅)	文様	上外区	下外区		幅	文様	制作 技法			頸形態	凹面	凸面	凹面	凸面			
		弧深	文様深さ	厚さ (幅)	文様	厚さ (幅)	文様	厚さ (幅)	文様													
第2図-11	軒平	(13.9) (13.9) 1.9	(9.3) 3.6 0.5	-	3G	-	-	-	-	-	-	-	B1-a	-	布目24×19 瓦当側ヘラケズリ	平瓦部~瓦当凸面ナデ 瓦当裏面ナデ	7.5YR4/2灰褐	5Y5/1灰	7.5YR4/2灰褐	小石 白色粒子	硬	
第2図-12	軒平	-	(10.8) 4.5 0.3	-	3G	-	-	-	-	-	-	-	C1-a	-	布目26×20 瓦当側ナデ	平瓦部~瓦当凸面ナデ のちタキベラ状工具 による施文	7.5Y4/1灰	5Y5/3 灰オリーブ	5Y5/3 灰オリーブ	褐色粒子 白色粒子	硬	多賀城式
第2図-13	軒平	(17.3) (15.9) 3.0	(13.5) 5.2 0.2	3.2	KK	0.8	[b]	1.2	[b]	0.5	[a]	-	C2-a	II 1-B	布目-X- 瓦当側ナデ	平瓦部~瓦当凸面ナデ	5Y5/2 灰オリーブ	5Y5/2 灰オリーブ	5Y5/2 灰オリーブ	小石 白色粒子	硬	平瓦部凹面：糸切り痕 平瓦部凸面：融着物 ほぼ全面被熱の痕跡
第2図-14	軒平	-	(10.7) 4.7 0.2	3.0	KK	1.0	[b]	0.7	[b]	0.4	[a]	-	C2-a	-	布目15×- 瓦当面・右側端縁ナデ	平瓦部~瓦当凸面 樋目叩き (L5本) のち 瓦当凸面ヘラケズリ	5Y4/1灰	5Y4/1灰	5Y4/1灰	褐色粒子 白色粒子	硬	
第2図-15	軒平	-	(6.2) 4.4 0.2	2.8	KK	0.9	[b]	0.7	[b]	-	-	-	C2-a	-	布目26×26 瓦当側ナデ	平瓦部樋目叩き (L-本) のち瓦当凸面ナデ	5Y5/3 灰オリーブ	5Y5/3 灰オリーブ	5Y5/3 灰オリーブ	白色粒子	硬	外区上下端欠失
第2図-16	軒平	-	(8.2) (5.9) 0.6	2.9	KK	1.9	[b]	(1.1)	[b]	-	-	-	II 1-B	-	布目-X- 瓦当凸面欠失	平瓦部樋目叩き (L8本) 瓦当凸面欠失	5Y5/2 灰オリーブ	5Y5/2 灰オリーブ	5Y5/2 灰オリーブ	細礫 小石	やや 軟	平瓦部凹面：糸切り痕 平瓦部凸面：朱付着
第2図-17	軒平	(12.1) (10.9) (1.6)	(13.5) 7.2 0.2	2.8	KK	1.4	[a]	3.0	[a]	2.6	[a]	-	C2-c	II 2-A1	布目19×20 瓦当側ヘラケズリ	平瓦部樋目叩き (L9本) のち 瓦当裏面~平瓦部境ユビナデ 瓦当凸面ヘラケズリ	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	細礫 小石 褐色粒子	硬	平瓦部凹面：粘土織 (横位) ほぼ全面被熱の痕跡
第3図-18	軒平	(17.2) (18.5) 4.2	(11.8) 6.1 0.2	2.3	KK	0.9	[a]	2.9	[a]	3	[a]	D?	B2-a	-	布目21×24 瓦当側ヘラケズリ	瓦当面樋目叩き 平瓦部~瓦当凸面 樋目叩き (L6本) のち 瓦当裏面ユビナデ	7.5R3/2暗赤褐 自然釉：5Y5/1 オリーブ黒	10R4/3 にぶい黄褐	7.5R3/2暗赤褐 自然釉：5Y5/1 オリーブ黒	砂粒	硬	瓦当面・平瓦部凹面： 自然釉
第3図-19	軒平	(13.1) (14.1) 2.1	(13.8) 3.7 0.2	2.5	KK	0.4	[a]	0.8	[a]	0.7	[a]	-	C2-b	-	布目29×32	平瓦部~瓦当凸面 樋目叩き (L6本) のち 瓦当部と平瓦部の境ナデ	5Y5/2 灰オリーブ	5Y5/1灰	5Y5/1灰	小石 白色粒子 黒色粒子	やや 軟	瓦のズレにより 上外区不明瞭
第3図-20	軒平	(11.0) (10.7) -	(9.1) 5.0 0.5	3.2	KK	0.3	[a]	1.5	[a]	1.5	[a]	-	C2-b	-	布目30×28 瓦当側ヘラケズリ	平瓦部~瓦当凸面 樋目叩き (L9本) のち 瓦当部と平瓦部の境ユビナデ	7.5Y5/2 灰オリーブ	2.5Y5/2暗灰黄	2.5Y5/2暗灰黄	細礫 砂粒 小石	やや 軟	瓦当凸面・平瓦部 凸面境：朱付着
第3図-21	軒平	(9.7) (14.8) -	(11.8) 5.8 0.3	3.3	KK	1.1	a	1.4	a	2.2	a	B	C2-b	-	布目32×30	平瓦部~瓦当凸面 樋目叩き (L8本) のち 瓦当部と平瓦部の境ユビナデ	5Y5/2 灰オリーブ	5Y5/2 灰オリーブ	5Y5/2 灰オリーブ	細礫 砂粒	硬	
第3図-22	軒平	-	(10.3) 4.0 (1.3)	3.1	HK	0.5	a	0.4	a	0.3	a	D	B1-a	-	布目-X- ほぼ全面ナデ	瓦当凸面~瓦当裏面ナデ 平瓦部格子目叩きのちナデ	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	白色粒子	やや 軟	

遺物観察表 2

図版番号	種別	上弦弧幅		厚さ(幅)	内区	外区				脇区		瓦当	平瓦制作技法	平瓦部調整			色調			胎土	焼成	備考
		下弦弧幅	厚さ			上外区		下外区		幅	文様			制作技法	頭形	凹面	凸面	瓦当	凹面			
		弧深	文様深さ	厚さ(幅)	文様	厚さ(幅)	文様															
第3図-23	軒平	—	6.3 5.6 0.3	4.8	HK	0.4	a	0.4	a	0.7	a	—	B2-a	—	—	平瓦部～瓦当凸面 縄目叩き(1-本)のち 瓦当凸面・瓦当裏面ナデ	7.5Y4/1灰	7.5Y4/1灰	7.5Y4/1灰	白色針状物 細礫 小石	硬	
第3図-24	軒平	—	(5.5) (3.6) 0.4	(2.9)	HK	—	—	0.8	a	—	—	—	B3-a	—	—	瓦当凸面～瓦当裏面ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	白色針状物 砂粒	やや軟	
第4図-25	軒平	(9.5) (9.4) —	(4.5) 7.4 0.1	3.3	HK	0.6	a	0.5	a	—	—	—	C2-a	—	布目16×14 瓦当面側ナデ	瓦当凸面ナデ	2.5Y5/2暗灰黄	2.5Y5/2暗灰黄	2.5Y5/2暗灰黄	細礫 砂粒 褐色粒子	やや軟	
第4図-26	軒平	(12.2) (14.2) (1.8)	(8.8) (6.7) 1.1	(4.8)	HK	(0.8)	a	1.1	a	2.2	a	D	B2-a	—	布目×× 瓦当面側ナデ	平瓦部～瓦当凸面 縄目叩き(1-本)のち 瓦当凸面・瓦当裏面ナデ	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y6/3 にぶい黄	白色針状物	やや軟	近キズ
第4図-27	軒平	(11.2) (10.0) (1.2)	(7.8) 7.4 0.8	3.1	文字	2.4	a	1.9	a	—	—	—	B1-a	—	布目×× 瓦当面側ナデ 平瓦部ナデ	瓦当凸面ナデ 瓦当裏面ユビナデ	2.5Y6/1黄灰	5Y5/1灰	2.5Y6/1黄灰	細礫 小石	硬	中世 瓦当面:「東福〇」
第4図-28	軒平	—	(5.0) (5.0) 0.8	3.5	文字	1.6	a	—	—	(0.6)	a	—	—	—	布目×× 瓦当面側ナデ 平瓦部ナデ	瓦当裏面ナデ・ユビナデ	10Y4/1灰	10Y4/1灰	10Y4/1灰	細礫 砂粒	硬	中世 瓦当面:「〇〇寺」
第4図-29	軒平	(9.0) (9.6) 0.7	(6.8) 3.9 0.3	2.4	刺頭文	1.1	a	0.4	a	0.8	a	—	B2-c	—	布目××	瓦当裏面ユビナデ	10YR4/3 にぶい黄褐色	10YR4/3 にぶい黄褐色	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂粒 褐色粒子	軟	中世
第4図-30	軒平	—	(7.0) —	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	布目××	平瓦部ナデ	5Y 5/2 灰オリーブ 7.5Y4/1灰	2.5Y5/2暗灰黄	—	小石	やや軟	平瓦部凸面:注記「1」 2)寺 古瓦 明治二十年 五月二日 所得 凹面:ヘラガキ 「比企」

図版番号	種別	狭端幅		厚さ	技法	成・整形の特徴				色調			胎土	焼成	備考		
		広端幅	横幅			凹面		凸面		端面	凹面	凸面					
		全長	素材	布目	調整の特徴	叩き	調整の特徴	調整の特徴									
第5図-31	平瓦	— (8.4) (13.8)	1.6 ～ 1.9	—	—	—	19×22	—	—	縄目 1.5本	叩き密	狭端一面ヘラケズリ	2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/2灰黄	砂粒 白色粒子	やや軟	凹面:押印「父瓦」
第5図-32	平瓦	— (13.3) (16.7)	1.3 ～ 1.4	—	—	—	19×14	左側端縁ヘラケズリ	格子目	叩きのちナデ	左側端縁ヘラケズリ	5Y/灰	7.5Y6/1灰	白色針状物 細礫 白雲母	硬	凸面:押印「父」	
第5図-33	平瓦	— (20.6) (14.9)	2.1 ～ 2.5	II 1-A1?	粘土紐 (横位)?	18×18	右側端縁ヘラケズリ	—	—	縄目 1.5本	叩き密	右側端一面ヘラケズリ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄 2.5Y7/4浅黄	白色針状物 細礫 小石	軟	凹面:ヘラガキ「父」 凸面:粘土紐(横位)?
第5図-34	平瓦	— (16.8) (14.1)	2.5 ～ 2.7	—	—	—	18×17	左側端縁ヘラケズリ	—	—	叩き密	左側端一面ヘラケズリ	2.5Y7/4浅黄	2.5Y7/4浅黄	白色針状物 小石	軟	凹面:ヘラガキ「父」 凸面:ヘラガキ?
第5図-35	平瓦	— (17.9) (10.1)	1.9 ～ 2.7	—	粘土板	19×17	左側端縁ヘラケズリ	—	—	縄目 1.5本	叩き密	右側端二面ヘラケズリ	2.5Y8/1灰白 10YR7/6明黄褐色	7.5YR5/6明褐色 2.5Y7/2灰黄	白色針状物 細礫 砂粒 長石	軟	凹面:ヘラガキ「父」 凸面:ユビガキ?
第5図-36	平瓦	— (16.0) (9.3)	2.3 ～ 2.5	—	粘土板	—	左側端縁ヘラケズリ	—	—	縄目 1.4本	叩き密	左側端一面ヘラケズリ	5Y6/2灰オリーブ	5Y6/2灰オリーブ	白色針状物 細礫 砂粒	やや軟	凹面:ヘラガキ「父」 凸面:糸切り痕
第6図-37	平瓦	(11.1) (18.7) (28.3)	2.1 ～ 2.3	II 1-A1?	粘土紐 (横位)?	×	広端縁ナデ 左側端縁ナデ	—	—	縄目 1.6本	叩き密 叩きのち 縦位・横位ナデ	広端一面ヘラケズリ 左側端二面ヘラケズリ	2.5Y6/1黄灰	2.5Y6/1黄灰	白色針状物 小石 砂粒	やや軟	凹面:押印「企」
第6図-38	平瓦	— (5.9) (3.5)	2.1 ～ 2.3	—	粘土板	—	—	—	—	縄目 1.8本	叩き密	—	7.5Y5/1灰	7.5Y5/1灰	砂粒 細礫 小石	硬	凹面:押印「比」 凹面:糸切り痕
第6図-39	平瓦	— (15.4) (10.7)	2.6 ～ 2.8	—	粘土板	—	右側端縁ナデ	—	—	縄目 1.8本	叩き密	右側端一面ヘラケズリ	2.5Y5/3黄褐色	2.5Y5/3黄褐色	砂粒 細礫 小石 白雲母	軟	凹面:押印「比」 凹面:糸切り痕
第6図-40	軒平	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	軒平瓦観察表に表示
第6図-41	堤瓦	— (14.8) (12.8)	2.3 ～ 2.6	平瓦 二分割	—	15×13	左側端縁ナデ	—	—	縄目 1.6本	叩き密	右側端一面ヘラケズリ 左側端二面ヘラケズリ	2.5Y5/2暗灰黄	7.5Y5/1灰	細礫 砂粒 小石 白色粒子	硬	凹面:ヘラガキ「国比企」 凸面:ヘラガキ?・ユビ ガキ?
第6図-42	平瓦	— (7.9) (7.1)	2.1	—	—	—	—	—	—	縄目 1.4本	叩き密	—	2.5Y6/2灰黄 2.5Y4/1黄灰	2.5Y6/2灰黄	白色針状物 細礫 砂粒 白色粒子	やや軟	凹面:押印「播」
第6図-43	平瓦	— (7.6) (7.9)	1.8 ～ 2.0	—	—	20×—	—	—	—	格子目 平行	—	—	10YR6/4にぶい黄褐色	7.5Y5/1灰 5Y6/1灰	白色針状物 細礫 砂粒	やや軟	凹面:押印「播」

遺物観察表 3

図版番号	種別	狭端幅		厚さ	技法	成・整形の特徴						色調		胎土	焼成	備考	
		広端幅	縦幅			凹面			凸面		端面		凹面				凸面
						素材	布目	調整の特徴	叩き	調整の特徴	調整の特徴						
第6図-44	丸瓦	—	—	—	—	—	—	—	—	ナデケシ	—	—	2.5Y6/3にぶい黄 自然釉：5Y4/2 灰オリープ	細礫 砂粒	硬	凸面：ヘラガキ「播」 凹凸面：自然釉・融着物	
第6図-45	平瓦	—	—	2.0 ～ 2.3	—	—	16×20	左側端縁ヘラケズリ	縄目 L6本	叩き密	左側端二面ヘラケズリ	10YR6/6明黄褐	10YR6/6明黄褐	白色針状物 細礫 小石 褐色粒子	やや軟	凹面：押印「播印」	
第6図-46	平瓦	—	—	2.1 ～ 2.3	—	—	19×20	—	格子目 平行	—	広端面一面ヘラケズリ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y5/1黄灰	白色針状物 細礫 砂粒 白色粒子	やや軟	凹面：押印「播」 広端面：ワラ状圧痕 凹面：横脊痕？	
第7図-47	平瓦	—	—	2.1 ～ 2.6	II 1-A1?	粘土紐 (横位)？	17×19	狭端縁ナデ 左側端縁ナデ	縄目 L7本	叩き密	狭端一面ヘラケズリ 右側端一面ヘラケズリ	10YR7/6明黄褐	10YR7/6明黄褐 10YR5/1褐灰	白色針状物 細礫	軟	凹面：押印「豊」 凹面：粘土紐(横位)？	
第7図-48	平瓦	—	—	2.0 ～ 2.2	—	—	17×17	—	格子目	叩き疎	—	5Y5/2暗灰黄	5Y5/1灰	白色針状物 細礫 砂粒 小石	硬	凹面：押印「豊」	
第7図-49	丸瓦	—	—	1.9 ～ 2.2	—	—	18×19	右側端縁ヘラケズリ	—	ナデケシ(縦位)	右側端一面ヘラケズリ	10YR5/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	白色針状物 細礫 砂粒	やや軟	凹面：押印「豊」	
第7図-50	平瓦	—	—	2.6 ～ 2.7	—	粘土板	—	ナデ	格子目	—	—	N4/灰	7.5Y6/1灰	細礫 砂粒 小石	硬	凹面：押印「豊」	
第7図-51	平瓦	—	—	2.2 ～ 2.6	II 1-B	粘土板	23×20	狭端縁ヘラケズリ	格子目	—	狭端一面ヘラケズリ	2.5Y7/4浅黄	2.5Y7/4浅黄	細礫 砂粒 小石	やや軟	凹面：押印「苳」 凹面：糸切り痕	
第7図-52	平瓦	—	—	3.6 ～ 3.7	—	—	18×17	—	格子目	—	—	7.5Y5/2灰オリープ	7.5Y6/1灰	細礫 砂粒 白色粒子	硬	凸面：押型「苳」 凹面：注記「国分」 明治二十年 五月二日得	
第7図-53	平瓦	—	—	2.0 ～ 2.5	—	粘土板	21×19	左側端縁ヘラケズリ	格子目	叩き密	左側端一面ヘラケズリ	N5/灰	N5/灰	細礫 砂粒 小石	やや軟	凸面：押型「苳」	
第7図-54	平瓦	—	—	2.1 ～ 2.3	II 1-B	粘土板	21×21	—	格子目	叩き密	狭端一面ヘラケズリ 右側端一面ヘラケズリ	2.5Y5/2暗灰黄	2.5Y7/2灰黄	細礫 黒色粒子	やや軟	凸面：押型「苳」 凹面：注記「山口寺古瓦」 明治二十年五月二日 所得	
第8図-55	丸瓦	—	—	1.3 ～ 1.7	I ?-A1	粘土紐 (横位)	30×26	—	—	回転ナデ(横位) ナデケシ	左側端一面ヘラケズリ	5Y5/2灰オリープ	10YR4/2灰黄褐	白色針状物 細礫 砂粒 小石	硬	凹面：押印「橋」 凹凸面：粘土紐(横位) 凹凸面：被熱の痕跡 脱落とし不明	
第8図-56	丸瓦	—	—	1.5 ～ 1.7	I ?-A1	粘土紐 (横位)	23×19	—	—	ナデケシ	—	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y6/3にぶい黄	白色針状物 細礫	やや軟	凸面：押印「橋」 凹面：粘土紐(横位)	

図版番号	種別	狭端幅		厚さ	技法	成・整形の特徴						色調		胎土	焼成	備考	
		広端幅	縦幅			凹面			凸面		端面		凹面				凸面
						素材	布目	調整の特徴	叩き	調整の特徴	調整の特徴						
第8図-57	丸瓦	—	—	1.0 ～ 1.2	—	—	28×24	—	—	回転ナデ (横位)ナデケシ	—	5Y6/2灰オリープ	7.5Y5/1灰	白色針状物 細礫 砂粒	やや軟	凸面：ヘラガキ「橋」	
第8図-58	平瓦	—	—	1.9 ～ 2.0	—	—	16×14	—	縄目 L8本?	叩き密	—	5Y6/1灰	7.5Y5/1灰 5YR5/1褐灰	白色針状物 細礫 白色粒子	やや軟	凹面：押印「男」 凸面：注記「山口寺古瓦」 明治二十年五月二日 所得	
第8図-59	平瓦	—	—	2.4	—	—	18×15	両側端縁ヘラケズリ	格子目	叩きのち ナデ(斜位)	両側端一面ヘラケズリ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/2灰黄褐 10YR7/6明黄褐	白色針状物 砂粒 小石 赤色粒子	軟	凹面：ヘラガキ「男」	
第8図-60	平瓦	—	—	2.0 ～ 2.2	II 1-A1	粘土紐 (横位)	—	左側端縁ヘラケズリ	縄目 L6本	叩き密	左側端一面ヘラケズリ	2.5Y7/4浅黄	2.5Y5/3黄褐色	白色針状物 砂粒 小石	軟	凹面：押印「男」 凸面：粘土紐(横位)	
第8図-61	平瓦	—	—	1.9 ～ 2.6	—	—	20×25	右側端縁ヘラケズリ	—	—	右側端一面ヘラケズリ	10YR6/2灰黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	砂粒	やや軟	凸面：押型「橋」	
第8図-62	平瓦	—	—	2.3 ～ 2.4	—	—	11×10	—	—	—	右側端二面ヘラケズリ	10YR3/1黒褐 10YR4/3 にぶい黄褐	10YR5/2灰黄褐 2Y3/1黒褐	細礫 砂粒	硬	凸面：押型「橋」 凸面：被熱の痕跡	
第8図-63	平瓦	—	—	1.6 ～ 1.7	—	—	—	狭端縁ヘラケズリ	格子目	—	狭端一面ヘラケズリ	2.5Y5/2暗灰黄	2.5Y6/2灰黄	砂粒 白色粒子	軟	凸面：押印「橋」 狭端面：ワラ状圧痕	
第9図-64	丸瓦	—	—	2.0 ～ 2.2	—	—	21×21	広端縁エビナデ 右側端縁ナデ	—	ナデケシ	広端一面ヘラケズリ 右側端一面ヘラケズリ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	小石	軟	凸面：押印「橋」 右側端脱落とし不明	
第9図-65	平瓦	—	—	2.1 ～ 2.5	II 1-A1	粘土紐 (横位)	33×32	左側端縁ヘラケズリ	縄目 L5本	叩き密	左側端二面ヘラケズリ	7.5Y6/1灰 7.5YR6/3にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい黄橙	白色針状物 細礫 砂粒 白色粒子	やや軟	凸面：押印「橋」 凹面：粘土紐(横位) 凹凸面：指頭痕	
第9図-66	丸瓦	—	—	0.9 ～ 1.1	—	—	30×26	—	—	ナデケシ	—	N5/灰	N5/灰	細礫 砂粒 白色粒子	硬	凸面：押印「橋」 脱落とし不明	
第9図-67	丸瓦	—	—	1.5 ～ 1.7	I ?-A1	粘土紐 (横位)	20×22	広端縁ヘラケズリ 右側端縁ヘラケズリ	—	ナデケシ(縦位)	広端一面ヘラケズリ 右側端一面ヘラケズリ	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	白色針状物 細礫 砂粒 白色粒子	硬	広端面：ヘラガキ 「白方」 凹面：粘土紐(横位) 脱落とし不明	
第9図-68	平瓦	—	—	1.8 ～ 2.2	II 1-B	粘土板	22×23	狭端縁ヘラケズリ 左側端縁ヘラケズリ	格子目	叩き密	狭端一面ヘラケズリ 左側端一面ヘラケズリ	7.5YR6/4 にぶい黄橙	2.5Y5/1黄灰	細礫 砂粒 黒色粒子	やや軟	凹面：押印「白」 凹面：糸切り痕	
第9図-69	平瓦	—	—	1.7 ～ 1.8	—	—	17×23	—	縄目 L5本	叩き密	—	2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/2灰黄	細礫 白色粒子 黒色粒子	硬	凹面：ヘラガキ「白」？	

遺物観察表 4

図版番号	種別	狭端幅		厚さ	技法	成・整形の特徴						色調		胎土	焼成	備考	
		広端幅	横幅			凹面			凸面		端面		凹面				凸面
						素材	布目	調整の特徴	叩き	調整の特徴	調整の特徴						
第9図-70	平瓦	— 14.8 (9.8)	—	1.9 ~ 2.2	II 1-A1	粘土紐 (横位)	19×19			縄目 L8本	叩き密		2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y5/3黄褐	白色針状物 砂粒 小石 石英	軟	凹面：押印「高」 凹面：粘土紐(横位)
第9図-71	平瓦	— (11.6) (8.8)	—	1.9 ~ 2.0	—	—	24×26			縄目 L5本	叩き密		5YR6/4にぶい橙	2.5Y6/4にぶい黄	白色針状物 細礫 赤色粒子	やや軟	凹面：ヘラガキ「高」
第9図-72	平瓦	— (15.4) (15.7) (9.3)	—	1.5 ~ 2.0	—	—	21×14	狭端縁ヘラケズリ		格子目		狭端一面ヘラケズリ 左側端二面ヘラケズリ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	白色針状物 細礫 砂粒 小石	軟	凸面：押印「見」
第9図-73	平瓦	— (8.1) (7.5)	—	2.2 ~ 2.3	—	—	—			縄目 L6本?	叩き密		10YR5/1褐灰	10YR5/1褐灰	白色針状物 細礫 砂粒 褐色粒子	硬	凹面：押印「横見」
第10図-74	平瓦	— (11.5) (15.1) (13.7)	—	2.2 ~ 2.3	—	—	20×15	右側端縁ヘラケズリ		格子目	叩き密	広端一面ヘラケズリ 右側端一面ヘラケズリ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	白色針状物 砂粒 白色粒子	硬	凸面：押型「大井」
第10図-75	平瓦	— (10.4) (6.9)	—	2.0 ~ 2.2	—	—	16×18	左側端縁ナデ		格子目	叩き密	左側端一面ヘラケズリ	2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/2灰黄	白色針状物 砂粒 小石 白色粒子 白雲母	やや軟	凸面：押型「大井」?
第10図-76	平瓦	— (20.2) (9.9)	—	1.8 ~ 2.2	II 1-A1	粘土紐 (横位)	23×18	左側端縁ヘラケズリ		縄目 L8本	叩き密	左側端一面ヘラケズリ	N5/灰	N5/灰	白色針状物 細礫 砂粒 小石	硬	凹面：押印「大」 凹面：粘土紐(横位)
第10図-77	平瓦	— (12.7) (12.6)	—	1.5 ~ 2.5	—	—	—			縄目 L4本	叩き密		10YR6/4 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y7/2灰黄 2.5Y6/1黄灰	白色針状物 細礫 砂粒 白雲母	軟	凹面：押印「入」 凸面：指頭痕
第10図-78	平瓦	— (14.0) (14.0) (9.8)	—	2.1 ~ 2.5	—	粘土板	—	広端縁ヘラケズリ 右側端縁ヘラケズリ		格子目		広端一面ヘラケズリ 右側端二面ヘラケズリ	2.5Y6/1黄灰	2.5Y6/2灰黄	白色針状物 細礫 小石 褐色粒子	やや軟	凸面：ヘラガキ「入」
第10図-79	平瓦	— (4.0) (7.2) (7.5)	—	2.2 ~ 2.3	—	—	26×26	広端縁ヘラケズリ 右側端縁ヘラケズリ		—	ナデ	広端一面ヘラケズリ 右側端三面ヘラケズリ	10YR6/3 にぶい黄褐	7.5YR6/3	白色針状物 細礫 小石	硬	凹面：ヘラガキ「入」
第10図-80	平瓦	— (10.0) (15.9) (14.7)	—	2.1 ~ 2.4	II 1-B	粘土板	21×20	広端縁ヘラケズリ 左側端縁ヘラケズリ		縄目 L6本	叩き密 叩きのちナデ	広端一面ヘラケズリ 左側端一面ヘラケズリ	N4/灰	N6/灰	細礫 小石 白色粒子	硬	広端面：押印「中」 凹面：糸切り痕 凹面：布織い目
第10図-81	平瓦	— (8.5) (6.5)	—	2.6 ~ 3.0	II 1-B	粘土板	24×24			縄目 L4本?	叩きのちナデ		5Y4/2灰オリーブ	10YR4/1褐灰	白色針状物 細礫 砂粒 小石	硬	凹面：押印「中」 凹面：糸切り痕
第10図-82	丸瓦	— (8.2) (13.0) (14.4)	—	1.6 ~ 1.8	I ?-A1	粘土紐 (横位)	21×21	右側端縁ヘラケズリ		—	狭端縁ヘラケズリ 回転ナデ (横位) ナデケン	狭端一面ヘラケズリ 右側端一面ヘラケズリ	2.5Y6/6明黄褐 5Y4/1灰	2.5Y6/3にぶい黄	小石 砂粒	やや軟	凸面：押印「王」多磨郡 凹面：粘土紐(横位) 凹面：被熱の痕跡 隅落とし不明

図版番号	種別	狭端幅		厚さ	技法	成・整形の特徴						色調		胎土	焼成	備考	
		広端幅	横幅			凹面			凸面		端面		凹面				凸面
						素材	布目	調整の特徴	叩き	調整の特徴	調整の特徴						
第10図-83	平瓦	— (9.4) (4.8)	—	1.9 ~ 2.2	II 1-B	粘土板	—	ナデ		縄目 L3本	叩き密		5Y4/1灰	5Y4/2灰オリーブ	白色針状物 細礫 砂粒 石英	軟	凸面：押印「加瓦」 凹面：糸切り痕
第11図-84	平瓦	— (6.7) (7.8) (11.1)	—	3.5 ~ 3.6	—	—	18×17	広端縁ヘラケズリ		格子目		広端一面ヘラケズリ	5Y5/1灰	5Y5/1灰	砂粒	硬	凸面：押型「都」 凹面：棒状圧痕 凹面：注記「[国古瓦 治二十年五月二日得]」
第11図-85	平瓦	— (14.1) (10.3)	—	2.7 ~ 2.8	II 1-B	粘土板	—			格子目	叩き密		5Y5/1灰	5Y5/1灰	白色針状物 細礫 砂粒 石英	硬	凸面：押印「児玉」逆字 凹面：糸切り痕
第11図-86	平瓦	— (14.2) (15.5) (9.0)	—	1.8 ~ 2.5	—	—	20×20	右側端縁ナデ		縄目 L4本	叩き密	狭端一面ヘラケズリ 右側端一面ヘラケズリ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	白色針状物 砂粒 小石 白雲母	軟	凹面：押印「田」か 文 字 広端面：ワラ状圧痕
第11図-87	平瓦	— (6.3) (8.6)	—	2.8 ~ 3.0	—	粘土板	25×22			格子目			5Y6/2灰オリーブ	7.5Y5/1灰	白色針状物 細礫 砂粒 小石 白雲母	硬	凹面：ヘラガキ判読不明 文字
第11図-88	平瓦	— (14.0) (14.5)	—	1.4 ~ 1.7	—	—	25×26	左側端縁ヘラケズリ		縄目 L4本	叩き密	左側端一面ヘラケズリ	10Y4/1灰	7.5Y4/1灰	白色針状物 細礫 砂粒 小石	硬	凹面：押印「籬」半欠
第11図-89	平瓦	— (12.5) (8.7)	—	1.9 ~ 2.0	II 1-B	粘土板	19×19	左側端縁ヘラケズリ		格子目	叩きのちナデ	左側端三面ヘラケズリ	7.5Y5/1灰	7.5Y5/1灰	白色針状物 細礫 砂粒	硬	凹面：ヘラガキ 「戸主〇…」 凹面：糸切り痕
第11図-90	丸瓦	— (6.9) (7.2)	—	1.7 ~ 1.8	I ?-A1	粘土紐 (横位)	16×14			—	ナデケン		2.5Y6/2灰黄	2.5Y7/3浅黄	白色針状物 細礫 砂粒 小石 白雲母	軟	凸面：ヘラガキ 判読不明文字 凹面：粘土紐(横位) 隅落とし不明
第11図-91	平瓦	— (6.1) (5.7)	—	2.2 ~ 2.4	—	—	—	ナデ		縄目 L4本	叩き密		7.5Y5/1灰	7.5Y5/1灰	白色針状物 小石 白雲母	やや軟	凹面：ヘラガキ 判読不明記号?
第11図-92	丸瓦	— (20.7) (24.9)	—	1.6 ~ 2.1	I 3-?	—	23×21	広端縁ヘラケズリ 両側端縁ヘラケズリ		—	ナデケン(横位)	広端一面ヘラケズリ 両側端一面ヘラケズリ	2.5Y6/6明黄褐	2.5Y6/6明黄褐	白色針状物 細礫 砂粒 白雲母	軟	凸面：ユビガキ 「Y」符号? 凹面：隅落とし不明
第12図-93	丸瓦	— (9.9) (8.6)	—	1.3 ~ 1.5	I ?-A1	粘土紐 (横位)	26×30			—	ナデケン(縦位)	右側端一面ヘラケズリ	2.5Y5/2暗灰黄	2.5Y5/2暗灰黄	白色針状物 細礫 砂粒 白雲母	やや軟	凹面：粘土紐(横位) 隅落とし不明
第12図-94	丸瓦	— (3.4) (5.4) (9.8)	—	1.6 ~ 2.0	—	—	29×25	広端縁ヘラケズリ 右側端縁ヘラケズリ		—	右側端縁ヘラケズリ 回転ナデ (横位) ナデケン	広端一面ヘラケズリ 右側端一面ヘラケズリ	2.5Y5/1黄灰	2.5Y6/4にぶい黄	白色針状物 砂粒 小石 白雲母	やや軟	隅落とし不明
第12図-95	丸瓦	— (8.3) (8.3) (9.5)	—	1.7 ~ 2.7	—	—	—	ユビナデ(縦位) 広端縁ヘラケズリ 右側端縁ヘラケズリ		—	回転ナデ (横位) ナデケン	広端一面ヘラケズリ 右側端一面ヘラケズリ	2.5Y6/2灰黄	2.5Y4/1黄灰	細礫 砂粒 小石	硬	隅落とし不明

遺物観察表 5

図版番号	種別	狭端幅 広端幅 横幅 全長	厚さ	技法	成・整形の特徴					色調		胎土	焼成	備考	
					凹面			凸面		端面	凹面				凸面
					素材	布目	調整の特徴	叩き	調整の特徴	調整の特徴					
第12図-96	丸瓦	— (9.7) (8.2)	1.7 ～ 2.0	I ?-A1	粘土紐 (横位)	26×22	右側端縁ヘラケズリ	—	ナデケシ(縦位)	右側端一面ヘラケズリ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	白色針状物 砂粒 小石 白雲母	やや軟	凹面：粘土紐(横位) 隅落とし不明
第12図-97	丸瓦	— (4.6) (10.7)	1.8 ～ 2.0	—	—	23×25	—	—	ナデケシ(縦位)	—	2.5Y6/2灰黄	10YR5/2灰黄褐	細礫 褐色粒子	やや軟	凸面：注記「□沼 大口」 古」]
第13図-98	平瓦	— (14.3) (13.7)	2.2 ～ 2.2	II 1-A1	粘土紐 (横位)	33×-	右側端縁ヘラケズリ	縄目 L5本	叩き密	右側端一面ヘラケズリ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	白色針状物 砂粒 小石	軟	凹面：粘土紐(横位) 凹凸面：指頭痕
第13図-99	平瓦	— (9.7) (10.3) (10.1)	2.7 ～ 2.9	II 1-B	粘土板	—	広端縁ヘラケズリ 右側端縁ヘラケズリ	縄目 L3本	叩き密	広端一面ヘラケズリ 右側端?面ヘラケズリ	N6/灰	N6/灰	白色針状物 細礫 砂粒	硬	凹面：糸切り痕
第13図-100	平瓦	— (22.8) (23.3) (12.2)	1.8 ～ 2.3	II 1-B	粘土板	16×17	両側端縁ヘラケズリ	縄目 L7本?	叩き密 叩きのちナデ?	両側端一面ヘラケズリ	N6/灰	2.5Y6/1黄灰	白色針状物 細礫 砂粒	硬	凹凸面：糸切り痕 凹凸面：被熱の痕跡
第13図-101	平瓦	— (11.3) (7.3)	1.8 ～ 1.9	II 1-A1	粘土紐 (横位)	-×32	左側端縁ヘラケズリ	縄目 L4本	叩き密 左側端縁ヘラケズリ	左側端三面ヘラケズリ	5Y5/2灰オリーブ	5Y5/2灰オリーブ	白色針状物 砂粒 小石	やや軟	凹面：粘土紐(横位)
第13図-102	平瓦	— (10.3) (14.2)	1.6 ～ 1.8	—	—	24×19	広端縁ヘラケズリ 左側端縁ヘラケズリ	縄目 L4本 格子目	叩き密	広端一面ヘラケズリ 左側端一面ヘラケズリ	2.5Y6/4にぶい黄 自然釉：7.5Y4/2 灰オリーブ	2.5Y6/4にぶい黄 N4/灰	砂粒 小石	硬	凹面：自然釉 凹凸面：被熱の痕跡
第13図-103	平瓦	— (6.9) (16.7) (15.5)	1.3 ～ 1.6	II 1-B	粘土板	18×18	—	格子目 平行	叩き密	狭端一面ヘラケズリ 右側端一面ヘラケズリ	N4/灰 5Y5/2灰オリーブ 色	N4/灰	白色針状物 細礫 砂粒 白色粒子	硬	凹面：糸切り痕
第13図-104	平瓦	— (6.0) (11.1)	1.8 ～ 2.0	—	—	18×17	—	格子目	叩きのちナデ	—	2.5Y5/3黄褐	2.5Y5/3黄褐	白色針状物 砂粒 白色粒子	やや軟	
第13図-105	平瓦	— (13.1) (9.6)	1.3 ～ 1.8	—	—	18×15	右側端縁ヘラケズリ	格子目	叩きのちナデ	右側端一面ヘラケズリ	10YR6/4 にぶい黄橙	N6/灰	白色針状物 砂粒 小石	硬	
第13図-106	平瓦	— (15.1) (11.1)	1.5 ～ 1.7	—	—	20×22	—	格子目	叩きのちナデ	—	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	白色針状物 砂粒 小石	軟	
第14図-107	平瓦	— (11.5) (12.1) (9.3)	1.7 ～ 2.1	—	—	19×16	狭端縁ヘラケズリ 右側端縁ヘラケズリ	格子目	叩き疎	狭端一面ヘラケズリ 右側端一面ヘラケズリ	7.5Y5/1灰	10YR6/4 にぶい黄橙	白色針状物 砂粒	軟	
第14図-108	平瓦	— (12.2) (14.5) (9.9)	2.2 ～ 2.4	—	—	18×15	左側端縁ヘラケズリ	格子目	叩きのちナデ	広端一面ヘラケズリ 左側端一面ヘラケズリ	5Y5/1灰	2.5Y5/2暗灰黄	白色針状物 細礫 小石	硬	凹凸面：被熱の痕跡

図版番号	種別	狭端幅 広端幅 横幅 全長	厚さ	技法	成・整形の特徴					色調		胎土	焼成	備考	
					凹面			凸面		端面	凹面				凸面
					素材	布目	調整の特徴	叩き	調整の特徴	調整の特徴					
第14図-109	平瓦	— (0.7) (10.8) (12.7)	2.3 ～ 2.5	—	—	22×19	狭端縁ヘラケズリ	格子目	叩きのちナデ	狭端一面ヘラケズリ	2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/2灰黄	白色針状物 細礫 砂粒	やや軟	
第14図-110	平瓦	— (6.2) (7.3)	1.8 ～ 2.0	—	—	21×25	—	格子目	叩き密	—	2.5Y7/4浅黄	2.5Y4/1黄灰	小石 砂粒	やや軟	
第14図-111	平瓦	— (10.5) (13.5)	2.3 ～ 2.6	—	—	28×29	右側端縁ヘラケズリ	格子目	右側端縁ヘラケズリ 叩きのちナデ	右側端一面ヘラケズリ	10YR6/3にぶい黄褐	10YR6/3にぶい黄褐	細礫 砂粒 小石	軟	
第14図-112	平瓦	— (15.2) (14.9) (13.5)	2.3 ～ 2.9	—	—	20×16	狭端縁ヘラケズリ 左側端縁ヘラケズリ	格子目	叩きのちナデ	狭端一面ヘラケズリ 左側端一面ヘラケズリ	5YR5/1褐灰	7.5YR5/3にぶい褐	白色針状物 細礫 砂粒 小石	やや軟	
第14図-113	埴瓦	— (13.3) (8.9)	1.5 ～ 2.0	平瓦 二分割	—	21×21	右側端縁ナデ	縄目 L6本	叩き密	右側端一面ヘラケズリ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y5/2暗灰黄	小石 白色粒子 黒色粒子	やや軟	
第14図-114	埴瓦	— (12.6) (5.6)	1.9 ～ 2.3	平瓦 二分割	—	19×19	—	縄目 L6本?	叩き密	狭端一面ヘラケズリ 右側端一面ヘラケズリ	10YR5/3にぶい黄 褐 7.5Y4/1灰	5Y4/1灰	砂粒	硬	
第14図-115	埴瓦	— (13.9) (11.6)	1.6 ～ 2.1	平瓦 二分割	粘土板	21×18	右側端縁ヘラケズリ	格子目	叩き密 右側端縁ヘラケズリ	右側端三面ヘラケズリ	7.5Y5/1灰	7.5Y5/1灰	砂粒 小石	硬	凹面：糸切り痕 凹凸面：被熱の痕跡 左側端分割後無調整
第15図-116	平瓦	— (4.9) (12.5) (18.8)	2.6 ～ 2.9	—	—	—	狭端縁ヘラケズリ 右側端縁ヘラケズリ	格子目	—	狭端一面ヘラケズリ 右側端一面ヘラケズリ	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y6/3にぶい黄 2.5Y3/1黒褐	砂粒 褐色粒子	硬	凸面：被熱の痕跡 凹面：注記(判読不明) 中世
第15図-117	平瓦	— (14.7) (17.0)	2.0 ～ 2.4	—	—	—	左側端縁ヘラケズリ	格子目	—	左側端二面ヘラケズリ	10YR5/1褐灰 10YR7/3にぶい黄 橙	7.5Y5/1灰	細礫 砂粒 小石	やや軟	凹凸面：糸切り痕 中世
第15図-118	平瓦	— (5.0) (7.1)	1.2 ～ 1.3	—	—	—	—	格子目	—	—	7.5Y6/1灰	5Y6/2灰オリーブ	細礫 砂粒	やや軟	中世
第15図-119	平瓦	— (6.1) (6.3)	2.0 ～ 2.2	—	—	11×-	—	格子目	—	—	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	細礫 砂粒 小石 赤色粒子	軟	中世
第15図-120	平瓦	— (6.2) (8.1)	1.6 ～ 1.7	—	—	8×11	—	格子目	—	狭端一面ヘラケズリ	10YR7/3にぶい黄 橙	10YR7/4にぶい黄橙	細礫 小石	軟	中世

第三章 結 語

資料の評価と意義

根岸家の資料集は、現在までに文書資料目録として、国立国会図書館、埼玉県立図書館・県立文書館で刊行され、多くの研究者にとって利便性の高いものとなっている。これは、資料の蒐集者であった根岸友山・武香父子と国立博物館・国会図書館への寄贈をおこなった盾臣氏・憲助氏、その後、県文書館へ寄託された喜夫氏・友憲氏らの深い理解があつてのことである。熊谷市民をはじめ多くの研究者もその恩恵を受けることが大きい。

熊谷市史編さん事業は、旧町合併後の新市で新しい市史を編さんすることを目的としており、既存の資料を再度見直すことに加えて、未だ埋もれた資料があるならば、その発掘も行うこととしている。この事業を進める過程で貴重な資料の提供を受けたことは、全く時宜に合い、市史編さん事業にとって大きな実りをもたらしている。

先に紹介したとおり、この青山根岸家資料は市史編さん室で整理作業の後に、あるものは公開されるだろう。なお、同家には古文書以外にも本報告で行った考古資料なども数多く保存されてきた。その整理や資料化は未着手といいいい状況である。多くは美術・工芸資料でもあり、同時に考古・歴史資料でもあることから、評価が難しく扱い難かったこともある。しかし、根岸家との関わりの元につくられ、蒐集された資料群は一九世紀末の日本をタイムマシンで出かけて切り取って来たかのようなモースコレクションに劣らない。まして、考古学黎明期の考古資料も多数含まれその価値は下がることはないだろう。

幸い、根岸家の御理解を得て、今回蒐集資料の中から考古資料―瓦―を選び市史報告書として報告できた。改めて感謝したい。第I章では根岸家と本報告の蒐集資料の成立を振り返り、記録を探索して検証を行った。考証や評価に不足の観は否めないと感じていたが、好古家・考古学者であった根岸武香の評価を前進させるものと考えている。

第II章では考古学視点から瓦自身の属性記載や分類をおこない、必要な図と属性表を合わせ報告を行った。武蔵国分寺瓦の一括資料として、明治期の蒐集資料群の姿を確認することができた。郡郷名の文字瓦の種類は既出の例に収まり、ほかに人名等の一部と想定されるものがあつた。これらの文字瓦は、武蔵国分寺跡と泉井窯跡に代表される南比企窯跡群の出土資料に多くみられ、武蔵国分寺の創建期から七重塔再建期まで含む一群であつた。

なお、武蔵国分寺所用瓦としては同范例のまだ確認されていない軒平瓦が二種あることが分かつた。この二種の軒丸瓦は、Aは二八五系の渦巻文を主モチーフとするもの、Bは二八七系の唐草文をモチーフとする瓦である。二八七系は版傷の大きさから補修瓦用としての少量生産も想定されるところだが、近似例を見るといづれも武蔵国分寺跡や国府・瓦窯跡に認められることから、近い将来の発見が待たれよう(補註5)。

根岸武香が意図した古印譜の編纂と古瓦の関係については触れられなかつたが、武香の草稿など関係資料が残されていることから探求の糸口が見えているといえる。補註では考古学者根岸の姿を追ってみた。今後の課題として根岸とその蒐集資料の研究を進めさせていきたい。

補註

○補註1 青山文庫には、古墳出土の鉄鏃の図がある。実測図と認められる完成度の高い図で、次の二か所に綴られた資料がある。

☆資料1 『張交帖』(本別・9・24)は挟まれた図で、青山周辺出土の鉄鏃一六本が描かれている。註記は根岸武香であろうが、作図者は「門脇朝香」で三種の大きさの異なる「門脇朝香図」印が四か所にある。図注記と反対方向の押印もあり、整理段階で押印したのであろう。この図には次の遺物が図化されている。

「武蔵国比企郡大谷村字花ノ木古墳出土 今大岡村大字大谷」——細根片刃有棘鏃、細根柳葉有棘鏃など五本 「大里郡青山村楓山古墳」——細根柳葉有棘鏃など四本 「万吉村今吉岡村大字万吉」——平根三角鏃 一本 「大里郡楊井村原新田」——柳葉鏃 一本

☆資料2 『鏃之図』にも七二本の古墳出土鉄鏃が描かれている。九割が青山、大谷、吉岡の古墳からの出土品で、注記は武香の筆である。形を良くとどめた完存品や鏽化の少ないことから、出土からまもなく描かれたと思われる。広根三角鏃 柳葉有棘鏃 細根三角鏃などで、峰・刃・関・棘の細部を表現するなど遺物を理解した書き方である。実寸であり細川紙の上に鏃を置き、輪郭を写した(針書ともいい、古文書を複写する方法と同一)後に鏽などの付着物を書き加えている。但し、一面のみの図で展開や断面の記載はない。資料1・2は現在の実測図と変わらない図で、細部の観察がみられる点などの表現から同一人の手による図と思われる。注記を見ると明治一一年から一三年二月までの出土にほぼ限られることから、本図は武香自身の作図と考えてよいと思う。ただし、「門脇朝香」が武香の署名であるかは確証が得られてない。

○補註2 実測図の作者について青山文庫などには、「温古録」「骨董集」「古瓦摺帳」「古鈴図」「鏃之図」「野本村出土遺物を見る記」などの編集物や草稿に工芸品や土器などの図がまとめられており、その図の精度は高い。これら実測図の作者については未解明だが状況的には根岸武香自身も当然含まれていると思われる。前出しているが作図者の署名にある「門脇朝香」とは武香の可能性があろう。

明治一〇年代には投射法に基づく精密な彩色図の登場があり、読者を驚かせ感心させたと思われる。代表的な出版物が蜷川式胤や柏木貨一郎らの関わった『壬申検査社寺宝物図集』(明治五年)が早く、蜷川の『観古図陶器部』(明治九年)、モースの『大森介墟古物編』(明治一二年)、シーボルトの『考古説略』(明治一二年)、神田孝平の『日本太古石器考』(明治一七年)などがあり、根岸もこれらの図書に目を通していたと思われる。また、実際に絵師や学生たちが描く現場を見る機会が多くあり、根岸家に来泊した柏木貨一郎やシーボルト、モース、五姓田などに手ほどきを受けていたことも考えられよう。このことは、友人の柏木をはじめ、明治一一年三月に黒岩横穴の視察にシーボルトと共に来村した画家五姓田義松、政府から派遣された博物館画工の山名貫義は、根岸の案内で発掘状況を記録している(「黒岩横穴墓群の発掘」資料三・四)『吉見町史』)。翌一二年に来訪したモースらとの出会いを一期一会とする武香の姿勢を考えると、なんのてらいもなく教示を受けたのではないだろうか。

なお、根岸友憲氏のお話では、根岸武香の叔父三蔵が画技に堪能だったとされ手ほどきを受けたかもしれないという。同じく縁戚に広田華州(霞州)という日本画家もおり、根岸とよく同道していたことから資料の図化も依頼していた可能性もあるという。いずれにし

ろ、青山文庫に残される多くの図面類は武香の手になるものから前出の画家に加えて好古家仲間から送られた図と、大野延太郎、野中完一、柴田常恵ら当時の学生たちが残していた図面も含まれているだろう。武香自身が描いたものとして確実な図は資料1に加えて次の二点であると考えている。

☆資料3 明治九年一月七日付 「比企郡大谷村字塚山ヲ掘テ出ル所ノ土偶人ノ図」松浦武四郎へ土偶人の送り状

2013 静嘉堂蔵松浦武四郎コレクション図録には撥雲餘興に掲載された二体の埴輪の略図がある。竹ペン等の硬筆で埴輪の刷毛目まで書き込まれる。

☆資料4 明治十一年三月二九日「上野国勢多郡西大室村前二子古墳発掘出土見取り図、出土品図」と「上野国緑野郡白石村小墳及び古器の図」青山文庫「土器諸図」すゝ58、「骨董集」9-13

この原図は、同年三月群馬県前橋市所在の前二子塚古墳と白石二子山古墳発掘に際して、内務省から現地調査に派遣された柏木貨一郎が作図したものである。その原図を根岸武香が写したものとと思われる。添え書きのメモは武香の筆で、素描は資料1-3と近似している。柏木は群馬からの帰途、翌日三〇日に青山の根岸家に立ち寄り、考古談議をしている。その談話の中で写したものである。柏木は翌四月一日には黒岩横穴に案内され、見取り図の作成や、近隣の大谷などの横穴を巡って四月三日に帰京している。

☆資料5 シーボルトの来村 根岸武香の手記『吉見町史』第八節 横穴墓の出現(3) シーボルトとモースの来村 ―資料(四)―

「明治十一年三月卅日柏木貨一郎来ル 四月一日吉見村穴居跡へ案内 二日大谷村 三日帰ル 四月廿四日内務省博物館山名貫義穴居跡検分トシ来ル、廿五日奥国ヘンリーホンシーボルト

来ル安達鉞七郎 五姓田義松 同校(同行か) 四月廿八日帰ル」

【参考1】「明治十一年三月二九日内務省九等属柏木政矩為検査出張帰路携此図面而来訪因写」資料4については、武香の注記がなされている。なお、前二子古墳の図は届出控図とアーネスト・サトウの二図が知られるが柏木の図は知られていない。根岸の図は柏木図の写であるが前出の二図とは出土遺物の配置の細部が異なっている。さらに個々の遺物のスケッチ図にも差があり、前者に掲載の無い遺物に大刀三本(長さ二尺八寸許幅一寸三分、短刀長さ一尺許)、鏝、歯などの記載があり注意される(「群馬県史資料編3」には二図の比較・考証が示されている)。

【参考2】(明治十一年) 一月二九日 内山作信から小室元長への書簡(小室家文書140-1)には、「前橋二子塚古墳調査の帰途に柏木が根岸家に立ち寄ったこと、シーボルトの黒岩視察の状況」を伝えている。また、柏木の履歴などもみえる。

【参考3】「五姓田義松日記」(神奈川県立博物館1986「五姓田義松関係文書」『明治の宮廷画家―五姓田義松』展図録)では、黒岩横穴での図面作成や、吉見、大谷での作画作業をしたことを記している。しかし、資料5について、同日に来村し調査を行っていた山名貫義については触れられていない。なお、柏木は帰京して直ちに黒岩の所見をまとめたことが、報告文の四月五日付からわかる(資料7)。

【参考4】『五姓田日記 第一』明治十一年 四月二十八日

「二十八日 雨天ニ而他へ出ルコト能スシテ石器又土偶杯ヲ写ス」二八日は根岸家に投宿して四日目である。雨天のため外出できなかったが、おそらくシーボルトとの考古談議が花咲いたのである。翌三月二九日の午後三時頃に根岸家を辞して熊谷へ向かうが、

この日は朝から根岸と共に大谷横穴墓(比丘尼山横穴か)、雷電山を巡っている。なお、友山は五姓田に肖像画の作成を依頼し七月には製作を始め、翌年には完成している。

☆資料6 『吉見町史』(前掲補註2に同じ) 明治一一年四月

根岸から埼玉県第二課への回答

「・・・尤、私朋友柏木貨一郎と申者三月三十日来訪 談話中黒岩村石窟之事物語候処一見致度旨ニテ同所へ参り窟中ノ図等写シ帰府仕候・・・」

☆資料7 『吉見町史』(前掲に同じ) 明治一一年四月二二日付

午前十一時 柏木から根岸への書簡

「過日は参上、数日間以外の御世話に相成り誠に大慶に存候。：：○黒岩村穴居画面並びに愚考本月七日大学の温知会に差出演説仕候処、一同珍奇なりと賞美仕候。翌八日彼の写しを福地へ相廻し、日々新聞に掲載仕候。定めし御一覽の事と奉存候。○右穴居の事に付、黒川真頼古書を相考え上代穴居の風景を考証致、丁数二十枚計の著述一兩日前に出来仕候。右の黒岩村石室図等を相添え一部の書と致し、博物館にて上木(本)致し候積りに御座候。右は大に面白き事に御座候。・・・略」

☆資料8 根岸家文書(平成十九年新出資料)明治一一年四月二二日

付 午後七時発 柏木から根岸への書簡

「・・・管下黒岩村○吉見村○松山古城址○大谷村○福田村右五ヶ所ノ穴居為取該地出張ノ趣ヲ達置翌廿四日又尊家へ可罷出候」
【参考5】資料5～8によると、四月一日、柏木が黒岩横穴の発掘現場を実見して、横穴の実測図を作成していることが窺われる。この時の知見は帝国大学「温知会」で柏木が報告し、その内容が日々新聞にも掲載された(明治一一年四月一〇日、一一日)。本書簡の中

で、柏木は黒岩横穴の報告書として図面を交えた二〇数頁の冊子に仕上げ博物館で造るとしている。複数部造られたものであるうが、この柏木報告本は金井塚ほかの報告文でも未見であり、その存在が知られていなかった。しかし、近年早稲田大学図書館に『黒岩村穴居記』(明治一一年四月五日)が収蔵されていることを知った。黒岩横穴墓研究上の重要資料であり、学史上も貴重な文献である。本書掲載の精度の高い実測図を考証することにより、明治一一年発掘時の黒岩横穴墓の位置推定やその再評価が得られるだろう。

ここでは別な角度から根岸らの黒岩発掘の意義を次に示す。この『黒岩村穴居記』の作成日付からすると、山名の調査前(山名の作図は未見)であり、柏木の手になる作図は確かであろう。しかし、根岸らが作成した原図を参考として成図したことが考えられる。その理由として、根岸家文書中には黒岩横穴の図があり、先の柏木図と根岸家図は全く同一である。この図はB・5版程度の和紙に次の①～③図を集成したもので、現場で描画した測点も認められないことから、本図は原図ではなく、柏木図と同じ複製図と思われる。

武香等の作成した横穴の原図は所在不明だが①床平面図、②玄室主軸方向の断面図 ③玄室横断面図 ④群別水平分布図の四種は製作していたと考えざるを得ない。同年までに刊行されている考古学書を読破していてもその努力や熱意に驚く。少なくとも現地調査では実測のために「水準機や丈量縄、平板、定規など」は必須である。これらの器材は新政府が進めていた地租改正に伴う地籍調査に使用される道具でもあり、根岸の立場であればその援用も出来たか、あるいは大工棟梁でもあった柏木らの知られていない応援もあったかもしれない。／文 齊藤貞夫 1970 「明治期の吉見百穴に関する資料」『埼玉史談』17・3 / 文 金井塚良一 1978 「第8章 横

穴墓の出現』『吉見町史』上巻／㊦金井塚良一 1980「吉見横穴墓群の研究」校倉書房／㊦神奈川県立博物館 1986「五姓田義松関係文書」『明治の宮廷画家―五姓田義松』展図録／㊦早稲田大学図書館(請求記号 Call No., リ 11 02448)「柏木貨一郎 1878『黒岩村穴居記』内務省用便箋使用 自筆本彩色 和装 本文 21頁」／㊦大沼宜規 2012「ある考古家のコレクション 根岸武香と青山文庫」国立国会図書館月報 No. 620／㊦神奈川県立歴史博物館 2008『五姓田のすべて―近代絵画への架け橋―』展図録
 青山文庫より「温古録」「骨董集」「古瓦摺帳」「古鈴図」「鏃之図」を中心に閲覧した。オープンアーカイブとして、国立国会図書館の web でも一部閲覧できるので一見を勧めたい。

㊦「鏃之図」から、「集古」第 6号(1900)に根岸武香所蔵の鉄鏃が掲載されている(本報告 4頁図 4)

□広田華州(～1921) 日本画家 根岸武香と同道することが多かった集古会員でもある。尾張藩の質屋の出で四谷に住まいしていた。根岸の報告文中の挿絵として「四方寺板碑抱きの榎」「房州日本寺の大仏」等を描いている。また、『考古』によると、根岸は古墳出土品など所蔵の珍品を広田に描かせた画集出版の用意をしていたと伝えている。㊦根岸武香 1902「四方寺印の考」『考古界』第 1編第 3号／㊦山中共古 1902「房州考古巡礼」『考古界』第 1編第 7号／㊦1900「集古会の事業」『考古』第一編第七号

○補註 3 明治三十二年(1899) 十月二三日 根岸武香は王子の西ヶ原貝塚の発掘現場を見学(調査)している。発掘は考古学に傾倒していた二条基弘侯爵が蜂須賀正韻侯爵、浅野長之侯爵と共に坪井正五郎・蒔田槍次郎の指導を得て行ったもので、武香は坪井や蜂須賀ら

に招かれて訪れたものであろう、当日は帝国大学人類学教室からは坪井のほか鳥居龍蔵、人見秀明、野中完一らも赴いている。

翌年十一月十九日には小杉温邨・島居龍蔵・根岸伴七(武香の息子)の案内で、蜂須賀・東久世侯爵等七人を連れ吉見百穴から根岸家を訪問し歓待を受けている。小杉は根岸家の古物陳列場を「稽照館」と呼び、土器・石器・金属類など数百点の資料を縦覧したと記している。㊦小杉温邨一九一〇『千とせのあき』―小杉等の吉見・青山の訪問記(私家版) 根岸家所蔵本(註 27参照)

㊦1990「貴公子の貝塚発掘」『東京人類学雑誌』第 164号

□二条基弘(1859～1928) 華族 貴族院議員 考古学・人類学に強い興味を抱いていた。明治三十五年二月に「華族人類学会」を組織 した。また、考古資料を主とする資料蒐集を組織的におこなっており、膨大な蒐集資料を「銅駝坊陳列館(二条人類学標本陳列室)」に収蔵していた。この実務をおこなっていたのは野中完一である。

なお、初期の考古学者たちは蒐集家でもあり、第一に、土器、石器、土偶などの遺物を蒐集する所から研究を始めているので、勢い遺物採集のため遺跡を掘り起こしての採集が大正期まで盛んにおこなわれた。また、多くの学会も遺物採集のための遠足を催していた。採集された大量の資料は大学をはじめ個人等の陳列室などに収められていた。先に紹介した二条基弘の創設した「銅駝坊陳列館」、阿部正功の「土俗陳列館」、関保之助の「稽古館」、荒木潮湖の「百物館」、江見水蔭の「太古遺物陳列所」などが知られる。地方でもこの時期多くの遺物が掘出されていたことが想像される。特に江見は関東各地の貝塚遺跡より蒐集した膨大な土器、石器を「太古遺物陳列所」に収蔵していたが、没後に、二万八千点に及ぶほとんどの資料が散逸してしまったという。

□野中完一(1892) 東京人類学会会員 坪井の指導で人類学教室調査を手伝う。千葉方面の貝塚調査などが多かった。

□江見水蔭(1869~1934) 古銭・遺物の蒐集採集家 太古遺跡研究会を主宰し、考古遺物の採集目的の発掘をおこなった。明治二十年十月十五日吉見百穴の発掘を見物している。

☒水鳥 1907 『考古的遺物陳列場』『考古界』第6編5号

☒杉山博久 1939 『魔道に魅入られた男たち―揺籃期の考古学会』雄山閣出版 / ☒国立歴史民俗博物館 1998 『収集家一〇〇年の軌跡―水木コレクションのすべて―』展図録

○補註4 集古会は、古器物の展示を行い、歴史や美術工芸的な談議を通じて会員の懇親と、古器物への認識を深めようとした会で、明治二九年に発足し昭和一九年まで継続した。三五年までは根岸武香が会長として、運営面の援助をしていた。初期の考古学者も多数参加していたが、武香の没後は歴史工芸方面への関心が高まっていたようである。特に山中共古(笑)は長く会の中心にいた。

□山中笑(1850~1928) 共古は号 牧師 民俗・歴史学者

大野雲外、広田華州と同じく集古会の幹事で、会の運営に深く関わっていた。牧師でもあり山梨や静岡で布教しているが、任地の風俗を丹念に書きとめるなど貴重な記録を残している。また、民俗学観点から多くの著作を成しており、『共古日録』には挿図と共に民俗行事やさまざま事物まで描かれている。

東京の山の手に住んでいる頃、山の手の故事を語ると称して「山の手月夜会」を開催し、会の議題に関係のあるものを持参させるなど趣向を凝らした談話会としていた。根岸武香や広田華州らも明治三五年一月二五日の初会合から出席している。

明治三三年九月一六日(二二日)、房州の古物巡見に、根岸武香・須藤開邦・広田華州・山中の四名で出かけているなど、気心の知れた仲間であったことが知られる。

☒山中共古 1995 『共古随筆』東洋文庫 588 平凡社 / ☒広瀬

千香 1973 『山中共古ノート』第2集 青燈社 / ☒山中笑 1903

『故根岸武香君の時に就いて』『東京人類学雑誌』第207号 /

☒山中共古 1902 『房州考古巡礼』『考古界』第1編7号 / ☒根

岸武香 1902 『房州考古巡礼補記』『考古界』第1編第10号 / ☒

守屋幸一 2012 『明治・大正期の人類学・考古学者伝 板橋区立郷

土資料館蔵 石田収蔵氏 旧蔵絵はがき資料集』板橋区立郷土資料館

○補註5 丸瓦(第17図11・92・図版15)は「Y」字状の刻印であるが、國學院大学「柴田常恵拓本資料」中に同一印と思われる資料箱番号6封筒番号9・9があった。この拓本(第17図参考1に図示)には「武蔵比企郡亀井村泉井 比留間顕典氏蔵」と注記があり、他の拓本註記から大正十三年三月の採拓と考えられる。押印の裏面側の長さから軒丸瓦と思われる。なお、鳩山町教育委員会の手島氏によると新沼窯跡でも同一印が確認されているという。

(本文・補註 新井 端)

版 図



熊谷市指定文化財「根岸家長屋門」この建物の一部が菟古舎に使われた



旧「菟古舎」で展示された縄文土器と展示架



旧「菟古舎」に使われた建物の一部

図版 1



1



2



3



4



5



6



7



8



9

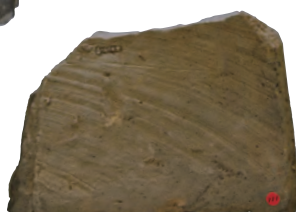


10



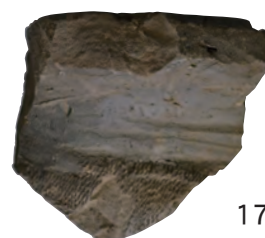
11

12



13

14



16

15

17

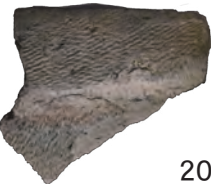
図版3



18



19



20



21



22



23



24

軒平瓦18~24



25



26



27



29



30(40と同)



28

图版 5



31



32



33



34



35



36



文字瓦（平瓦） 31~36



37



38



40 (30と同)



39



41



42



43



44



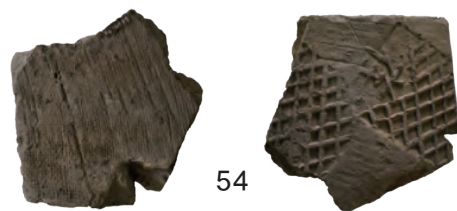
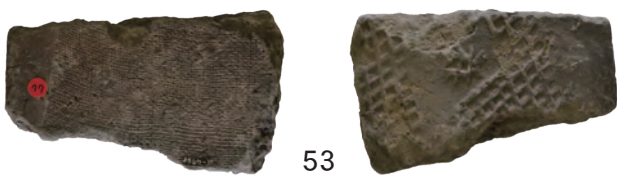
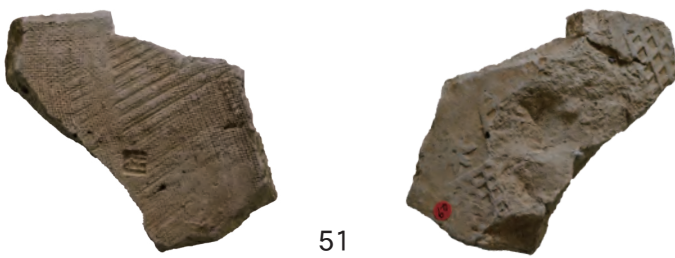
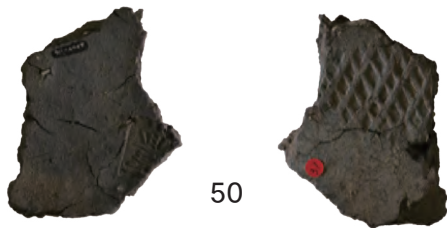
45



46



图版 7



文字瓦 (平瓦・丸瓦) 47~54



55



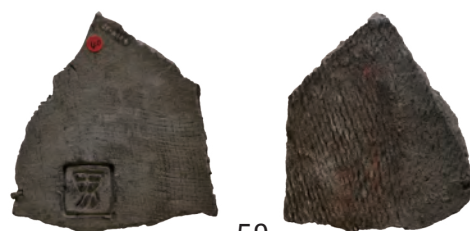
56



57



58



59



60



62



61



63

图版 9



64



65



66



67



68



69



70



71



72



73

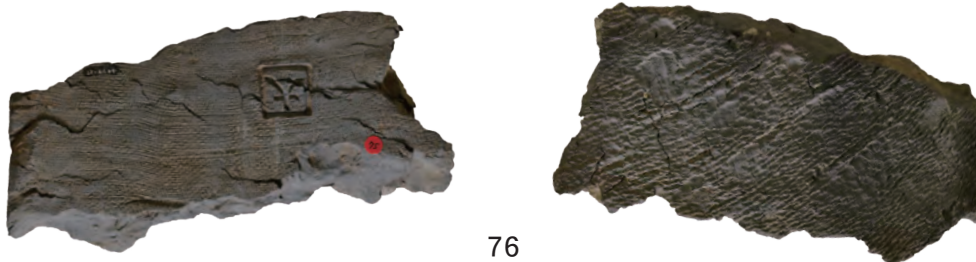


文字瓦 (丸瓦・平瓦) 64~73



74

75

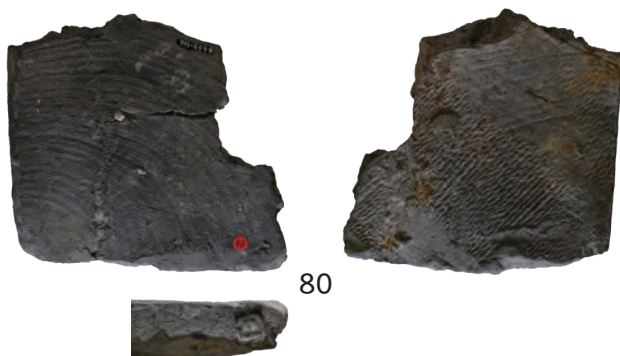


76



77

78



80



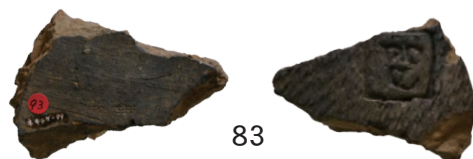
79



81



82



83

文字瓦 (平瓦・丸瓦) 74~83

图版11



84



85



86



87



88



89



90



91



92



文字瓦 (平瓦·丸瓦) 84~92



93



94



95



96



97

图版13



98



99



100



101



102



103



104



105

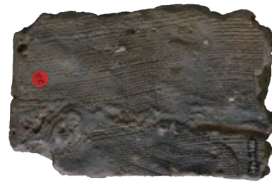


106





107



108



109



110



111



112



113



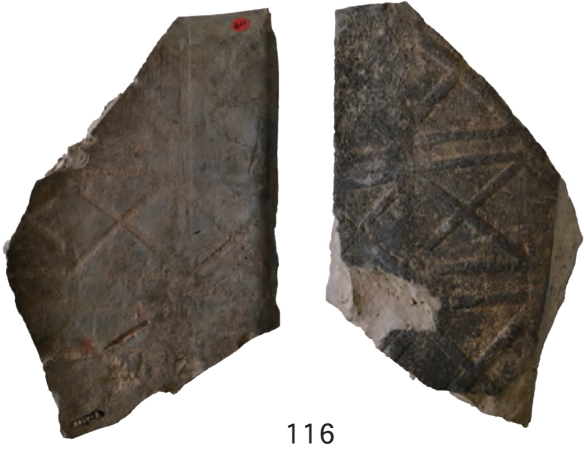
114



115



图版15



116



118



119



117



120



11-90



11-91



11-92



6-41

「秩父郡」



5-31



5-32



5-33



5-34



5-35

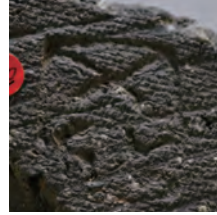
「比企郡」



5-36



6-37



6-38



4-30・6-40



6-39

「幡羅郡」



6-41



6-42



6-43



6-45



6-46

「豊島郡」



6-44



7-47



7-48



7-49



7-50

「荏原郡」



7-51



7-51



7-52

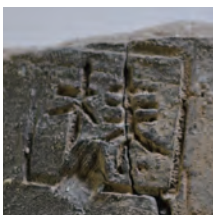


7-53



7-54

「榛沢郡」



8-55



8-56



8-57

「男衾郡」



8-58



8-59

図版17



8-60

「橘樹郡」



8-61



8-62



8-63

「埼玉郡」



9-64



9-65

「白方郷」



9-68



9-67



9-69

「高麗郡」



9-70



9-71

「横見郡」



9-73



9-72

「大井郷」



10-74



10-75

「大里郡」



10-76

「入間郡」



10-77



10-78



10-79

「那珂郡」



9-66



10-80



10-81

「多摩郡」



10-82

「賀美郡」



10-83

「都築郡」



11-84

「児玉郡」



11-85

「田」



11-86



11-87



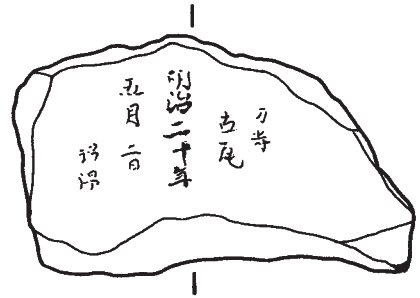
11-88



11-89



口分寺
古瓦
明治二十年
五月二日
所得



第4図30・第6図40



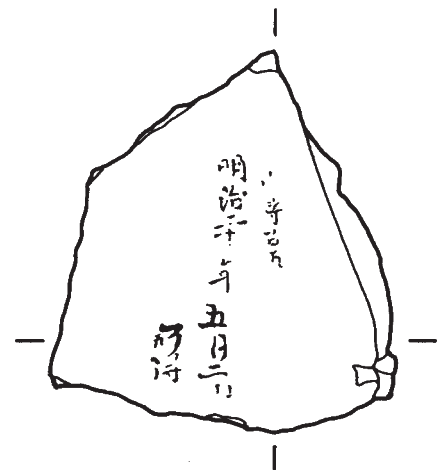
国分門
明治二十年
五月二日得



第7図52

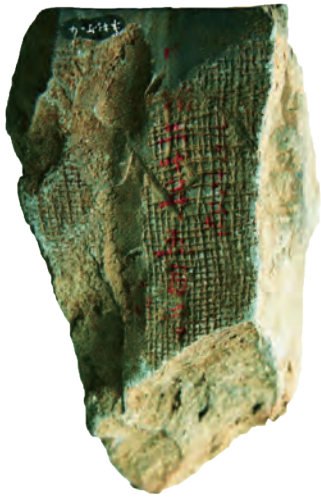


口寺古瓦
明治二十年五月二日
所得

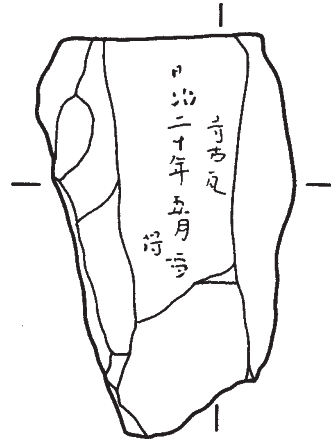


第8図58

図版19



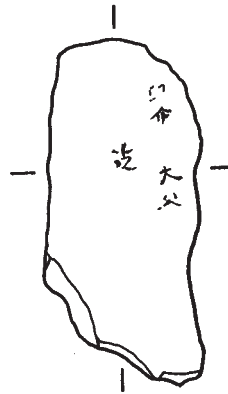
明治二十年五月二日
得
寺古瓦



第 11 図 84



古
企
大口



第 12 図 97

熊谷市史編さん関係者一覧(敬称略)

熊谷市史編さん委員会

事務局 (平成二十六年年度)

委員長 村田 安穂 早稲田大学 名誉教授
委員 飯塚 好 民俗研究者

熊谷市教育委員会
教育長 野原 晃
教育次長 米澤 ひろみ

野澤 久夫 熊谷市議会
黒澤三千夫 熊谷市議会

社会教育課長 岩上 精純
市史編さん室

小野美代子 熊谷市文化財保護審議会

担当副参事 森田 安彦

柿沼 幹夫 国士舘大学非常勤講師

副課長兼室長 新井 端

北村 行遠 立正大学 教授

主 査 蛭間 健悟

宮瀧 交二 大東文化大学 教授

嘱 託 栗原 健一

平井加余子 熊谷市郷土文化会

水品 洋介

野口 幸雄 熊谷市自治会連合

大塚 美紗登

武藤 仁 公募委員

臨時職員
井出 英美子

高井 直美

時田 史子

松葉 弘美

望月 潤一

滝沢 きよ子

萩原 沙織

熊谷市考古専門部会(平成二十六年年度)

専門委員 柿沼 幹夫

専門調査員 細田 勝

吉田 稔

関 義則

井上 尚明

浅野 晴樹

特別調査員 清水 康守

協力員 藏持 美弥子

熊谷市史調査報告書 第1集

青山根岸家資料報告(1)

—考古資料・古瓦—

平成二十七年三月二十五日発行

編集・発行

熊谷市教育委員会 社会教育課 市史編さん室

〒360-0201

埼玉県熊谷市妻沼東一―(妻沼展示館内)

電話 〇四八―五六七―〇三五五

印刷 株式会社 博文社

埼玉県熊谷市本石一―一三四

電話 〇四八―五二―三〇六三

熊谷市 © 2015.3

